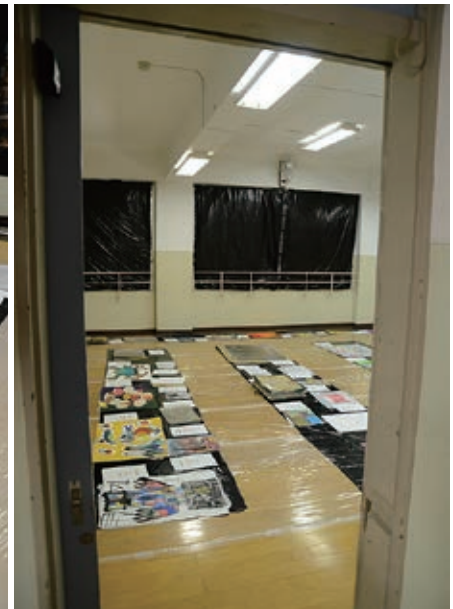
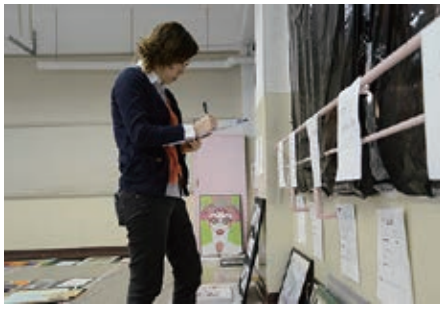
アール・ブリュットへ
その道程と幸福について

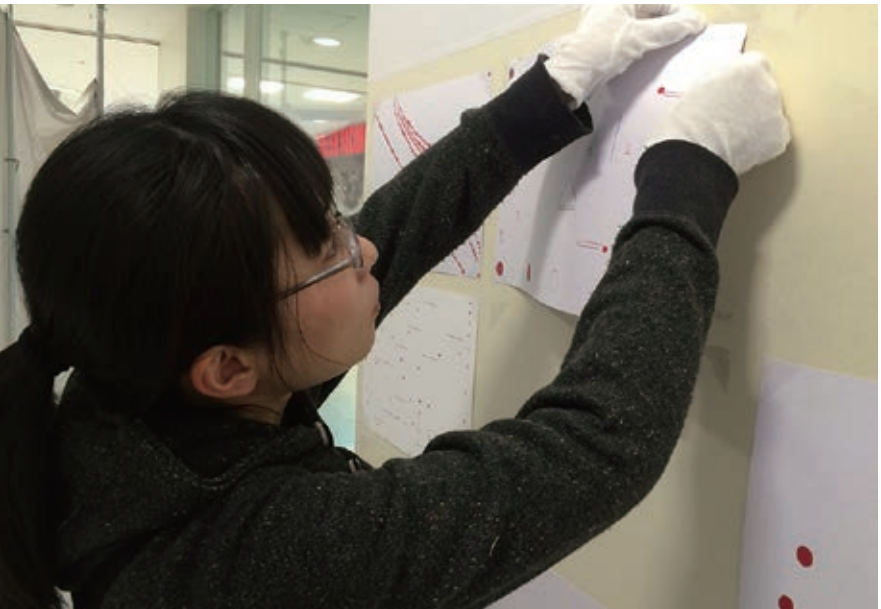
Aim for ArtBrut
The Document of happy relationship
born from the creation of ArtBrut works

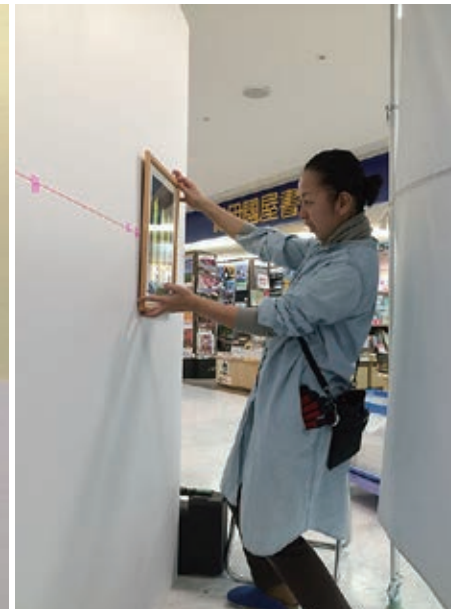
F
Break room





esquilo branco





PARCO

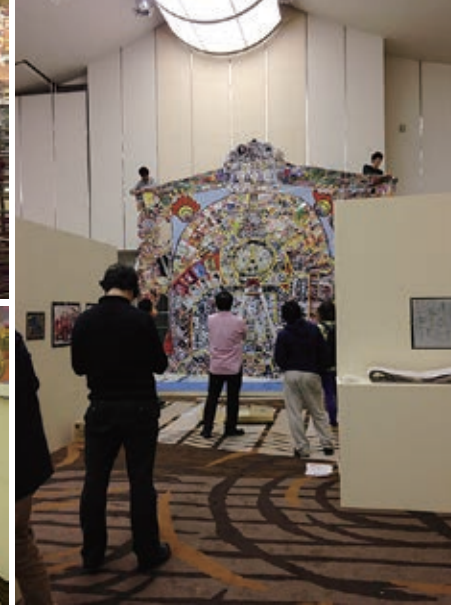
ナカ代わりに
ママチャリ乗って

ORIGINAL

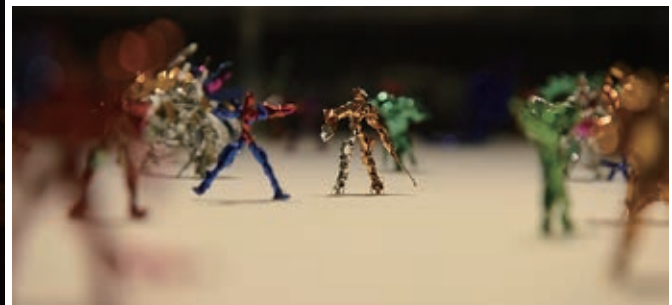
100
ATLANTA

「アール・ブリュットへ その道程と幸福について」

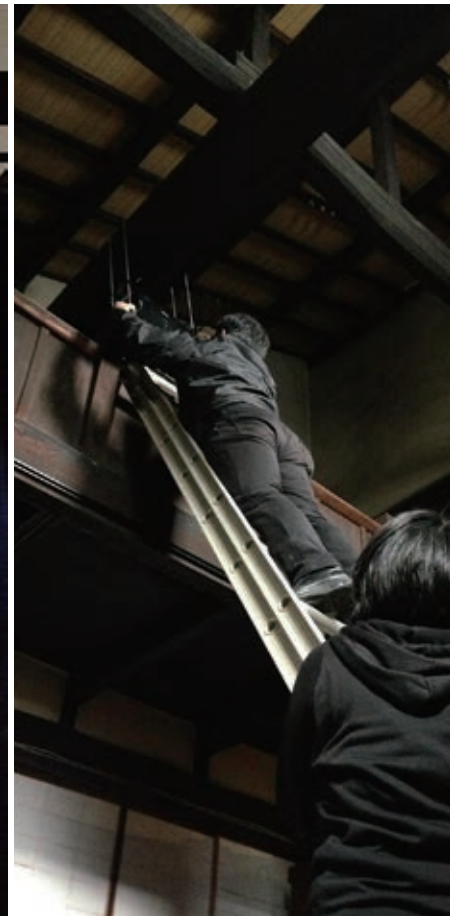
2014年12月14日（日）
主催：アール・ブリュット



ユートピアの
創造主たち



田島征三



旧八幡郵便局
2015.2.21.-3.22.
旧八幡郵便局

アール・ブリュット★アート★日本2
大江正章×初雪食堂×

アール・ブリュット★アート★日本2

時計 メガネ 宝石
タカモリ

尾賀商店
3

目次……020
ごあいさつ……022
本書の構成……023

Act1「見つける」

アール・ブリュット作品全国公募　開催概要……026
担当者のねらい　小川由香里……027
運営の現場……028
［評価の視点］医療・福祉関係者との共働 その 1　末安民生さんの場合……032
［評価の視点］医療・福祉関係者との共働 その 2　笠原吉孝さんの場合……034
［評価の視点］医療・福祉関係者との共働 その 3　田端一恵さんの場合……035
［評価の視点］医療・福祉関係者との共働 その 4　六車由実さんの場合……036
［評価の視点］医療・福祉関係者との共働 その 5　釈徹宗さんの場合……038
「作品発掘のプロセスについて語り合う」 作者、支援者、公募事務局を交えた座談会……040
審査員の声……046
青森県八戸市・青南病院現地レポート —訪ねる・調査することの意義—　藁戸さゆみ……054
事務局日誌……056

Act2「観せる」

Act2-1 多様な主体と共働する 3 つの展覧会

アール・ブリュット ゾーン パルコ　開催概要……062
担当者のねらい　安藤恵多……063
［評価の視点］商業施設との共働 その 1　大津パルコの場合……064
［評価の視点］商業施設との共働 その 2　島村楽器の場合……066
［評価の視点］商業施設との共働 その 3　雅楽（うた）・スプーンライフオンワークスの場合……068
制作日誌……071
アートディレクターの視点　井上多枝子……072
広報デザイナーの視点　中崎航……074
展覧会レビュー　竹内厚……076
展覧会の現場と実際を語る座談会……078
制作日誌……082

アール・ブリュット ユートピアの創造主たち　開催概要……084
担当者のねらい　横井悠……085
［評価の視点］全国規模の福祉ネットワークとの共働 その 1　田中正博さんの場合……086
［評価の視点］全国規模の福祉ネットワークとの共働 その 2　野澤和弘さんの場合……088
制作日誌……090
アートディレクターの視点　小林瑞恵……092
展覧会レビュー　清水有香……094
展覧会の現場と実際を語る座談会……096
制作日誌……100

アール・ブリュット☆アート☆日本２　開催概要……102
担当者のねらい　藁戸さゆみ……104
［評価の視点］地域コミュニティとの共働 その１　上田洋平さんの場合 ……106
［評価の視点］地域コミュニティとの共働 その２　高橋伸行さんの場合 ……108
［評価の視点］地域コミュニティとの共働 その３　小暮宣雄さんの場合 ……110
制作日誌……113
近江八幡地域との共働 ショーウィンドウ展示の試み ……114
「地域資源の再発掘」 小山田徹さんインタビュー……118
展覧会レビュー　竹内厚／米津いつか……120
スイス・フランス訪問レポート ―日本にヴェルフリ作品を迎えるにあたって考えたこと―　田端一恵 ……124
展覧会の現場と実際を語る座談会……126
制作日誌……135

Act2-2「観せる」を「支える」こと ―アール・ブリュット☆アート☆日本２におけるボランティアの運営―
担当者のねらい　木元聖奈……137
ボランティアの運営……138
「観せる」を「支えた」ボランティアスタッフ ……140
現場を支える人々 ―ボランティアの組織運営について―　山口洋典 ……148
制作日誌……150

Act3「語る」

Part1　田口ランディ×嘉田由紀子 ……154
Part2　きたやまおさむ ……160

まとめ

広報の取り組みついて　川那辺香乃……168
ドキュメント編集に携わって　木元聖奈……169
総括……170
［資料］パブリシティ一覧／実施体制 ……172

本文中の略称について

実行委員会	アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
NO-MA	ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
社会福祉法人グロー（GLOW）	社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
芸文	社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部文化芸術推進課

ごあいさつ

アール・ブリュットの魅力発信に取り組んでいる、または取り組みに賛同いただいている団体からなる当実行委員会が、昨年度から継続して本事業を実施し、大きな成果が残せましたこと、貴重な作品を出展いただいた皆様をはじめ、ご協力をいただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

2014年（平成26年）に開館10周年を迎えたボーダレス・アートミュージアムNO-MA（以下、NO-MA）は、これまでに、障害者の芸術活動の中から見出された優れた芸術作品を日本のアール・ブリュットとして評価し、国内外に発信する取り組みを行ってきました。こうしたNO-MAの実践を礎にして、本事業では、我が国の芸術文化の発展と障害者の芸術活動の推進を目的に、国内外の多様な主体の皆様と共働して、日本のアール・ブリュットの魅力発信に取り組んでまいりました。

アール・ブリュット作品との新たな出会いを目的に実施した「アール・ブリュット作品全国公募」には、47の全都道府県から2,319名、約4,600点もの応募があり、国内での関心の高まりと活動の拡がりを実感しました。また、「アール・ブリュット☆アート☆日本2」展では、82名のボランティアの方々がそれぞれの言葉でアール・ブリュットの魅力を発信してくださいました。地域の方々とともに、作品の魅力を発信できたことは大きな喜びであります。

本書は、一年を通じた事業展開と併走して事業の実施プロセスを取材、記録し、アール・ブリュットがつなぐ様々な人や出来事、アール・ブリュットに関する考察をとりまとめたものです。本事業での取り組みが、今後のアール・ブリュットの振興をはじめとする芸術文化振興の一助となれば幸いです。

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会　実行委員長
北岡賢剛

本書の構成

本事業はアール・ブリュットを軸とした、主に三つの連携・共働モデルの創出に取り組んできた。

第一に、医療・福祉現場での作品調査機能。これまで芸術分野の評価が届かなかった医療・福祉分野の関係者と共働し、優れた芸術的価値のある作品を調査することを目的に、全国公募事業を実施した。

第二に、多様な主体との連携、および評価を構築する機能。芸術の定義が一層多様化する現代において、従来の美術の評価ではなく多様な主体と共働し、それぞれの評価の視点を活かした三つの展覧会（P59～ Act2「観せる」参照）を開催した。同時に、ラジオ番組「Glow ～生きることが光になる～」（KBS京都ラジオ／提供：社会福祉法人グロー（GLOW））における多様な識者との議論を通じて、第三者評価の視点も獲得した。

第三に、国内外での展示発信機能。日本の芸術文化の発展という観点からも重要な課題とされている日本のアール・ブリュットを、国内外で広く展示するため、全国公募入選作品を「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」、「アール・ブリュット☆アート☆日本2」に出展。加えて、将来的な海外展参加の契機を創出した。また、「アール・ブリュット☆アート☆日本2」におけるアドルフ・ヴェルフリの招待でアール・ブリュット・コレクション（スイス・ローザンヌ市）との交流を発展させた。

本書はこれらの事業展開に可能な限り準じるよう、以下の様に構成した。

Act1「見つける」では、全国公募におけるアール・ブリュット作家・作品の発見から展覧会開催まで、一連のプロセスを記録した。また、医療・福祉分野との共働によって成し遂げた調査機能の向上について、評価ポイントを整理した。

Act2「観せる」では、多様な主体と共働した三つの展覧会の制作プロセスを紹介する。同時に、従来の美術の評価のみではなく、多領域の視点を活かした展覧会を作るための評価ポイントを整理した。とりわけ、「アール・ブリュット☆アート☆日本2」の実現に欠かせないボランティア組織の運営については別途詳細を記した。

Act3「語る」では、本事業と連動して公開収録した2本のラジオ番組「Glow ～生きることが光になる～」の内容を掲載した。この「語り」を、アール・ブリュットのさらなる発信へつなげると同時に、アール・ブリュットが生み出す幸せな社会を展望するための一つの視点として参照されたい。

Act1
「見つける」

全国の優れた芸術的価値のある作品の発掘を目的に実施した「アール・ブリュット作品全国公募 創造のカタチ、公募します」。運営に携わったスタッフは、どのようにしてアール・ブリュット作家および作品を発見し、展覧会開催にまでつなげてきたのでしょうか。ここでは、芸術と医療・福祉分野の共働による調査・評価機能の向上を観点に、その一連のプロセスを紹介します。

開催概要

アール・ブリュット作品全国公募
創造のカタチ、公募します。

全国にまだまだいる創作者に一人でも多く出会い、国内外へと広く紹介することを目的として、既成の枠にとらわれない自由でありのままの創造のカタチを全国から公募した。

作品受付期間
2014年9月16日（火）～10月31日（金）

応募の条件
・主に「障害のある人たちの表現」を対象とするが、特に制限なし。
・既成の枠にとらわれない自由でありのままの表現から創出された作品を募集。
・自薦他薦は問わない。

作品・作家の特徴
・暮らしの中にある、ありふれた素材を使って日々作り続けている。
・誰から教わったわけでもなく独自の創作を行っている。
・作品から強いこだわりが感じられる。
・今まで一度も見たことがないような独創的表現。
・創作と言えるのか解らないが行為の結果生み出されるもの。
・よくわからないが、何だかすごい。

種類
平面、立体、その他、表現のジャンルは問わない。

大きさ
郵送が可能なもの。但し、発送が困難、変形や破損の危険がある作品は写真資料での応募も可能。

応募料
無料。作品の送料は応募・返却とも応募者負担。入選作品の作品返却代は事務局負担。

条件
過去に受賞歴がない作品。受賞が無ければすでに発表した作品も応募可能。入選作品は展覧会での展示、情報誌等メディアへの作品画像掲載あり。共同制作の作品は対象外。

入選作品
2015年2月6日～8日開催「アール・ブリュット　ユートピアの創造主たち」展、2015年2月21日～3月22日開催「アール・ブリュット☆アート☆日本2」展のいずれかで展示。また、2016年パリ市立アル・サン・ピエール美術館（フランス）、2017年アール・ブリュット・コレクション（スイス）で開催予定の展覧会の出展候補作品とする。

審査員
田島征三（美術家、絵本作家）
保坂健二朗（東京国立近代美術館 主任研究員）
マルティーヌ・リュザルディ（パリ市立アル・サン・ピエール美術館 館長）
マリオ・デル・クルト（アール・ブリュット・コレクション特任理事、写真家）
小林瑞恵（社会福祉法人愛成会及びNPO法人はれたりくもったりアート・ディレクター）
田端一恵（社会福祉法人 グロー（GLOW）法人本部企画事業部 次長）

応募総数
2,319名　約4,600点　47都道府県

選定数
78名　24都道府県

担当者のねらい

小川由香里（社会福祉法人愛成会）

一社会福祉法人が、大規模な全国公募事業の事務局を担うことは、初めてのことの連続である。募集枠の策定から広報、作品の受付から審査、展覧会出展への橋渡しから作品の返送まで。このどれをとっても未知数な状況の中で、とりわけ意識してきた点は、「福祉だからこそ担える新たな公募とは何か」という問いに向き合うことだ。

まず、募集枠の策定において、障害の有無、作品のジャンル、自薦他薦を問わないようにした。その理由は、自分自身や身近な家族や友人、あるいは支援の対象者の表現の芽に対して、できるだけ多くの人々のまなざしが向けられるような状況を作ることにある。そして実際に多様な応募を集めるためには、広報が重要である。ここでは、美術館やギャラリーのみならず、全国の福祉系ネットワーク（造形活動に力を入れている福祉施設、自治体や特別支援学校など）への呼びかけと、精神科医療系のネットワークとの共働も重視し、周知に務めた。また実際の応募にあたって、旧東中野小学校（東京都中野区）を作品の保管・審査会場として活用し、あわせて多くの作品を丁寧に管理できるよう、応募用紙、作品、梱包材などのデータを一元化、展覧会への移送や応募者への返送などのルール化を徹底する。また、障害のある人が自身で応募する際は、事務局で記載をサポートするなどの体制も整えたい。

応募用紙に込められた作者やその家族、施設職員などの切実な思いに出会う中、改めて感じたことがある。それは、アール・ブリュットという領域には、これまでにすでに有名になった作者や専門のアートディレクターや関連施設だけではなく、今まさに生の衝動が作品へと結実する瞬間を見守り続けている家族や支援者の姿が全国各地に数多く存在するという、当たり前の事実である。しかし、そういった背景を丁寧に受け取りつつも、同時に「作品」としてしっかり評価をする目はやはり必要である。審査は３段階で実施し、一次審査を事務局による書類審査、二次審査と最終審査は作品現物での審査とする。最終審査を担当した審査員は専門分野が異なる６名に依頼し、国際的かつ多様な視点での審査を目指したい。

このように本事業では、個々人の営みに丁寧に向き合うケアとホスピタリティという、「福祉」だからこそ培ってきたまなざしをしっかり交えながらも、安直な平等主義や漫然な評価に陥らず、展覧会という広く世に問うアウトプットへとつなげる上での妥協を辞さない、的確な評価を行える仕組みづくりも重視する。

アール・ブリュット作品全国公募

運営の現場

予想以上に大きな反響を得た公募の準備段階から展示まで、運営のプロセスについて事務局を担当した社会福祉法人愛成会小川由香里さんに聞きました。

① 準 備　募集要項の作成

　できるだけ多くの応募を得られるように設定した。障害の有無、作品のジャンル、自薦他薦を問わず、原則現物審査だが郵送できないものは写真での応募も可とし、送付作品数には制限を設けなかった。その結果、1名が数十点の作品を出すこともあれば、1点のみでの応募もあった。応募者1名あたりの作品数について、審査員から作品が1点のみの場合は審査が難しく、選出作品数に制限がある場合などは不利になるため、複数点での応募が望ましいという意見があった。同様に、写真のみの応募についても審査が難しいという声があった。いずれの場合でも、応募のハードルを下げることと、作品を選出することのバランスについて検討の余地がある。

　作品に添付する応募用紙は1作品1枚とし、作品が複数ある場合はコピーも可とした。

↓

② 広 報　チラシ配布先の検討

　公募では告知が最も重要となるため、何度も議論を重ねた。47都道府県を網羅し、年齢にも偏りが出ない応募となるようにチラシ送付先を選定した。対象は全国の行政、社会福祉協議会、特別支援学校、YMCA、精神科病院、社会福祉施設、美術館、ギャラリーなど。福祉施設は膨大な数があり、造形活動に力を入れている施設を中心に離島の施設なども探して絞り込んだ。精神科病院は、日本精神科看護協会の協力を得て、全国の精神科病院に配布される会報誌にチラシを同封してもらうことができた。美術館、ギャラリーはNO-MAの展覧会案内とともに郵送したほか、館のメールニュースなどでも案内した。約18,000件を送付した結果、全国47都道府県すべてから応募を得た。年齢層も2歳から80代までと幅広く集まった。これまでの作品調査や展覧会で出会ったことのない作者・作品が多く、新たな出会いに恵まれた結果となった。

③ 作品受付1　問合せ対応

応募受付直前の９月頃から問合せ件数が多くなった。問合せ事項は日々記録し、事務局スタッフで共有。想定外の質問や、前例での判断が難しい場合には随時検討会議を行い対応にあたった。額装について応募要項に記載していなかったため問合せが多かった。他には、1点だけでも応募可能か／大きさの制限／作詞したものは応募できるか／デジタルデータで制作したものをUSBで送付してもよいかという問合せがあった。大きさやジャンルの制限がある公募も多く、今回の全国公募が幅広い作品を受け付けるということが伝わっていることを実感した。また、障害のある方がご自身で応募する場合に、応募用紙の記載などが難しいといった状況が伺える問合せもあり、事務局で記載をサポートすることもあった。審査結果通知後の問合せについては、事前に質問・回答を想定しリストを作成した。

④ 作品受付2　作品受付・選考会に向けた準備

応募作品の保管・審査会場は旧東中野小学校（東京都中野区）を利用した。たくさんの作品を受付から返送まで間違いなく管理できるように、応募用紙・作品の確認／作品・梱包材に通し番号を付ける／発送方法（宅配業者・金額等）の記録／データ化までのフローとルールを作成した。応募用紙には単なる制作背景だけでなく、作者やその家族、施設職員などの切実な思い、作品にまつわる詳細なストーリーが綴られているものもあり、公募への強い想いや、作品への愛情を感じることが多くあった。郵送が難しい方や福祉施設から複数の作品を応募する場合に作品を直接会場まで搬入されることもあった。受付初日には11名の作品が届いた。その後は1日あたり数名から30名程度だったが、応募受付最後の1週間は1日あたり150～500名の作品が届き、使用する教室数を増やし、スタッフも増員して対応した。

↓

⑤ 審 査　審査会の開催

審査は３段階で実施し、一次審査を事務局による書類審査、二次審査と最終審査は作品現物（一部写真のみの応募もあり）での審査とした。応募用紙は審査員が自由に読めるように作品と共に配置した。審査員はそれぞれ自由に会場を回り、必要に応じて事務局スタッフがメモや作品展開のサポートを行った。最終審査を担当した審査員は専門分野が異なる６名に依頼。うち２名は、2016年以降に入選作品を出展する予定のパリ市立アル・サン・ピエール美術館館長マルティーヌ・リュザルディ氏、アール・ブリュット・コレクション特任理事マリオ・デル・クルト氏であり、国際的かつ多様な視点での審査を目指した。

↓

⑥ 展 示　入選作品の展示

入選した78名の作品を「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」、「アール・ブリュット☆アート☆日本2」のどちらで展示するかについては会場の条件や、様々な表現がバランスよく展示できることなどを考慮して決定した。作者への入選の連絡と同時に、展覧会に向けて作品キャプション作成のため作者紹介文の確認を行った。作者本人や応募者が作成できない場合には、事務局で制作背景などをヒアリングし紹介文をまとめた。いずれの展覧会も滋賀県内での開催となったが、全国から入選作家と家族、支援者などが多く会場を訪れ、自身の作品の前で記念撮影をする場面もあった。

↓

⑦ 作品返送　作者のもとへ

予想をはるかに超える作品応募があり、作品返送が当初の予定より大幅に遅れることとなったため、審査会後に作品返送の遅れに関する案内状を送付し、その後返送作業を随時行った。また、入選作品は展覧会終了後に返送した。

全国公募の事務局の状況は一言で言うと壮絶だったが、これほどたくさんの作品と一度に出会う機会は他になく、学ぶことの多い機会となった。アール・ブリュットが多くの注目を集めていることや、海外に日本のアール・ブリュットを紹介するという重要な場に関わっていることを強く感じた。今回の公募を通して考えた運営のポイントは、「告知はしっかり」「作品受付は短期間に」という2点。告知においては時間をかけてリストを作成した効果が得られた一方で、作品受付期間は長過ぎた。作品は最後の1週間に集中して届き、一時的に受付作業が飽和状態となった。スタッフ手配なども考慮すれば短期間に集約すべきだったと言える。作品受付終盤から審査会までは事務局スタッフの他、社会福祉法人愛成会の職員、NO-MA学芸員などが加わりサポートいただいた。

アール・ブリュット作品全国公募 事務局
小川由香里（社会福祉法人愛成会）

公募結果

応募数	2,319名　約4,600点
一次審査通過者	2,319名　／　二次審査通過者　364名
最終審査通過者	78名（うち2名は出展辞退） 朝原正夫、朝本俊生、渥美圭亮、有川剛司、有瀬龍介、ANNA、飯岡砂登美、五十嵐朋之、磯野貴之、市川洋行、稲田萌子、植野康幸、内田拓磨、岡崎莉望、岡部亮佑、尾崎聡彦、香川定之、金杉匠蔵、川越壮真、喜舎場盛也、木村全彦、蔵田亮平、栗原和秀、河野大典、小林龍介、酒井友章、佐々木華枝、シノタケ、柴田鋭一、柴田龍平、清水ちはる、正堂恵美子、出納智則、菅原康匡、助川実、清野ミナ、添野寛之、曽祇一晃、高須賀優、高橋真二、谷上グレェイバ志凪太、玉上圭吾、土屋彰男、戸舎清志、中島涼介、中道一輝、西岡弘治、西川泰弘、西田裕一、西山洋亮、はくのがわ、半澤真人、平塚泰史、平野智之、平山和詩、藤田雄、藤森理巌、藤原薫、星清美、細谷武、松下高徳、松橋巧実、三科琢美、水谷伸郎、宮川佑理子、宮澤旬子、村田将吾、森村達夫、柳剛、山下壮、山本恵美、横田勲、横山涼、吉居卓也、吉田一郎、四元雄飛（50音順）
作品展示	「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」展　31名 「アール・ブリュット☆アート☆日本2」　45名

二次審査審査員

小林瑞恵（社会福祉法人愛成会アートディレクター）
小川由香里（社会福祉法人愛成会事業推進課 課長）
横井悠（NO-MA学芸員）
木元聖奈（アール・ブリュットインフォメーション＆サポートセンターアドバイザー兼NO-MA学芸員）
藁戸さゆみ（NO-MA学芸員）

最終審査審査員

田島征三（美術家、絵本作家）
保坂健二朗（東京国立近代美術館 主任研究員）
マルティーヌ・リュザルディ（パリ市立アル・サン・ピエール美術館 館長）
マリオ・デル・クルト（アール・ブリュット・コレクション特任理事、写真家）
小林瑞恵（社会福祉法人愛成会及びNPO法人はれたりくもったりアート・ディレクター）
田端一恵（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部 次長）

［評価の視点］医療・福祉関係者との共働

その1　末安民生さんの場合

末安民生

日本精神科看護協会 会長。1954年鹿児島県生まれ。都立松沢病院勤務、衆議院議員政策秘書、慶應義塾大学准教授を経て現在は天理医療大学教授。障がい者就労支援を行うNPO法人の理事長も担う。アール・ブリュットの振興を目的とした全国ネットワークの副会長として普及振興に取組む。

日本で紹介されるアール・ブリュット作品は、とりわけ福祉の現場から発見されるケースが多いとされてきました。しかし近年、精神科看護師の全国ネットワークが福祉や美術領域と連携することにより、この10年で様々なアール・ブリュット作品が発掘され、多くの展覧会が企画されました。その活動の中心を担う日本精神科看護協会（略称：日精看）会長の末安民生さんに、精神科医療の現場において大切にされている視点を伺いました。

「何やってるんだろう!?」を見る僕らの目は、医療の訓練しか受けてこなかった。

「創作時間」として区切って作られる創作は、治療の一環として見られても、患者が自ら好んでつくっている時間は、これまでは「何やってるんだろう？」という疑問の目でしか見られないことが多かったと話す末安さん。かつて、勤め先とは別の病院で、病室に段ボールで小屋を建てて生活している患者がおり、普通だと管理上ただちに撤去のところを看護部長が「あの人はあれで安心しているのだからいいのよ」と語った。日々の医療現場の中で“ごみ”のように扱われる創作物に対してどこかでひっかかりがありながらも、確固たる意味を見出せなかった末安さんにとって、この経験は大きかった。これまでの医療的常識に縛られず、こういった創作行為や創作物を、“こだわり”や“その人が生きている証”として見出す回路について考える中、精神科病院での創作活動の撮影を続けて来た写真家・大西暢夫氏、社会福祉法人グロー（GLOW）理事長・北岡賢剛氏との出会いがあった。日本のアール・ブリュットの現場ではとりわけ福祉施設における知的障害者の作品が多く紹介されていたが、精神科病院における調査は未着手。写真家と福祉現場と医療現場が連携することで、新たなアール・ブリュットを発見するきっかけが生まれた。

ケアをする人たちが、「現物」を見ることが次の発見につながる。

全国の精神科病院に「こんな作品があったら教えてください」という通知をしても、やはり写真や資料だけではなかなかピンとこないもの。「現物」を展示し、医療関係者に見てもらう機会を積極的に作ることが重要だと末安さんは語る。日精看では、学術集会にあわせて展覧会の開催を継続してきた。そのように初めて開催した盛岡の会場では、現在はアール・ブリュット作家として著名な戸來貴規さんの作品「にっき」などが展示され、訪れた看護師から「うちの病院にも（こういう作品が）あります」という声があがった。「現物」を見ることで、まったく同じような作品でなくとも例えば「うちの患者さんは大学ノートに

ボールペンで書いている」などという類似行為が想起されれば、その体験から新たな作家が発見され展示されるというプロセスが生まれる。それには「探す目」をもった人のネットワークが必要だ。日精看の約４万人の会員の目で全国の精神科病院での日常に対して、このような創作行為を見出す習慣が生まれれば、治療の対象とはまた違った患者の特性――その人が大切にしている時間――への接し方が生まれるかもしれない。ネットワークの創設と維持が必要である。

創作＝“自分が納得する時間”を見つける行為なのではないか。

創作は、必ずしも手に取れる物体――絵画や陶器など――を伴うとは限らない。例えば、「水で皮が剥けるほど手を洗い続ける」「靴下を履けるだけ履き続ける」などといった、行為そのものにも創作的な意味を見出すこともできるかもしれない。末安さんは、治療的観点からは強迫神経症と呼ばれることに対しても新たな意味を見出すことで、病や癖をこだわりや美意識として読み替えていける可能性を示唆する。その行為を行う本人の意図を直接聞くことができないとしても想像はできる。その行為の動機は“自分が納得する時間”を見つけたいということではないか。知的障害者施設湖北まこもで生活する武友義樹さんの「長い紐をひたすら振り続ける」という行為が、NO-MAで展示されたとき、末安さんはそれを見て「力の振り出し方や紐の形や角度といったこだわりよりも、“満足できる時の感覚”が生まれるまで試し続けているのではないか」と感じた。その感覚は極めてパーソナルなものゆえ誰もが共有できるわけではない。だが、だれのものでもない行為そのものに想像力を働かせることで、その人への理解と共感につながるのではないか。

（KBS京都ラジオ「Glow～生きることが光になる～」より　まとめ：実行委員会）

ポイントまとめ！

ポイント1.
医療の常識に囚われず、謎の行為を創作と捉えてみる視点を養う。

ポイント2.
「現物」を体験する機会の創出と、そのためのネットワークを維持する。

ポイント3.
カタチを伴わない行為そのものに対しても想像力を向ける。

［評価の視点］医療・福祉関係者との共働

その２　笠原吉孝さんの場合

整形外科医であり、滋賀県医師会の会長も務める笠原吉孝さん。これまでアール・ブリュット作品の価値を社会に広く定着させるための展覧会の企画や、障害がある人たちの地域生活には欠かせない相談支援の全国普及に関する事業などに取り組むNPO法人はれたりくもったりの理事長としても活躍されています。そんな笠原さんに、アール・ブリュットの普及に努める思いを伺いました。

笠原吉孝

医師。1940年生まれ、京都大学医学部卒。滋賀県立小児保健医療センター所長などを経て、守山市で「かさはら医院」を開業。2010年より滋賀県医師会会長。専門は整形外科。NPO法人はれたりくもったりの理事長も務める。

芸術の中に“境”が本当に存在するのだろうか。

アール・ブリュットと出会ったとき、自身の子ども時代の自由な創作を思い返したという笠原さん。教師や大人の常識によって自分のありのままのパワーを削がれてきたなかで、目の前に広がる自由な芸術に対峙し、社会福祉法人グロー（GLOW）理事長の北岡賢剛氏らとこれらの作品を散逸させないような仕組み作りに至ったと語る。海外に向けて日本のアール・ブリュット作家の紹介に努めてきた活動は、2013年のベネチア・ビエンナーレでの澤田真一さんの出展へとつながった。「大事なのは様々なものに境目をつける習性を問い直すこと」。現代美術と共に展示された力強い澤田作品を観たときに、勝手な境目を設けるのは観る側の先入観であることを改めて感じたと語った。

医療の世界にはないパワーが、人間の心まで揺さぶるんです。

一般的に医療は医学を極め、専門的な治療を施すことだが、どうしても一方向的なコミュニケーションになることが多い。他方で福祉の世界にもある芸術を一緒に体験して感動するというプロセスは、対象者の生きることの根底を支える力、心を揺さぶる力を呼び起こしてくれる。医療の場面でも芸術のパワーを一緒に使っていくことで、「その人そのものを高めていく」という実践を行なえればと思うと、医師としてこれからできる可能性を示唆した。

（KBS京都ラジオ「Glow～生きることが光になる～」より　まとめ：実行委員会）

ポイントまとめ！	ポイント1. ボーダレスな価値観を体現する、アール・ブリュットの可能性を見つめる。 ポイント2. 医療がアートと連携することで、生きることの根源を高めてゆく。

［評価の視点］医療・福祉関係者との共働

その3　田端一恵さんの場合

田端一恵

社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部 次長。同法人にて海外展の事務局、NO-MAの事業等を担当。岩手県生まれ。前職は岩手県内の知的障害者入所施設の生活支援員。2004年にやさわの園で戸來貴規の作品に出会い、その後5年間、戸來と共に展覧会や取材を体験した。

福祉の現場で日々営まれる行為を、創作行為として再発見する。岩手県の施設で暮らす作家・戸來貴規さんの日常に寄り添ってきた田端一恵さんは、現在NO-MAを運営する社会福祉法人グロー（GLOW）の職員として様々なアール・ブリュットの企画などを担当しています。そんな田端さんに、社会福祉法人の職員だからこそ立ち会えるアール・ブリュットが生まれる現場について伺いました。

相対する側の、自分たちが変わった。すごく人に心を開くようになったんです。

前職である、やさわの園にて出会った戸來貴規さんと彼が生み出す「にっき」の存在は、田端さんの人生を変えた。田端さんは、「にっき」を地元の展覧会である「いわて・きららアート・コレクション」に出展するまでに、様々なコミュニケーションを心がけたと語る。個別支援計画にアート活動の創作・発表の機会を提供することを具体的に盛り込みながらも、改めて、利用者としての属性だけでない“その人自身”として出会い直す気づきを得た。その過程の先にあったのは、戸來さん自身の変化よりも、家族や施設の支援者が彼と向き合うまなざしを変化させ、さらに「もっと自分自身を味わって、外に表現してもよい」と思えたことだ。

認知症の方々に提供できる新たなアートプログラムを考えていきたい。

アール・ブリュットが様々な領域に広がる中で、改めて社会福祉法人だからこそできる活動について考えるようになったという田端さん。10年間企画運営してきたNO-MAの次の10年に向けた“新たなボーダレス”とは何か。障害のみならず、認知症患者が楽しめるアートプログラムを先進的に創造・提供するなど、超高齢化社会に向き合う取り組みも大切だ。また近江八幡の地域の方々との連携を進めるNO-MAとしても、より地域社会に愛される努力をするにあたって、福祉ならではの“人間くささ”を表現していくことも必要かもしれない。

（KBS京都ラジオ「Glow～生きることが光になる～」より　まとめ：実行委員会）

ポイントまとめ！	ポイント1. 支援者自身も変化し、自分を表現することを大切に。 ポイント2. 社会福祉法人として、超高齢化社会に対応するアートプログラムの創造を。

［評価の視点］医療・福祉関係者との共働

その４　六車由実さんの場合

六車由実

民俗研究者。デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員。静岡県出身。東北芸術工科大学准教授、特別養護老人ホームの介護職員を経て2012年10月から現職。「介護民俗学」を提唱し実践する。著書に『神、人を喰う 人身御供の民俗学』（新曜社）、『驚きの介護民俗学』（医学書院）。

六車さんは、大学教員の仕事を経験したのち、2009年から静岡県の特別養護老人ホームの介護スタッフとして働き始めるという異色の経歴をお持ちです。彼女は、民俗研究者として培った「聞き書き」という行為を、高齢者が集う介護現場で実践しています。一人ひとりの記憶を丁寧に聞き取り、一冊の「思い出の記」を書き上げる「介護民俗学」という試みを元に、福祉現場における表現活動の可能性を伺いました。

利用者さんの記憶を継承していくことが、聞き書きの意味。

六車さんは、介護現場における「回想法」と民俗学における「聞き書き」は、聞き手と話者の関係性がまるで違うと語る。回想法では治療的な側面が重視されるあまり、どうしても職員が「上」から利用者と接するという関係性が生まれやすい。しかし、民俗学においては、「その人の人生を知りたいから」という動機から、聞き手が「教えてもらう」という立場になる。この考えを介護現場で実践すれば、利用者さんは実に充実した記憶の語り部としての役割を帯び、「ケアする／される」という関係性が変化していく。六車さんは、「だから聞き書きの意味、目的がもしあるとすれば、利用者さんの変化ではなくて、記憶を継承していくことだと思っているんです」と語り、またそれは「近しい家族ではそれが直接的にはできない。むしろ、介護現場だからこそ客観的な立場と日常的に付き合っている関係が共にあり、私たちを介して、家族や地域にその記憶が継承されていくことができるのでは」と、「介護民俗学」を提唱しているのだ。介護現場を社会資源として捉え直し、利用者の持つ記憶を媒介に、多様な関係性が生まれることが、とても重要なのではないだろうか。

「作品」を作ることが、介護現場でも重要だと思う。

六車さんは、介護現場ではあまり耳にすることのない「作品」という言葉を意識的に使っている。利用者さんの各々の記憶はご本人の中ではずっとつながっている。「記憶は日々流れていくもので、なかなか言葉にはならないんです。でも、言葉になる瞬間というものがあって、言葉になった瞬間に職員がどうやって反応し、立ち止まれるかが大切なんです」と語る六車さん。介護現場は、この利用者の「言葉」をこれまでほとんど「発見」してこなかった。現場が忙しいことや毎日同じことが繰り返される言葉の全てに耳を傾けていられないなどの理由があるが、六車さんは、それらを「作品」にする必要があるのではないかと語る。六車さんのように文章表現でもいいし、ある職員はビデオカメラを使って、利用者

さんの語りを記録・編集している。「介護記録などはあくまで記録なのですが、作品というのはもっと普遍的なもの。私は、実は作品制作までいくのが介護現場でも重要だと思っています。その行為は、そこを流れている日常を一瞬止めるという行為であり、一体ここでどういった関わり方をしているかを深く考えるきっかけになるんです」。技術としてのケアだけでなく、人間と人間がお互いの多様性を認めるという深い意識に向かうこと。職員自身がもっと「表現」をすることで、利用者さんにもその空気が共有され、介護現場にはより豊かなコミュニケーションが生まれるのではないか。

目指すべきは、「日常性」の回復。

「介護現場において利用者さんが置かれている日常性というのは、ある意味で非常にいびつな形だと思っているんです。例えば、家族の中でも要介護という状態になって、“もう何もしなくてもいい”となり、ケアされるという立場でしか家族の中にも居られない。施設現場でも結局そうなることが多いわけです。でも、利用者さんというのは“生きてきた先輩”。だから、私たちに教えてくれることはいっぱいあるわけです」。ある時は、利用者さんに「思い出の味」の調理方法を職員が教えてもらったり、逆にそういう行為が利用者さんにプレッシャーをかけてしまったりもするが、それこそが「保護されるというだけではない、人間の本来あるべき姿」だと感じる六車さん。それがないと、介護現場が特殊な「非日常」の世界になってしまうと警鐘を鳴らす。「だから、福祉が福祉の世界だけで閉じられるのではなく、色んな方々が交わって多様性を確保しないといけない。だから、このすまいるほーむで意識的にやってきたことは、“日常性を回復する”ということなんです」。

（KBS京都ラジオ「Glow～生きることが光になる～」より　まとめ：実行委員会）

ポイントまとめ！

ポイント1.
利用者の記憶の継承を通じた、介護現場の社会資源化を目指す。

ポイント2.
介護職員はもっと「表現」しても良い。

ポイント3.
「ケアする／される」を超えた、人間が本来過ごすべき「日常性」の回復が必要。

［評価の視点］医療・福祉関係者との共働

その５　釈徹宗さんの場合

釈さんは、大阪の浄土真宗本願寺派如来寺住職、相愛大学人文学部でも教鞭をとられながら、認知症高齢者のためのグループホーム「むつみ庵」も運営しておられます。また落語や映画など、様々な芸能文化に関する執筆もされています。ここでは、地域に根ざした普通の家を舞台にした福祉活動と、「老いと表現」というテーマについてお話いただきました。

釈徹宗

僧侶、宗教学者。1961年大阪府生まれ。大阪府立大学大学院博士課程修了。浄土真宗本願寺派如来寺第19世住職、相愛大学人文学部教授。NPO法人リライフ代表として認知症高齢者のグループホーム「むつみ庵」、ケアプランセンターも運営。著書に『宗教は人を救えるか』（角川SSC新書）など。

不合理なものを大事にするということの意味。

釈さんは檀家宅の木造家屋を活用し、「むつみ庵」を運営する。既にある古民家の改装や、檀家制度を通じて、「地域コミュニティの崩壊が叫ばれるなかで、今あるリソースや縁を活用することで、ご近所さんが自然に高齢者の支援に関われる場所を作ろうと思ったんです」と、市民参加型の福祉の意義を語る。運営面でとりわけ意識していることの一つに「不合理なものを大事にする」という視点がある。「例えば、古民家なのでバリアだらけなんです。でも、それが生きる力を落とさない要因にもなっているんです」。自動で電気がついたり水が出たりする昨今の施設では、できることを自分でするという能力自体が奪われる。また、「現在の高齢者は、やはり日本文化的な感性を身に備えているところが多分にあり、便利で楽に暮せれば幸せかというと、そうでなかったりするんですよ」。例えば、床の間や仏壇など、理屈では説明できない文化的な存在が、実はその人の心の豊かさを支えていたりする。また、職員の雇用においても「他ではなかなか働きにくい人も積極的に雇用し、小さいながらも地域雇用にも役立っているという自負はあります。例えば、疾患を抱えている方は症状がひどいときなんかは、出勤してもずっと椅子に座っていることがある。そんなスタッフに認知症のおばあちゃんが“元気出しや”などと励ましたり」。こういったお互いの役割を超えた人間関係を重視するのも、合理性では説明できない場づくりを目指すがゆえのことだ。

福祉領域の成熟化の先には、アートの問題が浮上する。

釈さんは、高齢者の表現衝動をテーマにしたNO-MAの企画展『快走老人録Ⅱ』（2014年8月9日～11月24日）に着目しながら、「個人的には、老いから死へむけてだんだんと枯れていくのが自分の道だと思っていました。しかし、このような老いとともに増す表現の過剰さには、人間には根源的に表現する喜びがあるということを改めて感じました」と語った。ヒンドゥー文化圏では、人生における理

想のモデルとして「四住期」という四つの段階があるという。社会で生きるためのスキルや知識を身につける「学生期」、家族を持ったり社会人として暮らす「家住期」までは日本では理解されやすいが、さらにその先に、家族や俗世を離れ隠棲する「林住期」、さらには、隠居さえも捨てて残りの生を旅しながら終える「遊行期」が存在する。こういった人生モデルは、老いとともに培うべき豊かさのイメージを提示してくれる。こういった宗教的な思考とも絡めながら、福祉が成熟化すればするほど、単に衣食住を提供・支援するだけでは追いつかない領域があることに注目しながら、「アートが、今後の福祉にとって大きなテーマになってくるかもしれない」と語った。

老いと向き合う「回路」として、アートはすごく大きな扉。

老いは必然的に身体的な苦痛と向き合わざるをえない。しかし、釈さんは「“若いときはこんなこと考えなかったけども、膝が痛いことで体をこんなふうに使ったらいいな”とか、いわば自分の体の不合理性を生かした工夫を行うわけですよね。ここに老いを違う角度から捉えるヒントがあります」と語る。「また、若いときに欲しくてしかたがなかったものも、逆に若いときに満足していたものも、老いた時点ではまた全然違う豊かさや楽しさを求めたりもするものです。そのように老いの状況をちょっとクールに観察しながら、自分の心身と付き合っていけばいいのです」。そして、釈さんはその老いと向き合う新たな回路として、アートに注目する。「表現をする高齢者の人たちの渦に巻き込まれるような、そういう身の置き方をする感性を、我々も身につけていけばいいのではないでしょうか」。アートを軸足に、今の老いに新たな価値と可能性を投げかけることが、これからの福祉にも必要かもしれない。

（KBS京都ラジオ「Glow～生きることが光になる～」より　まとめ：実行委員会）

ポイントまとめ！

ポイント1.
不合理なものを大切にしながら、表面的な支援とは違った福祉の有り様を見つめる。

ポイント2.
老いから生まれるアートに向き合い、それを福祉の未来と絡めて考える。

ポイント3.
心身の老いをクールに観察する技法としてのアートに着目する。

座談会「作品発掘のプロセスについて語り合う ～アール・ブリュットへ その道程と幸福について～」

本座談会では、公募事業で選定された２名の作家とその支援者、公募事業や展覧会事業の担当者を交えながら、作品発掘のプロセスについて、また、公募から展覧会実現を通じて見えてきた新たな世界について語り合いました。全国から福祉関係者が多く集うアメニティーフォーラムの一環で開催されたこともあり、会場からも福祉現場ならではの意見が語られました。

登壇者：平野智之（公募入選者）／**朝比奈益代**（クラフト工房 La Mano）×**米田昌功**（NPO法人工房ココペリ・日本画家）×**小川由香里**（社会福祉法人愛成会）×**小林瑞恵**（全国公募審査員）×**横井悠**（社会福祉法人グロー（GLOW）・NO-MA学芸員）　**コーディネーター：アサダワタル**（本書監修）

平野智之「美保さんシリーズ」

平野　（作品を観せながら）女の子が映ってます。この色は白と青でございますよ。ちょっと長いスカートはいてます。

朝比奈　この色合いは東海道新幹線のイメージです。靴のことを「土足」と呼んでいるんですが、「土足」の先に謎の黒い糸がついています。また作品に度々登場する美保さんというのはクラフト工房 La Manoの元職員の方で、平野さんの憧れの方。今回出展した作品の中にはもえ子さんという可愛い女の子も出てくるんですがその方は利用者の方です。美保さんは色んなところを旅していてその旅する場所は平野さんが実際に行ったことのある場所なんです。

アサダ　じゃあ、先ほど映っていた熱海の作品だと、実際に平野さんも熱海に一度行かれたと。

平野　小さいころから出かけてます。この絵をよーく観てください。今宵の宿からおでかけするのよね、履きながら。温泉宿に着いてももう「土足」は脱がずに。（会場から笑い）

アサダ　靴箱が描かれているのにも関わらず靴は脱がない（笑）。おっ、美保さんの顔が映りましたね！

朝比奈　最初の頃は靴とか膝とかスカートだけだったんですが、だんだん描き進んでいくうちに後ろ姿とか、ついに正面、顔が登場しました。

アサダ　じゃあ平野さんの作風を

平野智之

朝比奈益代

米田昌功

小川由香里

小林瑞恵

横井悠

知っている周りの皆さんは急に「美保さんの顔が出たぞ！」って感じだったんでしょうか。

朝比奈　最初は周りも「平野さんは顔が描けないのかな」って思っていたんですけど、実は描けました。

アサダ　絵が始まる前にいつもキャストって文字が出てきているってことは、平野さんは物語的なことをかなり意識されているんでしょうか。

朝比奈　多分DVDのつもりで作ってます。

アサダ　だからキャプチャー画像、メニュー画面のような絵が最初に入ってくるんですね。

平野　行ったことありましたよ、冬にスキーに。これはきっと白樺なんだけど。覚えてる？　あの山。（信州八ヶ岳の）白樺湖だよ。

アサダ　ここも平野さん行かれたことがあるってことですよね。おっ、急にスカートの部分が拡大されていきますね。

平野　これはな、夕陽に輝く感じがします。

朝比奈　夕陽に輝いているときだけ背景にも色が入るんですが、通常は美保さんにしか色が入らないです。美保さんに注目が集まる様に、他の登場人物も記号化されていて、子どもは丸とか、おばさんが楕円とか、「お」って描かれているのはお客さん。

平野　おじさんが四角。

アサダ　なるほど（笑）。ちなみに普段、平野さんはご自宅で作っておられるのですか？

朝比奈　絵の部分は自宅で描いてきてそれを朝アトリエに持ってきて私に渡してくれるんですが、それを所定の位置に保管しておくと、昼休みに電車好きの利用者さんたちと一緒にアトリエで電車の本を観ていて、ついでにその絵をファイリングしてもらうんです。そのファイルが一杯になってきたら自分で考えてパソコンで文字を入力してます。

アサダ　平野さんは、一番最初に物語の流れなどを決めて描いているわけではないんですかね？

平野　どうなんでしょうか。決まってないです。

朝比奈　結構大量に描いているので、それを並べて自分で編集してそれでストーリーが段々決まってきてといった感じのようですね。何か順番に並べるわけではなく、時々ページが空いていたりもしますし、それを後から補充することもありますから。

アサダ　一つのシリーズに出てきた絵が別のシリーズにも出てくるということはあるんですか？

朝比奈　昔の絵をもってきて他のシリーズに填めることはあるので、もしかしたあるのかもしれません。似たような絵がたくさんあるのでちょっと分からないんですが。

アサダ　物語の文章は平野さんご自身が考えているんですね？

平野　そうです。

アサダ　最近の作品には美保さんの顔が登場したり、変化がありますね。

平野　顔が出て来たのは、実は美保さん、髪が長いからゴムが一つなんですよ。

アサダ　その髪型は美保さんご本人もずっと変わってらっしゃらないでしょうか？

朝比奈　変わってます。でも、平野さんは髪を結んでいる美保さんが大好きなので、美保さんが髪を切られた時は数日間荒れました（笑）。

アサダ　最近描かれているシリーズの特徴があれば教えてください。

朝比奈　結構変わってきていますね。でも本当に「土足」だけが登場するシリーズは平野さん自身が捨ててしまったのでもう存在しないんですよ。

平野　現在美保さんは何してると思ってる？　旅行してるときはタバコを吸ってるんです（会場から笑い）。

朝比奈　実際の美保さんはタバコを吸いません（笑）。この後に「NEW美保さんシリーズ」っていうのがあるんですけど、服にも色がついて変わってきてます。ページ数はチャプターには分かれていなくて17ページが決まっていて、保育園の時に毎日観ていた紙芝居が17枚だったのでそれにこだわっているそうです。

磯野貴之「電柱電線」

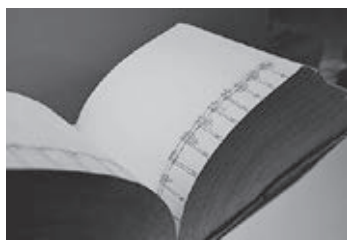
米田　私は富山県高岡市の支援学校に勤めながらNPO法人工房ココペリを主宰しています。そこで知的障害を持った社会人の方の創作活動を支援しているわけなんですが、磯野貴之さんは、そのNPOに所属しておらず、現在は支援学校高等部の３年生なんですね。私は彼が中学２年生から高校1年生の頃にかけて関わってきました。聴覚過敏や自閉傾向などがあり、なかなか他人とコミュニケーションすることが難しい方で、いつも教室の隅っこで何かゴソゴソやっているという印象の人でしたが、気がつくと教室の端とか壁に落書きをしているんです。いたずら好きというか。色んなところに落書きをしてそれをみんなに見つけてもらうのがとっても好きなようなんです。だから落書きをしたときはグフグフ笑いながらやってますよね。あだ名がカツオくん。（会場から笑い）

今回、出展した作品は「電柱電線」という題名の作品で、彼が中学３年～高校1年の２年間くらいの時期に、街にある電柱に興味を持ったようで、放課後家に帰ってお母さんに頼んで車で街中の電柱をずっと見て回るということを毎日行っていたんです。それで気がついたら学校中にも電柱の落書きが見え始めて、床の際のところにずーっと電柱が並んでいたり。

アサダ　今回の出展作品は紙ですが元々はその時々に色んな場所に描かれてきたということなんですか？

米田　そうです。身の回りの人が見つけられないような場所を選んでそこになんでも描くという。学校では落書き程度で美術の授業はあまり熱心じゃないんですが、家でお母さんが買ってくれたスケッチブックに突然今回の出展作品のように端から端まで描き続けるという行為が始まったらしく、３ヶ月くらい昼夜描き続けたそうなんです。これはどうもシリーズものでして、本人曰く9,000ページ描いたと。私としてはお母さんにそれを本人が捨てる前に置いておいてもらうようにお願いして、NPOで保管させていただいて今回の応募に至りました。

また、電柱以外にも、延長コードやコンセント、パイプ、パイプにつながるコックとか、そういうものもすごく気になって仕方がないようで、それを見るとパニックになりながらも見たいという衝動は抑えられない。ほとんど人とは関わることができない、そういった不自由なところを持っているからこそ、電柱やパイプやコンセントなど何か「つながる」というイメージのものにこだわりを持っているんじゃないかと、感じることがあります。



公募から展覧会の裏舞台

アサダ　公募事業の事務局を担当された小川さんに伺いたいのですが、今回約4,600点の作品の応募があったという風に聞いていますが、まずは、美術展の公募事務局をするという挑戦に際して、どういうご苦労があったか、お聞かせください。

小川　まず経験がないことだったので、どういう風に進めていくべきかをスタッフ間で一から話し合いました。まず、どれくらいの期間を設けて作品を送っていただいたらいいのか、どの程度の広報をしていけばいいのか、また広報したことによってどの程度の反応が返ってくるのか、これらすべて未知数だったんですね。ですからこれまで全国で開催された公募展を調べて参考にした上で、私たちはどういう公募をしたいかというところを、NO-MAの方々とも連携しながらこの事業を作っていきました。

アサダ　自分たちの公募事業の方向性が、途中からはっきり見えた瞬間などはありましたか？

小川　そうですね。公募という枠組みがただ単に作品を選ぶとか審査をするというものではなく、進めることで自分たちがいつも携わっているアール・ブリュットについて、これまでに関わってきた作家やキュレーターだけでなく、それらを周りでずっと見続けてくれている方々がいて、その方々が日頃見ている世界がたくさんあるということをこの機会で改めて実感したんですね。ですから展覧会に出展するための公募という表面的な意味だけではない、もっと幅広い可能性を感じました。

アサダ　そしてそれが展覧会という形にまとまるときの背景やその挑戦に際して意識したことについて、小林瑞恵さんにお聞きしたいと思います。

小林　まず今回『アール・ブリュット　ユートピアの創造主たち』では公募入選者78名のうち、31名の方の作品を展示させていただいています。私は公募事業では審査員も務めさせていただいたんですけど、作品を観た時に自分が思ってもみないものとか、人の表現の多様性にすごく出会ったんですね。その中の一つひとつに作家さんの世界感が凝縮されていました。それで、それぞれの方々がご自分にとってのユートピアを作っているというイメージが沸いて、展覧会のタイトルも現在のものに行き着いたわけなんです。

一方で、キュレーションする際

には作品サイズや種類など、作品自体の物理的な情報が重要なんですが、公募作品については初めて出会うものが多い中で情報が少ないことがあり、会場の空間に出展者全員を収めるために、ほとんど妄想、自分の経験からの「読み」みたいなものを駆使する形で、できるだけ融通を利かせながら空間を作っていきました。

アサダ　今回の公募事業や展覧会事業のすべてのプロセスに関わりながら、普段、展覧会の制作にも携わっている横井さんにもそのあたり補足していただければと。

横井　僕は小林さんから出てくるアイデアを受け止める役割、それをどう現実に落とし込んでいくかという作業をしていました。展覧会を作る時には、すでにある情報、すでに知っている作家さんから展示会場を構築していくのが重要なんですが、今回公募で初めて出会った作品を展示していくにあたり、展覧会を作っていくプロセスがこんなにも普段とは違うのかと痛感しましたね。

応募する上での プロセス・心構え

アサダ　朝比奈さんにお聞きしたいと思います。この公募の情報を知ったきっかけは何でしたか？あと、「出そう」と思った決め手について。

朝比奈　施設に応募用紙が送られてきていたので応募しました。決め手は結構大きな展覧会だし、ひょっとしてフランスやスイスにも行けるかもしれないなと（笑）。今回出している「もえ子＆美保さん」はスイスが舞台なんですね。この作品がスイスに行ったら楽しそうだな、と思いました。

アサダ　応募する側の立場として、規定の情報を埋めたり、郵送したり、応募の手間はどうでしたか？

朝比奈　他の公募展にも応募したことがあるので、それほどハードルが高いとは思いませんでしたね。

アサダ　米田さんにお聞きしますが、磯野さんはココペリの所属ではない中で、そんな磯野さんの作品を応募しようと思われた経緯をもう少し詳しくお聞かせください。

米田　富山県ではまだアール・ブリュットに関して熱が盛り上がっていないので、この辺りで外圧が必要じゃないかと思ったんですよ（笑）。私自身は別に磯野さんの作品だけを贔屓目で見ているわけではないのですが、やはりそういうアール・ブリュットといった一つの大きなきっかけがないと、いくら磯野さんのやっていることがすごくても、周りの方々は「展覧会に出る」というようなイメージを持ちにくいんです。「すごいね」だけで終わってしまう。でも、そうではなくて「誰が観てもすごいものはすごい」ということをなんとか示したいなと思ったんです。磯野さんの作品が持つ力はボーダーを超えた、海外でも通用するくらいの表現の面白さを持っていると思うので、迷いながらなんですがココペリに届いていたこの公募案内を見て締め切りギリギリに応募しました。

アサダ　準備をされたりする上でのご苦労はありましたか？

米田　まず親御さんは応募や展示することのイメージが頭にないので、その点についてお話をしましたね。またうちのNPOの展覧会や他の展覧会を実際観てもらったりして「こういう風になるんですよ」ということをお伝えして。それで作品をお預かりして、磯野さんの作品は世に出すタイミングを待っていた状態だったので、今回の公募をきっかけに親御さんに「これは出しましょう」とお話をさせていただきました。作品は本という形態だったんですけどバラバラだったので（笑）、本人の了承を得てボンドで修復をさせていただきました。書類などはその作品に対する僕なりの思いもありますから、全然苦にならなかったですね。

アサダ　時間も少ないのですが、最後に会場から何かご意見あればどうぞ。

会場　私も今、広島の施設で児童支援と生活支援をしています。元々美術畑の学校を出ていまして、今回、日々施設で書き溜められてきた作品を公募に出品したんですが、そのプロセスで細かく書類を書いたり、作品を作品としてきちんと梱包するとか、額を選んでみたりとか。そうすると見栄えがとても良くなってぐっと変わるでしょってことを施設内で共有するだけでもすごく変化があったんですね。また、広島県のあるサポート展で入選したことをきっかけに、その時のご家族の反応とかご本人の思いとか、作品を描くという行為に対する見方がすごく深まったことがありました。そして施設内でもそういった取り組みはやはりもっと真剣にやらないといけないのではないかと思い、作品のすごさを人に伝えるために踏むべきプロセスとかを意識するようになりました。また、発達障害など一見わかりにくい障害の子どもたちの中に、自分を認められずに悩んでいる子が多いんですね。そういうときに作品を通じて褒められたりすることで自分は居てもいいんだとか、そういった体験にもつながることだと思います。やはりアートというのは、作品の善し悪しだけではない、その人の命につながることだと思うので、こういった福祉現場で起きているコミュニケーションそのものをアート的な見方で捉え直す、その子がその子であればいいとか、職員の特性をもっと生かすとか、福祉の世界の見方もさらに多様化させていくことにつながればいいなと思いました。

アサダ　最後に会場からまとめに近い発言をいただいたと思っています。公募事業を進めるにあたって福祉現場で起きている出来事に対してアート的な見方を促していく、普段とはまったく違った観点から日常環境を見つめるといったことにもつながるのだと私も思います。これまで「作品」という言い方をすることもなかったものを「作品」として扱う、そういう風に周囲が創作を見守るといった動きが広まっていくのであれば、今回の公募のプロセスで起きていることは、本当に広く深い意味を持つものになるのかもしれないと改めて感じました。皆さん、どうもありがとうございました。

審査員の声

「アール・ブリュット作品全国公募」では６名の審査員による作品審査を行いました。アール・ブリュットの専門家、近現代美術の専門家、福祉分野でアール・ブリュットに関わってきた方々など、活躍される専門分野は様々。多様な視点で作品の審査がなされました。審査員のみなさんに、「応募作品について」「医療・福祉関係者が中心となり、医療・福祉施設や美術分野と共働して実施した全国規模の作品公募であった点について」「日本のアール・ブリュットについて」などの観点で審査において感じたことを聞きました。

教育をどう考えるかという以前に、受けていてもいいじゃないか

田島征三
美術家、絵本作家
1984年に福祉施設信楽青年寮（滋賀県）の作品に出会い、アール・ブリュットの世界に深く共感。その魅力について書いた著書に「ふしぎのアーティストたち」（1992）がある。2012年、「踊る細胞～田島征三とアール・ブリュットたち」展でアール・ブリュット作品とのコラボレーションを行う。

一番驚いたのは福祉作業所やアール・ブリュットのようなこととは全く関係のない作者から応募があったこと。一般的な美術公募には出品したくないけど、今回のような公募には応募したいと思うようなアーティストがいるということが分かってびっくりした。日展や現代美術の展覧会はちょっと敷居が高いけど、「よくわらかないけどなんだかすごい」という募集作品の条件に自分の作品が含まれると思ったんじゃないかな。

作品全体の印象としては、「アール・ブリュット ジャポネ」展（パリ市立アル・サン・ピエール美術館、フランス、2010年）の時にはあったでっかい陶器の作品とか、それだけで迫力がある作品が少なかったことが一番大きい。平面の作品が多くて、目を奪われるきれいな作品もあったけれども、よく観てみると迫って来るものがないという作品が多かった。アール・ブリュットというのは歴史からまったくかけ離れたところにいるものなんだよね。突然現れたようなものが、それぞれのアーティストの中に現れている。僕もそういうアーティストに出会うとすごく興奮する。

もうひとつ、作品を1点だけで応募している場合は判断が難しい。公募だけを目的に作品を作ったのではないかと思われる可能性もある。複数の作品を観るから作者の哲学みたいなものが浮かび上がってくるわけで、1点というのはもったいないなと思った。ただ、目的があってもいいじゃないかと思うし、もちろん、1点だけど何ヶ月もかけて作られただろうことが分かる作品、密度のある素晴らしい作品もあった。

美術教育を受けていないということがアール・ブリュットの条件に入っているけれど、教育をどう考えるかという以前に、（教育を）受けていてもいいじゃないか、という気持ちが僕にはある。例えばみずのきの西垣籌一さん（※1）はバウハウスのような教育をしていた。みずのきの作品は面白くて魅力的だし、僕はアール・ブリュットと言えると思う。他にも、舛次崇さんという作者が甲子園球場ばかりを描いていたのに、はたよしこさん（※2）が植木鉢をポンと置いたことで別のものを描くようになったという話があったりする。教育かそうでないか、それは人と人との関係で生まれて来るもので、なんともあいまいなものだと思う。

※1　日本画家（故人）。知的障害者施設「みずのき」のアトリエで障害者の創作活動を支援した。
※2　ボーダレス・アートミュージアムNO-MAアートディレクター

現代アートとは
ちょっと違うものを
カバーできる概念

保坂健二朗
東京国立近代美術館 主任研究員
近現代芸術を専門とする一方でアール・ブリュットも研究テーマの一つに掲げ、2012年「しがアール・ブリュットアドバイザー」に就任。2013年、「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」(文化庁、厚生労働省共催)構成員を務める。主な著書に「アール・ブリュット　アート日本」(監修、平凡社、2013年)など。

今回の募集は全国公募ということで、規模がとても大きいという印象を受けました。これまでにアール・ブリュットという存在をずっと発信し続けてきているからこそ、できたのではないでしょうか。応募用紙を読むと、落選したらご家族ないしは施設の方がショックを受けるだろうな、というものが他の公募に比べても多いように感じました。それは、僕がアール・ブリュットに関わってきた中での心境変化も影響しているでしょう。アール・ブリュットの公募では審査会時に応募用紙も確認できるほうがよいだろうと考えています。作者本人が語れない場合に第三者が語るのは大事だと思いますが、応募用紙を見ると、熱意や愛情がとてもよく伝わってくるものです。

「誰がアール・ブリュットだと決めるのですか」という質問を受けることがあります。現代アートであれば日常と隔絶している存在だと思われているので、「キュレーターが決めている」という答えに納得してもらえる。現代アート系の賞では落選しても「この賞はだめだけど他なら」と全否定にはならない。しかし、今回のようなアール・ブリュットの審査ではそうはいかない。作者や周辺の人々の思いが色々と伝わってくる絵を、パワーが足りないというだけで落選させてしまっていいのだろうかと苦しい思いも持ちながら審査にあたりました。とりわけ僕は、現代アートとはちょっと違うものをカバーできる概念としてアール・ブリュットを考えているし、日本のアール・ブリュットという場合にはそれがアール・ブリュットかどうかという明確な基準は今のところまだ無いと思っています。「これもアール・ブリュットだ」と呼べる範囲を広げたいと思いながら関わっています。

作品全体ではこれまで観たこともない、ハッとさせられるものがいくつかありました。大きな作品は少なく、1点だけの応募はパワーが感じづらいものもありました。他に印象的だったのは、これまでアール・ブリュットの展覧会に出品してきた作家が、以前とは異なる作品を応募されていたこと。例えば藤田雄さんの作品は以前のものと大きく変化していたり、これまでは文字の作品を作っていた人がドットに変わっていたり。こういう作品も作っているのかと分かったことは新鮮に感じました。

外国人の作品も応募があり、審査員も国際的でした。今後、日本サイドが考えるアール・ブリュットを発信していくためにも、更なる国際化を目指して欲しいですね。

本当によい作品は
人の心を掴んで離さない

マルティーヌ・リュザルディ
パリ市立アル・サン・ピエール美術館 館長
1994年より現職。アール・ブリュット、アウトサイダー・アート、フォークアート分野のリーダーとして50以上の展覧会でキュレーターを務め、また数多くの図版出版も手がけている。2010年「アール・ブリュット・ジャポネ展」開催。会期中、来場者12万人を動員。

ローザンヌやパリで最初に紹介された日本のアール・ブリュット作品(※1)は日本のアール・ブリュットを代表する作品群から選ばれたもので、世界のアール・ブリュットの歴史に残るものでした。今回は残念ながらそれらに匹敵する作品はありませんでした。ただ、それは当然のことで、本当のアール・ブリュット作品や作家は簡単に見つかるものではありません。5年、10年と長いスパンで取り組む必要があるでしょう。

絵画や彫刻など長い歴史を持つ芸術に対して、アール・ブリュットは価値が認められてからせいぜい数十年。なぜ、人々がそれを見つけて注目するようになったのか。なぜ、人々が突然マージナルなアートに注目するようになったのか。私はずっと考えているけれども答えが見つかりません。でも、本当に素晴らしい作品は、一度観たら忘れられない、頭も魂も虜にする、心を掴んで離さないものです。その魅力を伝え続けるためには、素晴らしい作品を観せること、悪い作品は見せないことが秘訣だと考えます。

アール・ブリュットの素晴らしさは、アーティストたちが創作活動を通して自身の尊厳を取り戻した人達であることです。福祉・医療に関わっている方が果たす役割は副次的なもので、主役はアーティストたちです。作品一つひとつには人間がいて、その人が背負っている経験などもある。彼らは社会、つまり「規範」の外側にいます。作品は社会の内側と外側の関係性から生まれてくるのだと思います。そういったことを忘れずに関わっていくことが重要でしょう。

先日、滋賀県で観た展覧会(※2)では、澤田真一さんの作品と土器が一緒に展示されていました。文化財という歴史的なものと現代的なアール・ブリュットを一緒に展示することでアール・ブリュットに光を当てる、素晴らしい企画だと感じました。アール・ブリュットというのは歴史の一環を形作るものでもあります。福祉的な視点だけでなく色々な視点から観ることによって、歴史的・文化的にどのような意味があるのかが考えられ、アール・ブリュットの価値を高めていくことになるでしょう。

※1 「JAPON」展(アール・ブリュット・コレクション、スイス、2008年)、「アール・ブリュット ジャポネ」展(パリ市立アル・サン・ピエール美術館、フランス、2010年)
※2 「平成26年秋季特別展 造形衝動の一万年〜縄文の宇宙/円空の衝撃/アール・ブリュットの情熱〜」(滋賀県立安土城考古博物館、日本、2014年)

ネットワーク、人脈が作られたことはとても重要

マリオ・デル・クルト
アール・ブリュット・コレクション特任理事、写真家
1955年、スイスのヴォー州（VD）ポンバブル生まれ。独学で写真を学ぶ。1980年以来、主として舞踏と演劇の舞台写真を手がける。アール・ブリュット作家達の世界にも強い関心を持ち、数多くの展覧会や出版物を通して国際的評価を得ている。

4,000点を超える作品を集められたことは、とても大変な苦労をされたのだろうというのが最初の印象です。本物のアーティストを発見するのは、短期間でできることではありませんし、私の経験では意図的に発掘するよりも偶然に見つかることの方が多い。しかし、日本では福祉施設のネットワークや人づてにアーティストを発掘することに気を配っていて、とても素晴らしいことだと思います。それでも簡単にアーティストを発見することはできないでしょう。私がアール・ブリュットに関わって30年ほどが経ちますが、アール・ブリュットは他のアートと同じ時間感覚では進められません。アール・ブリュット作品や、作者との関わりについても同じです。

今回の公募に於ける第一の意義は、アーティストを発掘するために多くの人々に声をかけ、ネットワーク作りに力を入れたことではないでしょうか。公募には作家コンクールのような側面や質を競う効果もありますが、それを凌駕するほどのネットワーク、人脈が作られたことはとても重要な意味を持っていると思います。

印象に残った作品はいくつかありました。どうやって選んでいくかというのは、不思議なんですが、作品を観た時点では評価を頭でしていません。体で感じるので、なぜその作品が印象的だったか、ということは言葉ですぐに説明できない。観ているといろんな疑問が湧いてきます。力強さや、人間の根源のようなものを感じて、それと自分はどういった関係にあるのだろうか、小さな細胞単位で感じる何かを捉えているんです。

日本のアール・ブリュットには日本の特殊性があり、外国でもそれぞれの国ごとに特殊性がある。アール・ブリュット全体をひとくくりにすることは難しいのですが、様々な論争があります。アール・ブリュットとは一体なんぞや、その特徴は何かなど理論的な部分での論争です。福祉としてはどのように役立つのか、という議論ではありません。アートのジャンルの一つとしてアール・ブリュットはどうなのかという、これまではあまりなされていなかった新しい議論です。日本とヨーロッパのアール・ブリュットを対比させてみるといったことも、今回の試みをベースに展開していけるのではないでしょうか。

この数年で「アール・ブリュット」という言葉が浸透した

小林瑞恵
社会福祉法人愛成会及び
NPO 法人はれたりくもったりアートディレクター
2004 年障害のある人の創作の場「アトリエばんげあ（東京都中野区）」を立ち上げる。国内で多数のアール・ブリュット関連の展覧会でキュレーターを務める。ヨーロッパ巡回展（2012 ～）、『ART BRUT JAPAN SCHWEIZ』展（2014）の日本側事務局及びキュレーター。

応募作品の多さに驚きました。これまで様々なアール・ブリュットの展覧会に関わってきた中で初めて観る作品にも出会えましたし、過去に観たことがある作品、よく知る作者の作品もありました。2008年に滋賀県で、障害がある人の作品公募（第８回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会　作品公募）が開催されて、２ヶ月間で約500名の方々が応募されたそうです。今回は、1ヶ月半で約2,200名の応募とかなり多かったのは、この数年で「アール・ブリュット」という言葉が浸透したこともあるのだと思います。応募作品の中には私が拠点としている東京都内や関東圏でも、初めて知る施設の名前があり、お子さんや学生さんからの応募もたくさんあったことにも驚きました。

特に印象に残ったのは、和紙を使った大きな作品やゴキブリをたくさん描いていたもの、ウンチを流すところを美しい色彩で描いた作品などです。1点のみで応募された作品は、選ぶかどうかの判断が難しく、その作品や作者の世界感をより強く出す・伝えるには応募する作品点数は多い方がよいだろうと感じました。1点だけの応募でも、中には惜しいと思う作品もありましたが、難しかった。例えば、紙で冷蔵庫を作っていた立体作品は、数をたくさん作っておられたので興味をそそられました。今回の公募では、応募する作品点数に制限をかけず募集されていました。複数点の応募が望ましいからといって、作品点数に制限をかけることで逆に弊害が出る場合があるかもしれません。

今回は最終的に1人の審査員が選ぶ作品（作者）数に制限がありましたが、この点については全ての審査員の点数が平均に近づくのでよいと思いました。極端に言うと、制限がないことで選出される作品が、複数いる審査員のうち、たった1人の審査員が選んだ作品ばかりになる可能性もある。どのような公募でも、応募点数や応募方法、審査方法については議論があるでしょうが、今回はこの応募内容や審査方法でよかったと思います。

応募用紙については作品と一緒に読むことができてよかったです。パッと観ただけでは「？」が浮かぶ作品でも、応募用紙を読むことで作品の背景や世界感、完成するまでの過程や行動が面白いと感じて選びたくなったものもありました。

全国に作品を作っている人がこんなにたくさんいる

田端一恵
ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部 次長）
知的障害者入所施設の生活支援員を経て現職。「アール・ブリュット・ジャポネ展」日本側事務局や、ボーダレス・アートミュージアム NO-MA の事業などを担当する。2013年、「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」（文化庁、厚生労働省共催）構成員を務める。

福祉の現場にいて美術は専門外である私は、作品公募の審査員をするのが初めてでした。しかし、美術を美術業界の人だけのものにするのではなく、引け目を感じず、福祉の現場にいるからこその選び方があるだろうという思いで審査にあたりました。福祉をよりどころにしながら、一人の人間として作品を選んだと思います。福祉の視点というと、「アール・ブリュット＝福祉・障害がある人」という危険性を指摘されることが多いですが、だからといって福祉や医療が悪いというわけではない。間違ってはいけないけれど、引け目を感じずアール・ブリュットを軸に様々なところとつながっていけばよいと思います。

率直に驚いたのは全国に作品を作っている人がこんなにたくさんいるんだ、ということ。作品を観ていく中でヒシヒシとその驚きを感じました。新たな事実を発見したという感覚。さらに、知的障害を持つ方などは創作を支援する人々が関わっている。約2,200人という応募者数の背景には5,000人くらいの人が関わっている可能性があります。

選び抜くのは本当に難しかったです。作品だけを観て選ぶのではなく、応募用紙もよく読んで選びました。作者本人ではなく、支援員さんが応募用紙を書かれたものを読むと、そこから支援員さんの姿勢も見えてきました。話ができたら面白いだろうな、と思える方もいて会ってみたいな、とか。自覚はしていなかったけれども、福祉の現場にいたからこその視点はやはりあったかもしれません。また、限られた時間の中で2度、3度と作品を観ていくと、1度目では気付かなかったことに気付くこともあり、最後まで悩みました。今回たくさんの作品を観る中で、面白い、すごいと思う作品にも新たに出会えました。でも、これまでに数多くの作品を観すぎたせいか、アール・ブリュットを知った頃と比べると、新鮮な驚きを感じることに鈍くなっている自分を感じ、少し寂しく思ったということもありました。

もう一つ強く思ったことが、作品調査の重要性です。調査では、支援者さんのフォローの有無や、制作方法、本人の思いなど、作品を観るだけ、応募用紙を読んだだけでは分からないことを知ることができます。数多くの作品を一度に調査することはできないけれども、改めて作品調査の有用性をすごく感じました。

名前
name
番号
number

青森県八戸市・青南病院現地レポート
―訪ねる・調査することの意義―

藁戸さゆみ（社会福祉法人グロー（GLOW）・NO-MA学芸員）

これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAで実施してきた作品調査先は、主に障害福祉施設が多かった。そのため、精神科病院での調査、中でも芸術療法の先駆的な取り組みを行ったことで知られる医療法人青仁会青南病院（以下、青南病院）は、我々が以前から注目していた施設であった。JR八戸駅から歩いて20分ほど、大きな川を越えると、小高い丘の上に立つ青南病院が見えてくる。病院を訪れてまず驚いたのは、エントランスホールがまるで温室のような土と緑に溢れる空間だったことだ。病院の内と外の境界があいまいな、心をリラックスさせる居心地の良い空間であった。今回の調査は、理事長の千葉潜氏のご理解とご協力により実現した。初めに病院の歴史を辿るDVDを拝見した。その後、病院の敷地内に点在する芸術療法によって制作された作品を、千葉理事長に解説していただきながら、実際に見てまわった。

青南病院の設立者である千葉元氏は、1960年代から治療法の一つとして、芸術療法や舞踏療法を取り入れたことで知られている。芸術療法では患者同士で数名のグループをつくり、コンクリートで仏像やレリーフ、建築物など様々なものを制作していた。そのいくつかが、病院の敷地内に展示されている。また、当時制作された作品は、財団法人こころすこやか財団が運営する、こころすこやか会館で常設展示されている。

制作するモチーフは、写真集や図録を見て決めていたそうだ。そのため、神殿の柱や動物をモチーフにしたものから仏像など世界中の民族的なモチーフで溢れていた。特に、皆で制作したという「六角堂」は、その背景に「皆の病気が良くなりますように」との患者たちの願いが込められていた。

今回の調査のもう一つの出会いは、岩城敏夫氏だった。彼は、当時の芸術療法を受けた患者でもあり、現在は細かな点描による絵を描いている。たくさんの色を使い、富士山や鶯、鶴、亀といった縁起物をモチーフとした作品を400点以上も描いている。ある絵の裏面に、文章が書いてあった。そこには、千葉元氏に絵を褒められたことが嬉しく勇気づけられたから絵を描きはじめたこと、また描き続けようと決意したことが書いてあった。現在、芸術療法は行われていないが、先駆的な療法に取り組んだ方々の想いは、確実に伝わっているように感じた。

作品調査では、今回のように作者本人に出会う機会もあり、作品や文字情報だけではない創作の背景などを知り、感じることができる。また、調査と同様にアール・ブリュットの展覧会も作者とその関係者の協力なくしては実現できない。今回の出会いもそうだが、調査で出会った人々との交流は、これからもNO-MAの大きな宝となっていく。

作品調査について

ボーダレス・アートミュージアムNO-MAでは2006年から日本国内及び海外での作品調査を続けている。2012、2013年度は台湾、2014年度はマレーシアでの調査を実施した。NO-MAアートディレクターはたよしこ氏や学芸員のほか、福祉関係者・美術館関係者などが調査員として作家の自宅や施設を訪れ、制作状況の実見、聞き取りを行っている。これまでに、国内延べ165名、台湾16名、マレーシア7名の作家を調査した。

毎年20～30名ほどの作家のもとを訪れ調査結果を報告書としてまとめており、これらのアーカイブが「日本のアール・ブリュット」研究の基礎資料となることを目指している。

事務局日誌

社会福祉法人愛成会　小川由香里、椋本優花、河上舞、三浦千晃

2014年6月27日（金）
作品公募の募集チラシ案について協議。

2014年7月14日（月）
午後から公募事業募集チラシの発送準備。部員総出で行う。

2014年7月25日（金）
事務局ミーティング。

2014年8月27日（水）
毎日平均5名くらいの問い合わせがきている。作品保管場所となる小学校の準備は思ったよりもほこりや汚れがひどく掃除が大変。

2014年8月29日（金）
大きな作品や立体作品等は受け付けてもらえない公募も多いようで、このような公募があって嬉しいとの声を聞く事が何度かあった。

2014年9月8日（月）
本日、問い合わせ件数が合計100件になった。額装について明記していなかったため、問い合わせが多くなっている。実際に郵送する際の状況を予想しながらチラシを作成することが大事であったと痛感した。

2014年9月12日（金）
作品受付の流れの確認を行う。練習として、流れを整理した表を見ながら実物を開梱する。あらゆる場合が想定され、整理が難しい。あらかたの流れを決め、想定外の事態の場合にはその都度対処することにした。

2014年9月16日（火）
応募受付期間が始まった。本日は11名から16点の応募があった。16日の日時指定が大半で、待ち望んでいた方もいらっしゃったのかと嬉しく思う。応募作品が50枚あるので応募用紙を50枚送ってほしいという問合せ。障害のある方ということで、出来るだけ応募しやすいように分かっている内容は記入して応募用紙を送付。作品を応募するまでが大変な人もいるのだと感じる。

2014年9月18日（木）
作品開梱を行うが、予想以上に全員で手順を統一していくことが難しそうである。今後のミスにつながらないように、その都度相談をしていく。

2014年9月19日（金）
施設からの応募とのことで多数の作品を栃木より車で持ってこられた。

2014年9月22日（月）
白紙ノートをHB鉛筆で黒塗りした作品が64冊届く。長年描き貯めている人も多く、複数個をひとまとめにして出品する方が多くなっている。

2014年9月30日（火）
本日の応募作品数は140点であった。お一人で88点応募された方がおり、いまのところ個人の応募点数としては最多である。

2014年10月1日（水）
オリジナルソングを送りたいという方から連絡がある。様々な表現の形があり、とても良い傾向であると感じた。半月で約300点、作品部屋の作品がいっぱいになってきた。

2014年10月2日（木）
撮影機材のセッティングを行う。簡易撮影ではあるが、できる限り綺麗に撮りたいと思う。

2014年10月3日（金）
エイブルアートカンパニーの登録作家の方より応募がある。公募に関して、垣根がない印象と共に広く周知されているのではないかと感じた。

2014年10月7日（火）
応募用紙の記入漏れや着払い伝票の同封なしなど、不備のある方への連絡を進めている。持ち込み希望の方からの連絡が増えてきている。

2014年10月21日（火）
大型作品の応募が増えてきている。中には大型車やトラックを用いて自ら持ち込みをする方もおり、対応をしている。

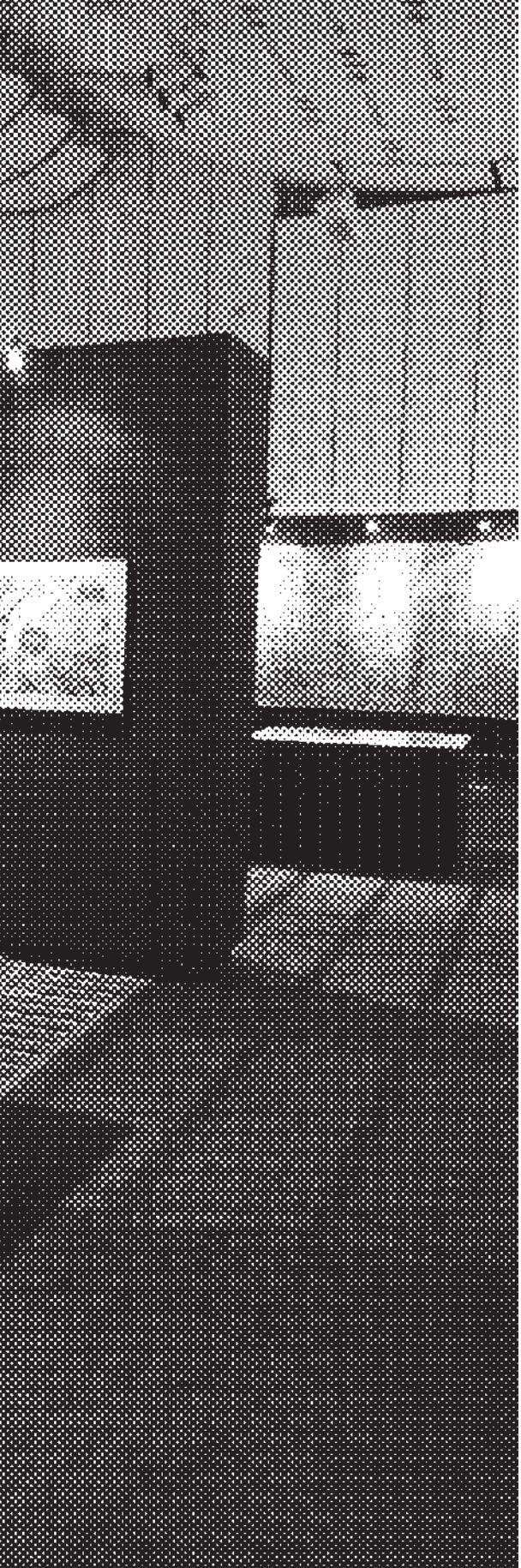
2014年10月24日（金）
半獣半人の大きな立体物が4点応募されてきた。

2014年11月4日（火）
本日より、横井さんと木元さんが応援に駆けつけてくださった。
消印有効で郵送してきた応募者の作品が300箱ほど届く。数回に分けて車で作業場所の旧東中野小学校へ運搬する。

2014年11月5日（水）
応募用紙の確認をしながら受け付け作業を進めていく。様々な作品や応募者がいて、その中にたくさんの思いを感じられる。この中から入選作品の選定がされるかと思うと何とも言い難い思いになってくる。一般の公募では当たり前のことではあるが、選外になった作家やその周りの人がどう受け止めるのだろうという事が気になる。

2014年11月6日（木）
美術関係の学校を出られた方やアーティストとして活動されている方の作品も多く含まれているなぁと感じる。それだけアール・ブリュットが世の中に出て話題を呼んでいるという事なのだと思う。

2014年11月7日（金）
作品数のカウントがほぼ完了した。想像をはるかに超える約2,200人から約4,500点の応募作品。人数で比較すると、2008年に滋賀で行われた公募の約4倍であった。作品が作品保管場所を埋め尽くしていて、ただただ呆然としてしまう。



Act2
「観せる」

アール・ブリュットを社会に発信する展覧会の制作プロセスには、Act1「見つける」における医療・福祉系ネットワークとの連携とはまた違った多領域・異職種との連携がありました。ここでは、「アール・ブリュット ゾーン パルコ」、「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」、「アール・ブリュット☆アート☆日本2」の3つの展覧会の舞台裏を、評価の視点を交えて解き明かしつつ、同時に「アール・ブリュット☆アート☆日本2」の実現に欠かせなかったボランティア組織の運営について紹介します。

Act2-1
多様な主体と共働する3つの展覧会

商業施設を舞台にした「アール・ブリュット ゾーン パルコ」、全国福祉系ネットワークを活かした「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」、地域住民・資源との連携を重視した「アール・ブリュット☆アート☆日本2」。これら3つの異なる主体との共働プロセスには、従来の美術的評価のみでは語りきれない可能性が存在します。ここでは、多領域の評価の視点を活かした展覧会を実現していくための評価ポイントを交えながら、その制作プロセスを紹介します。

開催概要

アール・ブリュット ゾーン パルコ ざわざわするココロとカタチ

2014年度に続き、2回目の開催となった展覧会。商業施設である大津パルコを会場に、施設内全5カ所（内3カ所は店舗内）にアール・ブリュット作品を展示した。

会期｜2014年11月22日（土）～12月25日（木）　34日間
会場｜大津パルコ（滋賀県大津市）　1階 センターコート、3階 雅楽（うた）、5階 東側エスカレーター横／島村楽器、サテライト3階 スプーンライフオンワークス
出品作家｜12名（うち滋賀県内作家5名）　小幡正雄、門山幸順、鎌江一美、久保田洋子、澤田真一、鶴川弘二、西川智之、平岡伸太、藤岡祐機、宮間英次郎、山際正己、吉澤健（50音順）
作品点数｜658点
延べ観覧者数（推定）｜23,764名（12月23日に実施した鑑賞者実勢調査をもとに積算）

関連イベント

（1）KBS京都ラジオ「Glow ～生きることが光になる～」公開収録トークライブ『アール・ブリュット その道程と幸福について』
ゲスト｜田口ランディ（作家）、嘉田由紀子（びわこ成蹊スポーツ大学学長・前滋賀県知事）
聞き手｜アサダワタル（本書監修）
日時｜2014年12月14日（日）
11:00～12:00
会場｜スプーンライフオンワークス（大津パルコ サテライト3階）
参加費｜無料
参加者｜35名

（2）宮間英次郎との写真撮影会
ゲスト｜宮間英次郎（出展作家）
日 時 ｜ 2014年12月20日（土）
15:00～17:00
会場｜大津パルコ内
参加費｜無料

（3）ギャラリートーク ラジオオンエア「PARCO Who's Who」
@e-radio LAKESIDE FM77.0
出演｜井上多枝子（本展アートディレクター）
日時｜2014年11月26日（水）、12月10日（水）、12月17日（水）
各日16：27～　10分程度

担当者のねらい

安藤恵多（社会福祉法人グロー（GLOW））

大津パルコで展覧会を開催するにあたって、三つのねらいを軸に事業を展開していくことを考えた。

一つ目は、「大津パルコをもっとPARCOに！」ということ。株式会社パルコの社名はイタリア語の「公園」を意味する「PARCO」に由来する。パルコでは「公園」とは人々が集い、時間と空間を共有し、楽しんだりくつろいだりする場（空間）であると捉え、また、集う人々（お客さまと専門店）が出会い、喜びと感動が生まれる場（空間）を提供することを使命としている。この考え方は私たちがアール・ブリュットの展示を通じて実現しようとする、誰もが地域で一緒につながって温かみを持って生きていける社会を実現することと同じことだと思い、大津パルコをもっとPARCOにしていくことをお互いの目標にしたいと考えた。

二つ目は、従来の展覧会では行っていなかった新たな手法によるアール・ブリュットの魅力の発信を実践すること。鑑賞とは異なる目的で来場される人々にも、アール・ブリュットとの偶然の出会いを楽しんでもらえるように、商品陳列と連携した作品展示や作品写真を使った顔出し看板など、ワイワイガヤガヤと楽しめる、従来の展覧会とは一味違った新たな手法に挑戦する。

三つ目は3部作の第1弾として取り組むということ。本事業は年間を通して三つの展覧会を展開する。それぞれの展覧会は場所も共働相手のスタイルも違うが、多様な主体と共働し、新たな美術館モデルを創造するというテーマは一貫している。その第1弾として開催する大津パルコでの展覧会では、これまでアール・ブリュットに出会ったことがない人たちにまずその魅力を知ってもらい、より多くの人たちがより深くアール・ブリュットの魅力に触れられるであろう次の二つの展覧会へとつなげていく。そのことを意識した事業展開を目指していきたいと考えている。

［評価の視点］商業施設との共働

その1　大津パルコの場合

長谷川順一

株式会社パルコ 大津店 課長

石原保美

株式会社パルコ 大津店

商業施設である大津パルコで開催された「アール・ブリュット ゾーン パルコ」展。大津パルコ、パルコ内テナント、実行委員会が共働することで、美術館ではない場所での展覧会が実現しました。昨年に引き続き、展覧会を担当してくださった大津パルコの長谷川順一さん、石原保美さんに商業施設において展覧会を開催する意義や可能性について伺いました。

商業施設とテナントの共働

美術館とは異なり、商業施設での展覧会は展示スペースをどこにするか、ということも検討しなくてはならない。店内の通路や共有スペースのような場所であればよいが、テナント内での展示をするには丁寧な交渉が必要となる。通常、「動員企画やセールは参加するが、販売に直結しないであろう企画に売り場を裂いてまで参加することはほぼ無い」という状況の中、作品を展示するという売上に直結しない依頼をしなければならないからだ。2回目となる今回は昨年実現できなかったテナント内での展示を実現するため、長谷川さん、石原さんが交渉にあたった。その際、作品や展示方法について具体的な情報が定まらない中で三つのテナントからスムーズに了解を得られたことはすごいことだ、と長谷川さんは言う。テナントへの説明時に「より具体的に想像してもらえた」ことは昨年度の成果であり、今後開催する機会があればより多くのテナントと共働したいと話す。石原さんは、当初テナント内に作品がどのように展示されるのかイメージするのが難しく不安がある中で交渉にあたった。しかし「ふわっとした説明で店長さんが理解してくれたのがありがたかった」そうで、パルコ側とテナント側とのやりとりは日々色々とあるが、今回は通常よりも一歩踏み込んだやりとりが生まれ「一緒にできたことがうれしかった」という。

とりあえず来てもらうことが先決

新たな取り組みとなったテナント内での展示において、期待されたことの一つが「いつもとは違う、新しいお客さんが店舗にくるのではないか」ということだったという。各テナント担当者も言及しているが、長谷川さんにも「とりあえず来てもらうことが先決」という思いがあった。例えば、島村楽器には音楽に興味がない人が行くことはほとんどないだろう。スプーンライフオンワークスも本館ではなくサテライトという離れた場所にあるため、まだまだ知らない人も多いという。地元にあっていつも行く場所だからこそ、いつもの店以外は立ち寄らない人も多いかもしれない。今回、テナント内部に踏み込んだ展示をすることで、展覧会を目的に訪れた人がこれまで知らなかった、行くことがなかったテナン

トに訪れることが度々あったという。展覧会のねらいは、商業施設に訪れる展覧会を目的としない人、アール・ブリュットを知らない人にこそ、その存在を知ってもらうことができるという点にあった。しかし、そのねらいとは逆の効果も同時に生まれていたのだ。

滋賀にある以上、滋賀にあるものを出していきたい

滋賀・大津にあるパルコだからこそ、「みなさんに滋賀のいいところをもっと知っていただきたい」と石原さん。長谷川さんも同様に滋賀の魅力を発信することは常々「とても意識している」と話す。その言葉の通り、これまでにも甲賀の忍者をテーマにした企画や飛び出し坊やの展覧会などを実施してきた。ここに加わったのが「アール・ブリュット ゾーン パルコ」展だ。2年連続の開催が実現した理由の一つに、アール・ブリュットを扱うことは滋賀の魅力を発信することにつながるという意識が担当者にあったことが挙げられるだろう。長谷川さんは「テナントと共働しながら滋賀を出していくのが大事」なので、地道に取り組みながら浸透させていきたいと考えている。また「これまでは東京の企画をそのまま持って来ることが普通」だったが、大津を発信源としてアール・ブリュットの展覧会が全国に広まる可能性もある。地域の人々や大津パルコを訪れるすべての人々に対して大津パルコという商業施設から滋賀の魅力を発信する。その取り組みはパルコ内部でも地域独自のものを扱う店舗として認識されつつあるそうだ。対外的、内部的に滋賀の魅力を発信する取り組みの一つとしてアール・ブリュットの展覧会が加えられたことは確かだ。

ポイントまとめ！

ポイント1.
日常の関係性から一歩踏み込んだやりとりが生まれる。

ポイント2.
商業的な目的を超えた共通の目的を考える。

ポイント3.
その場所だからこそ、を共働のきっかけにする。

［評価の視点］商業施設との共働
その２　島村楽器の場合

大津パルコ５階の島村楽器には門山幸順さんの作品が展示されました。門山さんの作品は、工業用に使われるグルースティックという接着剤で作られた、カラフルで立体的な作品です。楽器をモチーフにしているものもあり、商品として陳列されている楽器とともにそれらの作品が展示される機会となりました。アール・ブリュット作品の展示という初めての試みに関わったきっかけなどを店長の福地智幸さんに伺いました。

福地智幸
島村楽器株式会社大津パルコ店
アシスタントショップマネージャー

来店の動機付けになれば

ピアノ、ギター、ドラム、管楽器など多くの楽器が所狭しと並ぶ売り場に門山幸順さんの作品が展示された。作品は、赤、青、緑、黄色など原色のグルースティックを盛り重ねてできたカニや象。中にはドラムやギターのネックと合体したもの、天井に吊り下げられているものもあった。楽器店なので、通常は音楽や楽器に興味・関心がある人以外はほぼ訪れないが、今回、作品が展示されたことで、「明らかに普段来られない雰囲気の方や作品だけをさっと観て行かれる方がいらっしゃいました」と福地店長。店内の奥には小さなスタジオがあり、演奏会などのイベントはこれまでにも実施してきたそうだが、作品を展示するというのは初めてだった。展覧会への参加を決めた理由を、福地店長は「率直にこの店舗はお客さんも多くないですし、その中でどうしても面白いことをやっているなと思ってもらって、来ていただける動機を作れるのであれば何でもやろうと思っていました」と話す。大津パルコから打診があった際は、具体的な展示プランは無い状態だったが、門山さんの作品写真を観て、「単純におもしろそう」と感じたという。店長自身が学生時代に芸術系の学科で学んでおり、アートや展覧会などの分野に触れていた経験があることも大きな要因の一つだろう。

制約ばかりでは面白くなくなる

展示作業はアートディレクターや展覧会事務局が担当し、閉館後に作業を行った。福地店長は、どのように展示するか大まかな説明を受け、夜中の展示作業は同席しなかった。「変に規制するよりもお任せしたほうが面白くなると思った」のがその理由だ。完成した展示を観て「朝、出勤した時にすごいなと。うまいことやってくれている」と思ったそうだ。スタッフも当初は「一体何が起こっているのか」という反応だったが、1週間もすると馴染んできて、展示を観ている人に説明する状況も生まれていた。会期中に開催した「宮間英次郎（出品作家）との写真撮影会」では、島村楽器の展示スペース前でも撮影が行われ、店長・スタッフとも参加していた。また、初の試みだけに社内承諾を取る難しさがあるか聞いたところ、「基本的には店長に任されているので問題なかったですね。エリアマネージャーや、会期中にたまたま

店舗を訪れた役員も『いいんじゃない』という反応でした」とスムーズだったようだ。今回は通路に面した部分だけに展示されていたが、今後機会があれば「商品のギターの間に突然作品があるなど、発見するような展示も面白いのでは」と福地店長。店舗としては売上につながることがより望ましいが、「なかなか商売につなげるのは難しい。いつも面白いことや変わったことをやっているな、と思っていただいたらいい。そういう意味ではけっこう反応があるのでうまくいっている」と好感触を得られた。

ポイントまとめ！

ポイント1.
店舗の日常に新たな人の流れ、新たな一面が生まれる。

ポイント2.
制約だけでなくそれぞれの役割を発揮できる状況を作る。

［評価の視点］商業施設との共働
その３　雅楽（うた）・スプーンライフオンワークスの場合

雅楽には山際正己さんの作品が、スプーンライフオンワークス（以下、スプーン）には澤田真一さんの作品が展示されました。前者は子ども服を中心に服飾雑貨を扱っており、後者はカフェで、どちらも同じ会社が運営しています。店長の奥田徹さんに２つの店舗で作品を展示したことについて伺いました。

奥田徹
スプーンライフオンワークス店長

子どもが何かを体験できる場を提供すること

山際正己さんの代表作である「正己地蔵」が展示された雅楽では、「探す楽しみがあり、『一緒に探してみようか』とお子さんに声をかけることもありました」と奥田さん。展示ケースだけでなく、商品の奥や陳列棚の上部など店内の至る所に多数の「正己地蔵」が並んでいた。「日常の演出のように感じられる方や、アール・ブリュットを知らなくて作品だと気付かない方も」多かったが、「インパクトのある大きな作品よりも、今回のように小さい作品が点在しているほうが雅楽にはよかった」という。とはいえ、店舗に溶け込みつつも作品を展示していることが分かるようにポスターなどでもっとアピールしてもよかったという意見もあった。また、「お子さんがアートに接する機会はなかなか無いと思うので、分からないなりに『こんなのもあるよ』と作品を介して子どもが何かを感じたり、体験したりできる場を提供できることはすごくいいと思う」と話し、展示依頼があった際にもうれしく感じたという。

店舗の枠を超えた感性や力を借りたい

一方、スプーンには澤田真一さんの作品４点が展示され、会期中に開催したトークライブ（p154）の会場にもなった。同店は入り口部分に生活雑貨などが並び、その奥にカフェスペースが広がっている。「全国からセレクトした商品を販売しています。ゆくゆくは滋賀の特産品を盛り上げてアピールしていきたい」と考えていた奥田さんにとって、山際さんも澤田さんも滋賀在住の作家というのは、その第一歩となった。大津パルコの長谷川さんや石原さんと同じく滋賀のよいところを発信したいという思いがあり、「スプーンがギャラリー兼販売の場になればいい」と奥田さん。展示方法については、スプーンの日常の空間によく馴染んだものだったが、「大きなパノラマのガラス張りなので、この窓を使うとか。もっとアール・ブリュット感を強く出してもいい」と思ったそうだ。リピーターも多く、「変化のある、常に生きた店作りをしたい。内々のスタッフだけでなく、違う感性や力をお借りしたらより面白いものができる」ので、提案があればどんどんやってみたいという。パルコ内での連携にも積極的で、「色

んなところに行ってもらいたい。作品を探しに行くのは楽しいのではないか」とスプーン以外の展示会場を案内することも。3店舗に限らずもっと広がりがあっても面白いと奥田さんは感じたという。今回の共働で店作りに活かせる新たなつながりを得る機会になったのではないだろうか。

ポイントまとめ！

ポイント1.
空間、客層などを知ることでより効果的な展示が可能になる。

ポイント2.
外部の視点を交差させることがプラスの効果を生む。

Spoon Life
On Works
OPEN
アール・ブリュット・ゾーン・パルコ
ART BRUT ZONE PARCO

制作日誌

安藤恵多（社会福祉法人グロー（GLOW））

2014年6月26日（木）
パルコ展の打合せのため西川さんとパルコ訪問。会期が決まり、一安心。

2014年7月1日（火）
朝からパルコ展の概要をまとめた。帰りの電車内で横井さんから「パルコ展で成安造形大学の学生と組んでファッションショーしたらどう？」という意見があった。

2014年7月7日（月）
朝から芸文でミーティング。世にだしたモノ（企画展）の責任を考えるのではなく、出すときに覚悟を持って出せる体制で仕事をしていこうと話をする。

2014年7月15日（火）
井上多枝子さんからパルコとの話の進み具合について問い合わせ。パルコにテナント店舗の感触を問い合わせたが、むずかしいとのこと。やはりテナント店舗との共働というのは一筋縄ではいかないようだ。

2014年8月3日（日）
井上さんを交えて、パルコで打合せ。3時間にも及ぶ会議だったが、事業目的の再確認や昨年の振り返りなどを行い、2年目ということもあってかサクサクといろんなことが決まっていった。特に、昨年の研究会の意見を受けて、展示作品はすべて撮影OKにできるように作家に交渉していくことになったのはよかった。

2014年8月20日（水）
パルコ展の打合せのための資料作成を行う。スケジュールを検討していると、かなりタイトな状況にあることを認識した。（うすうす感じてはいたけども…）。

2014年8月21日（木）
井上さんから出展候補作家が提示され、みんなで作品を見ながら決めていった。楽器を素材にしている作品があったので、島村楽器店にそれを展示できないか交渉することになったり、宮間さんのサンタバージョンポスターを作ってみようとか、みんな好きなことを言いながらも、少しずつ展覧会の形が見えてきた。

2014年8月22日（金）
宮間さんにパルコに来てもらう日まで決めて、順調と思っていたら、なんとその日が宮間さんの80歳の誕生日で、サプライズの誕生日会を企画しているから作品は貸せないかもと言ってこられた。まさに3歩進んで2歩下がる状態。

2014年8月29日（金）
井上さんからパルコ展イベントに宮間さんが来る日が決まったと連絡があった。これで嘉田さんと田口さんのトーク日も調整してもらえるのでよかった。

アートディレクターの視点

井上多枝子

井上多枝子

京都精華大学造形学科卒業。知的障害者施設に入職し全国的に展覧会を開催。開館前からNO-MAに関わり、2年ほどアジア、アフリカ旅行を経て現在、知的障害者施設のアトリエを担当しながらNPO法人のアートディレクターを兼務。展覧会企画、障害者の作品発信を展開。

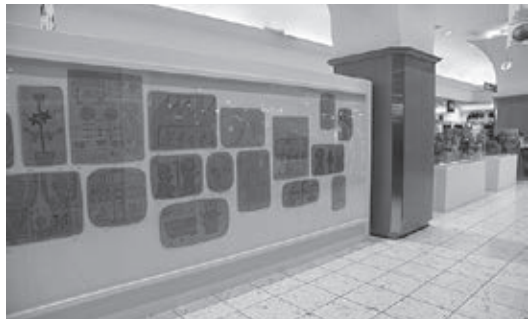
日常の中で「あっ」と気付く、その先へ

昨年に続き２度目の大津パルコでの展示をディレクションするにあたり、展示要素はほぼ昨年と同様とした。これには、前回の展覧会を思い出してもらうための要素も含まれている。台や壁面の色は館内全体の色と同様、白とした。展示作家は1名を除いて変更し、「観る」だけではなく「読む」要素を取り入れ、また作品を鑑賞するときの視点の高さや位置に変化を持たせたことも昨年と同じといえるだろう。これは、様々な人の興味がどこに湧くのか、どこを視点として歩いているのか、その多様性を視野に入れた結果といえる。大津パルコは商業施設であることから、全体的に照明が非常に明るい。展示したとき作品と一緒に視野に入る様々なもの――大量生産された衣服、テナントのイメージ、イベントのサイン――との違いを出す必要性があるが、唐突で奇抜な、過度な演出は必要ないのではと思った。服を買いに来た人、ふらっと立ち寄った人、友人や家族に付き合って入った人、そんな人たちがいつもどおりに店内を歩いているとき、「あっ」といつもと違うものを見つける瞬間。それは演出からではなく、作品そのものが持つ魅力からであってほしいからだ。

その「あっ」の次にもう一人の違う作家の作品、そして違う場所を歩いているとまた今まで見たことのないものが台の中にある、というように、本人も気付かないあいだに作品鑑賞してしまう空間を作り出していく。作品鑑賞したという認識は、その瞬間かもしれないし家に帰ってからかもしれない。それはアートの日常化を図ることができる場所とも言えるだろう。

言うまでもなく滋賀には、自由造形の精神が福祉施設に内在していると言える。そして近江八幡市にボーダレス・アートミュージアムNO-MAができた10年前から、急速に県民たちが現代アート、アール・ブリュットと出会う機会は増え、メディアも通じて広まっていることを実感している。しかし、ギャラリーやミュージアムに行くことが日常でない人にとっては、まだ遠い存在であることも確かである。アートの面白さに心から気付く可能性が、ミュージアムではない場所での展示にはある。

ただし、そこにはミュージアムとはまた違う、場との連携が必要である。今回は、パルコ内の三つのテナントでの展示も含まれていた。展示が決まったテナント内を見たときに真っ先に浮かんだ作家の作品を展示することにしたが、結果的に各店のイメージに合いすぎた作品たちはもともとそこにあったかのように感じられた。作品展示なのかテナントの演出なのか。その両方の要素を含めたことにより、作品の魅力を引き出す難しさを感じた。イメージの強いテナントでの展示では、人が作品に気付きやすい展示方法が望まれる。それにはテナントとの打ち合



わせを重視する必要がある。

展示は大津パルコ内に点在した。昨年見た人の動きから会場案内図は必要ないのではという意見が出ていたが、展覧会が始まるとそれを求める声がちらほらと聞かれ、作成し各展示場所に設置した。会期中は時々パルコへ行き、人の目線の流れや動きを見るようにしていたが、その案内図はいつ行っても無いか少ないかのどちらかであった。つまり、先に出した情報から鑑賞目的で大津パルコへ来た人も少なくなく、初めて見た人もほかの作品を見たいという欲求にかられているということである。大津パルコを訪れる客層は幅広く、また展示作品はいつ行っても誰かが鑑賞していた。携帯で写真を撮っている主婦、驚きの言葉を発しながら友人と見合っている女子高生、先を急ぐ母親を呼び止め作品に没頭する小学生。観た人達の心がざわざわしている。この彼らの「発見」をその先へつなげるためにNO-MAの紹介パネルも展示したが、これを見ている人は少なかったように感じる。

もしまた機会があるなら、展示空間に商業施設とミュージアムの融合性が自然と出てくるかもしれない。それはこの度の展示でも感じられたことだ。観覧するために商業施設へ来る人が増え、鑑賞者は作品に気付くその先へ向かっていく。

広報デザイナーの視点

中崎航

広報物制作における過程と思案

中崎航

デザイナー。大阪を拠点に、展覧会広報物、店舗のロゴマーク、書籍などのデザインを手がける。

「アール・ブリュット ゾーン パルコ」展において、広報物一式のディレクションを担当した。具体的には、展覧会のロゴマーク、フライヤー（チラシ）、大津パルコ館内における告知用ポスターを大きさ違いで２種類、大津パルコ正面入口前の柱に巻くための大型タペストリーを制作した。

制作にあたり、展覧会開始の約３ヶ月前に、大津パルコの担当者である長谷川氏、石原氏、展覧会構成を担う井上氏、展覧会事務局を担う安藤氏を交えた打ち合わせに同席し、展覧会概要と進捗状況を聞いた。この時点では未確定要素も多く、ようやく出展作家が確定しようかという段階であったが、展示に向けて熱のこもった会議だという印象を受けた。

広報物制作の方向性に関する議論については、今回が昨年に続いて２度目の開催ということもあってか、はじめて参加した立場からすると少し内輪的に感じる部分もあった。そのため、より俯瞰した視点で介在し、担当者内で内側に向けられている熱量を外側へ向けて伝えるための工夫が必要だと考えた。

広報物の制作を進めるにあたり、“展覧会の広報物”というイメージを打ち出すことを強く意識した。昨年の広報物は商業施設内で行われる賑やかなイベントを紹介するというイメージだったので、今回は商業施設内で開催される“展覧会”であることを、総体的な印象としてかたちづくることに留意している。

幾度かの修正を経て完成した広報物は、フライヤーは宮間氏をメインビジュアルとして、ポスターには２種類それぞれに宮間氏、久保田氏の作品を、柱巻きタペストリーには久保田氏の作品を使用させていただいている。

宮間氏の自転車姿が入ったポスターに使用した、「トナカイ代わりにママチャリ乗って」というキャッチコピーはこちらで思案し、提案したものが採用された。これは、最初の会議であがった「クリスマスのセール時期に展覧会が開催されるので、宮間さんをサンタに見立てて、宮間サンタというのはどうだろう」というアイデアをかたちにしたものである。広報物制作のために新たに写真を撮り下ろすことが叶わなかったので、キャッチコピーのみで宮間さんをサンタに見せる構成案となっており、当初はキャッチコピーを２種1対のものとして、宮間サンタなる架空の存在が伝わるように制作を行っていた。しかし、別案として提案していた、久保田氏の作品を使用した案と双方の案を採用したいという旨を受け、1対ではなく片方の案のみの採用となったのは心残りである。

苦労した点をあげると、1度目の打合せ以降は安藤氏を介してのやりとりとなったことだ。安藤氏の尽力もあり、苦労しつつも担当者の意向を汲みながら制作にあたることができたが、意図を伝える、あ

るいは意向を伺うためには、顔を付き合わせて対話をすることが最も良い方法だと考えている。

また、印刷の仕様など実際的な制約がいくつかあり、限られた条件下での制作となった。フライヤーは薄いコート紙の簡素さが、良い意味で宮間氏のビジュアルを引き立ててくれた一面もあるが、諸条件がある中でも、規格や判型といった部分で、画一的な仕様に則らないことにより表現できる可能性については、もう少し探ることができたのではないかとも感じている。

展覧会が始まり、大津パルコを訪れて記録用の撮影を行った。制作した広報物や展示作品を見ながら館内を巡るなかで、展示場所までの動線が分かりにくいことが気になった。今回の制作物には無かったが、展示場所までの誘導サインを充実させる、あるいは共働店舗の紹介文とともに、展示場所を示した館内MAPを配布するなど、展示企画に寄りそうかたちで店舗の魅力をプロモーションしつつ、館内を回遊すること自体がひとつの文脈となるような仕組みをつくることも可能だったのかもしれない。

展覧会レビュー　竹内厚

アール・ブリュット ゾーン パルコ

商業施設とアール・ブリュットの共闘作業のゆくえ

竹内厚

編集者、ライター。関西圏を中心にアート記事の執筆、書籍やフリーペーパーの編集などを手がける。

商業施設における展覧会、それもギャラリーなどの専用施設を備えているわけではない場所にあって、どんな展示がなされているか。鑑賞者側からすれば、こうした企画に対する期待値はそれほど高いものではない。というのも、空いた壁面に作品を飾りつけて、どんなやり方であれ作品を提示すればそれが展覧会でしょと居直っているような企画を目にすることが少なくないからだ。そうした経験が積み重ねられた結果として、商業施設での企画には期待半分で挑むべしというのが、賢い鑑賞者の言わずもがなのスタンスとして当たり前のものになっている。

そういった意味では、2013年、大津パルコで初めて行われた『アール・ブリュット ゾーン パルコ』には驚かされた。作家の選出から作品選択、展示場所の設定とそのやり方、作品を伝えるためのキャプション、鑑賞者が作品と関わることのできる仕掛けにいたるまで、「展覧会」をいかに作りあげるか、考えられることはすべて丁寧に実行されているように感じたからだ。であれば、鑑賞側の期待値もおのずと上がってくる。そして2014年、2回目の企画展を迎えた。前回はいかにも「商業施設での展覧会」然としていた告知チラシも、ぐっとデザインの質を高めたものとして届けられた。ますますやる気じゃないのと期待は高まるばかり。

まず、今回の展示をひと言で要約すれば、2013年の経験を受け継ぎながらも、テナントショップの内部にまで展示を展開するという点では、前年以上の発展を目指した意欲的なものだった。たとえば、子ども服の「雅楽」には、小さな地蔵を無数に作りあげた山際正己の作品（写真左上）、「島村楽器」には、楽器などにファンキーな色の接着剤を塗り重ねていく門山幸順の作品が選ばれており、いずれも違和感なくショップに溶けこんでいた。店舗装飾に準じた展示方法が採られたことも、作品とショップの融和を促したようだ。

ただ、このショップ内展示という試みは、まだ功罪相半ばという印象も受けた。アール・ブリュット作品が抱えるさまざまな文脈から解き放たれて、鑑賞者にとっては日常の延長に自然とあるという点では、作品受容のひとつの可能性といえる。何気ない店内装飾雑貨とも見える立体物が、実はアール・ブリュット作品であるということ。ときに過剰なまでのコンテクストを背負わされがちなアール・ブリュットにあって、そのさり気なさはさらに追求する価値がありそうだ。

一方で、作品鑑賞を目当てとして訪れた者にとっては、作品としての衝撃は薄められていたように思う。このことは、ショップ内に置かれた作品だけでなく、5階「紀伊國屋書店」前通路に展示された作品にも感じられた。おそらく書店前という場所を考

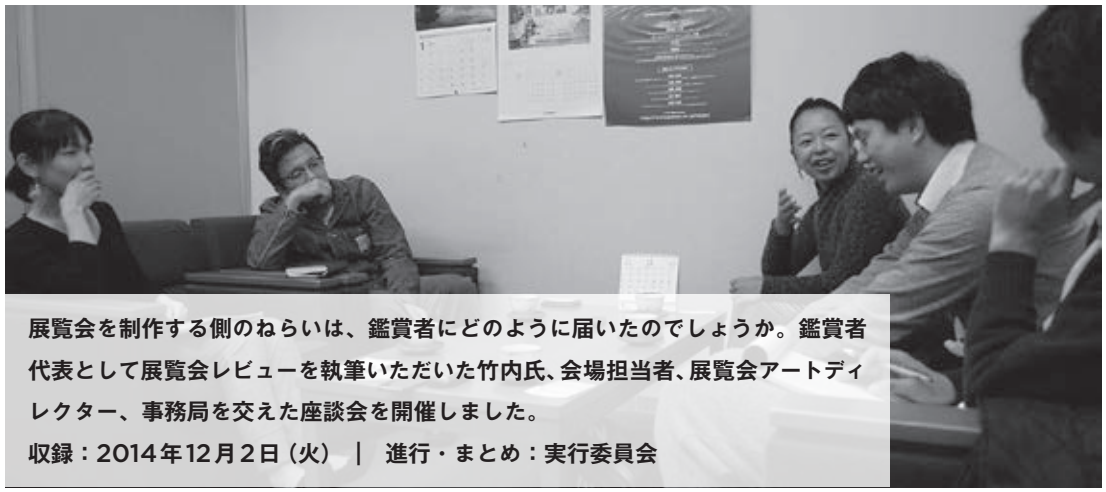
慮して、紙、ノート、文字といった要素をもつ作品が選ばれていたが、空間との親和性が高まるのに反比例して、作品の強度、個別性といったものは目減りしていたのではないか。

具体的な作品に即して言えば、自分だけのルールで大量のノートをとり、書き終えた後はセロテープでノートを封印、誰も見られなくしてしまうという吉澤健の作品は、そのマイルールの貫徹ぶり、見た目の強度からすれば、大量流通している書籍へのカウンターとしても、書店前での展示は有効だったかもしれない。が、紙にハサミを入れるという、とても単純で本能的な行為を続けている藤岡祐機の驚くべき繊細さ（写真左下）に対して、書店前での展示がプラスに働いているとは感じられなかった。

作品が抱える豊かな魅力のどの部分を引き出すのか。アール・ブリュットにおいては、その多くはキュレーター、展示担当者に委ねられる。その面白さと困難が、今回の展覧会においてはより浮き彫りになっていた。その意味では、展覧会チラシのメインビジュアルとしても使われた宮間英次郎の作品点数が少なく、ささやかな展示におさまっていたことは残念だった。モノだけをとれば、ハイファッションにも見えかねないという点では、商業施設との親和性が高く、それでいて、既成の美意識や固定観念におさまらない宮間英次郎の作品が、もしも大量に展開されていたとすれば…。会期中に開催されたイベント「宮間英次郎さんとの写真撮影会」（写真右）を拝見できなかったが、そのイベントの瞬間が今回の展覧会のハイライトだったかもしれない。

アール・ブリュットを扱い、かつ商業施設での展覧会であること。どちらも美術の周縁に置かれがちなものだけに、大津パルコでの試みがジャストな着地点を見出だせれば、展覧会のあり方そのものを問い直すようなモデルケースとなるのでは。そう期待している。

アール・ブリュット ゾーン パルコ
展覧会の現場と実際を語る座談会



展覧会を制作する側のねらいは、鑑賞者にどのように届いたのでしょうか。鑑賞者代表として展覧会レビューを執筆いただいた竹内氏、会場担当者、展覧会アートディレクター、事務局を交えた座談会を開催しました。
収録：2014年12月2日（火）｜ 進行・まとめ：実行委員会

竹内厚（ライター・右手前）×**長谷川順一**（大津パルコ・左奥）／**石原保美**（大津パルコ・左手前）
×**井上多枝子**（本展アートディレクター・右奥）×**安藤恵多**（本展事務局・社会福祉法人グロー（GLOW）・右中）

商業施設での展示

――まずは井上さんから、本展のテーマや力を入れた点などをお話ください。

井上　同じ会場で2度目の開催となったので、小さなことも含めて昨年の経験からやってみたかったことに取り組みました。例えば、1階センターコートの展示スペースには壁面を設置して両側に作品を展示しています。その両側を逃さず観ていただくために、柱と柱の間に設置した壁面にくぐり抜けられる部分を作りました。また、作品の選定においては昨年度同様、商業施設での展示ということを意識しながら、2番煎じにならないようしっかり選んでいこうという思いがありました。1名を除いて今年初めて展示する作品です。夏に鳥取で開催した大きな展覧会の中で出会った新しい作家の作品も紹介しました。

――竹内さんは昨年度のパルコ展もご覧いただいたそうですが、今年の展覧会はいかがでしたか？

竹内　昨年から見応えのある展覧会だと思っています。アール・ブリュットの展示に限らずショッピングセンターでの展示はたくさんありますが、きちんと展覧会にするのは難しい。座談会の場だから言うのではなくて、難しさがある中で、作品をちゃんと選定されていて、昨年のクオリティを思い出しながら観てもその期待は裏切られませんでした。ただ、展示場所が分かりづらかった。チラシを見ながらでも、中には探しきれない作品もあって、受付から問合せの電話をかけました。

長谷川　展示場所が分からないという問合せは何度かありました。

竹内　展示の導入となっている1階のセンターコートでも他のフロアの展示場所について案内がなかったので、宝探しのようだったとも言えますが、全ての作品を観に来た人にとっては随分ハードルが高いかな、と思いました。展示は全体的に店舗空間と親和性が高くて、本屋の前に紙と文字の作品があるなど、そこに興味がある人をつなげていることが理解できる一方で、ちょっと埋もれる感じもあったなと思います。じっくり観ると、藤岡さんの作品がすごいなと思いました。

店舗の日常と作品のバランス

井上　前回実現できなかったテナント内での展示は、昨年度と大きく違う点です。店舗の雰囲気がすでに出来上がっている中で、展示にマッチする作家は限られていました。店舗を観た瞬間に、一人の作家しか浮かばなかったほどです。

竹内　昨年度はテナント内の展示がなかったので、まさかテナント内に展示されているとは思いませんでした。行ってみたら、マッチしていて面白かった。ある部分では、マッチしすぎていて、テンポラリーな店舗装飾に見えてしまったところも。すごく店舗に溶け込んでいて、違和感がなさすぎたんですね。1ヶ月という期間限定ではなくて、常設展示にするならよいと思いました。雰囲気にマッチすることに重点をおいて展示されるのであれば、テナントの中においては、特に気付かれにくいのではないかと思いました。ショッピングセンターはただでさえ情報量が多いので、通路ならまだしも、店舗の内部にまで入りこむと、作品から受ける衝撃度は薄かったかもしれない。一方で、普段の店舗にはない感じが出るので、テナントのスタッフの方々は喜ぶのではないかと思いました。

井上　意外性がないと作品に気付きづらいということもあるので、そのボーダーをもう少し踏み込んで探ればよかったな、と竹内さんのご意見を聞いて思いました。ただ、やりすぎるときっと格好悪くなってしまう。次の機会があればもうちょっと冒険したいですね。

――店舗にとっては、店舗の日常もあって、たくさんのことには関われないとか、いろんな物理的な制約もあるでしょうね。

石原　雅楽のタワーの展示台は、お客さんが服を見ている時に、服と同じ目の高さにあるので、「何これ？」という感じで観ておられます。服を見ながら作品にも気付いて、作品を熱心に観られている方もけっこういらっしゃる。真ん中に展示台を置いておくという方法はよかったなと感じています。

井上　タワー形の展示台を置いたことが店舗内の展示で一番冒険した方法ですね。あれがなければもっと溶け込んでいたと思います。

竹内　作品がテナントに入りこんでいるだけではなくて、同じ作家の作品を別の場所、例えばセンターコートなどでも展示として成立させていたら、テナント内でも作品として認識がしやすかったかもしれませんね。

誰にでもやさしい展示案内

安藤　展示のことを全く知らずに会場へ来た時には、どこに作品があるのか分かりづらい。いわゆる美術館にあるような洗練された発信ではなく、もう少し泥臭い発信の仕方も必要じゃないかと感じました。

井上　インフォメーションについては昨年からたくさん議論をしてきました。その中で、色々な案はあるが出来ないことがあり、また、全部を観てもらうことを大前提にする必要はないのではないか、という結論に達しています。

長谷川　例えば共有通路などにもっと露骨に看板を出すとか、立体の地図とかを作ってもよかったかもしれないですね。

――すべての作品を観てもらうことが必須ではないという結論に達した理由は？

長谷川　アール・ブリュットを知らない方にも知ってもらいたいというのが元々の動機でした。一部でも観てもらって、そこから興味を持っていただけたら成功で、意味があるものになるだろうと。ですので、全てを観てもらうことに執着しなかったんです。

竹内　きっちりキュレーションしているということがもう少し分かってもいいのかなと感じました。例えば、「ざわざわするカタチとココロ」というサブタイトルがつけられていましたが、どういう意図だったのか。あるいは、井上さんが先ほど言われたように、鳥取の展覧会で出会った作家がピックアップされているのであれば、そのことが知らされるだけでも、鑑賞側としてはキュレーターの動きが垣間見えるし、そうやって作家が掘り起こされて、紹介されていくんだなという現場の動きが感じられて、より親近感をもって観られたように思います。すべてのテキストを掲示すれば、当然、煩雑にはなるので、簡単な印刷物として用意されていれば、展示に興味を抱いた人にとっては、今後へとつながるガイドとなったかもしれません。作家紹介のキャプションもそこにまとまっていてもよかったですね。

井上　知らない人にも知っている人にもどちらにも満足してもらえる案内やサービスが美術館だけじゃなくパルコでも必要ですね。

竹内　わかりやすさを求めるあまり、ついテキストで伝えることを遠慮してしまったりしますけど、もしかすると、アール・ブリュットを見慣れていない人ほど、きちんとした解説を読みたいと感じるかもしれない。作品解説のキャプションをよく読んだ上で、作品を観るという手順は、あらゆる展覧会の会場でよく見かける光景ですから。

広報ツールのクオリティ

竹内　今回、チラシのクオリティがめちゃくちゃ高いと思いました。展覧会の導入としてグッとつかまれました。

――関連イベントでも宮間さんの撮影会がありました。商業施設、ファッションには押し出しやすいというキャラクターでもありましたね。

長谷川　私は昨年から宮間さんを

やりたいと思っていました。

井上　最初から出品作家として決めていました。宮間さんは今年80歳で今、乗りに乗っています。本人に会わないと本当の良さは分からないのでイベントも企画しました。

竹内　チラシで期待が高まった分、宮間さんに期待していました。作品のマネキンがせめて10体くらいあったらよかったのかな、と。

井上　事情があって1体借りるのが限界だったんです。

長谷川　たくさん借りられたらショーウィンドウにも展示したかったですね。

――長谷川さんは展覧会をパッケージ化して他店に巡回してみたい、とお話されていましたね。

長谷川　パルコも館によって色が違うので、メインだけは同じにして、一部作家を変更しながらやるとか。大津店規模があれば、ある程度の作品数は持っていけそうですし、パッケージ化できれば巡回できるのではないかと考えています。

竹内　商業施設には必ずある什器などを活かすと、巡回しやすいのではないでしょうか。マネキンとか、ショーウインドウとか、いゆわる美術館やギャラリーにはない部分を活用していけば、パルコならではの展覧会にもなっていくので楽しそうです。そこに、巡回先のその土地ならではの作家紹介などがプラスされていけば、なによりですね。

違いをどう見せるのか

井上　滋賀ではずっとアール・ブリュットの活動を続けていて、その影響が効果的に現れていると感じています。作品を観ている女子高生が「澤田くんや！」と作者を知っていたり、「NHKで観た」と言う声が聞こえたり。時代が追いついてきたという感じもします。

竹内　時代が追いついてきたというか、アール・ブリュットの展示が増えてきていますよね。「障害者アート」も増えている。美術館や図書館でもたくさん展示されている状況が「地域アート」にすごく似ていて、たくさんやっています。でも、作品を観たら、グッとくるものとこないものが明確にあります。大津パルコやNO-MAでやっている展示はきちんと選ばれているなと思いました。

――はじめて観て面白いと思ってもらえるかどうかが一番重要かもしれませんね。その時にあるクオリティをクリアしてすごく響く作品もあるだろうし、ひょっとしたらアール・ブリュットの展示を観た事のある人がパルコに来て、やっぱりここの展示はすごいと思ってもらえるかどうか。

竹内　「アール・ブリュット ゾーン パルコ」は、会場を提供しているパルコの担当者の方と展覧会を企画しているキュレーターとが、いかにアール・ブリュットの魅力を伝えていくかについて、とても丁寧に考えられているし、慎重に進められていると思います。それはもちろん、展示を観ればわかるというものかもしれませんが、単なる賑やかしのイベントではないことがもっとアピールされていてもいいのではないでしょうか。そうすれば、きっとお客さんも無視できませんよ。

制作日誌

安藤恵多（社会福祉法人グロー（GLOW））

2014年9月19日（金）
島村楽器で展示できることになった。メリットがあるかどうかということも共働を検討する材料になっているが、テナント側が一緒にやることや、アール・ブリュットのことを面白いと思うかどうかがそれ以上に重要なことになっているようだった。

2014年9月29日（月）
フライヤー、ポスター、柱巻バナーのデザイン案ができあがる。なかなか良い感じ。

2014年10月3日（金）
ビジュアルデザインについて、長谷川さんから返事が来た。「お客さま」の存在を強く意識して考えておられる視点がはやり商業施設の責任者という風に感じた。

2014年10月6日（月）
共働するテナントの店長と顔合わせ&打合せ。スプーンライフオンワークスと雅楽のオーナーはアートやデザインが好きで、展示にも前向きな感じだった。島村楽器の店長は、やるなら思いっきりやりましょうということで、かなりいい展示ができそう。テナントとの共働は、当初難しいということだったが、2人だけでもおもしろさを感じてくれた人がいてよかった。共感してくれる人を大切にして、つながっていくことで、また新しい人とつながるような仕事をしていきたいと思う。

2014年10月15日（水）
中崎さんからポスターの修正案が出てくる。会期が昨年より伸びていること、デザインが良く目を引くと思うので、パルコに相談してチラシの印刷枚数を増やしてもらった。

2014年10月21日（火）
チラシについて最終の修正を中崎さんにお願いした。

2014年10月22日（水）
パルコ展のチラシ入稿。なんとかできた。よかった。展示設営については、とりあえず、タワー型展示台の図面がないと話にならないので、それを描きはじめた。

2014年10月24日（金）
展示設営にかかる費用負担について調整。何とか仕様案が確定した。

2014年10月27日（月）
仕様案について井上さんからOKとの返事をゲット。あとは部内で決裁をとって明日に業者へ発送！の予定。

2014年10月28日（火）
何とかパルコ展の展示設営の見積依頼を業者に送ることができた。結果的に自分が図面を修正したり、仕様書を整えることで展示企画・構成のことがよくわかった。

アール・ブリュット ゾーン パルコ
ART BRUT ZONE PARCO
接触禁止

開催概要

アール・ブリュット ユートピアの創造主たち

全国の福祉関係者が一堂に会する「アメニティーフォーラム」を主催する実行委員会との共働による展覧会。同フォーラム会場の一部に展示会場を設け、多くの福祉関係者にアール・ブリュットの魅力を発信した。「アール・ブリュット作品全国公募」で選定された作品も展示した。

会期｜2015年2月6日（金）～2月8日（日）　3日間
会場｜大津プリンスホテル コンベンションホール淡海
出品作家｜41名　＜アール・ブリュット作品全国公募＞渥美圭亮、磯野貴之、岡崎莉望、香川定之、金杉匠蔵、川越壮真、木村全彦、酒井友章、佐々木華枝、柴田龍平、清野ちはる、菅原康匡、清野ミナ、添野寛之、曽祇一晃、高橋真二、中島涼介、中道一輝、西岡弘治、西田裕一、西山洋亮、平塚泰史、平野智之、平山和詩、藤田雄、松橋巧実、三科琢美、柳剛、横田勲、横山涼、吉田一郎＜写真家がとらえたアール・ブリュット＞大西暢夫、マリオ・デル・クルト＜日本のアール・ブリュット＞岩城敏夫、勝部翔太、古久保憲満、澤田真一、鮃万里絵、冨山健二、藤岡祐機、三橋精樹（テーマごと／50音順）
作品点数｜319点　**観覧料**｜500円　**延べ観覧者数**｜2,011人

関連イベント

2015年2月6日（金）

（1）講演「Art“s”（アーツ）で「ナニモカモ」越えていこう！」
講師｜松下功（作曲家、東京藝術大学副学長）
聞き手｜小林瑞恵(本展アートディレクター)
参加者｜68名

（2）「アール・ブリュット作品全国公募 審査の結果から」
登壇者｜田島征三（美術家・絵本作家、アール・ブリュット作品全国公募審査員）
参加者｜64名

（3）座談会「作品発掘のプロセスについて語り合う～アール・ブリュットへその道程と幸福について～」
登壇者｜平野智之（公募入選者）、朝比奈益代（クラフト工房 La Mano）、米田昌功（NPO法人工房ココペリ・日本画家）、小川由香里（社会福祉法人愛成会）、小林瑞恵（同上）、横井悠（社会福祉法人グロー（GLOW）・NO-MA学芸員）、コーディネーター：アサダワタル（本書監修）
参加者｜85名

（4）対談「ワンパターンが世界を救う～繰り返される新しさ～」
出演者｜鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）、田口ランディ（作家）
参加者｜83名

2015年2月7日（土）

（5）特別講演
「生々しい何かと強迫 ～なぜ、作品に巻き込まれるのか～」
講師｜きたやまおさむ(精神科医・作詞家)
参加者｜194名

（6）スペシャルギャラリートーク女子会ミーティング ～アール・ブリュットの魅力を語り合う～
ナビゲーター｜小林瑞恵（同上）、はたよしこ(NO-MAアートディレクター)
スペシャルゲスト｜安倍昭恵（内閣総理大臣夫人）
参加者｜98名

2015年2月6日（金）～8日（日）
会期中全10回実施　NO-MA学芸員によるギャラリートーク

同時開催企画

アール・ブリュットネットワークフォーラム特別講演「アール・ブリュットと日本の美術」
登壇者｜野見山暁治（洋画家）
聞き手｜田島征三（美術家・絵本作家）
主催｜滋賀県、社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
協力｜アール・ブリュットネットワーク

担当者のねらい

横井悠（社会福祉法人グロー（GLOW）・NO-MA学芸員）

この展覧会では、一般の来場者をはじめ、同会場で開催されるアメニティーフォーラム19に参加する全国の福祉関係者、国・地方自治体の行政関係者など、様々な立場の人々に、アール・ブリュットの現在を展望してもらう機会となることを目指す。一度もアール・ブリュットの作品を観たことがない人も、過去に何度か作品を観たことがある人も、作品との出会いがより新しいものとなるような場を作っていきたいと考えている。

そのために本展では、三つのテーマを軸に作品を紹介した。一つは国内外で評価されている代表的な日本のアール・ブリュット。次に今年度実施した「アール・ブリュット作品全国公募創造のカタチ、公募します」の入選作品。さらには、これまで日本のアール・ブリュットを撮影してきた写真家の大西暢夫と、世界のアール・ブリュットを長年にわたり撮影してきた写真家のマリオ・デル・クルトの作品もあわせて展示する。また、関連イベントでは、アール・ブリュットの表現に可能性を感じる他分野の専門家による講演や対談、展覧会場内で行うギャラリートークなどを実施する。作品を観て体験したことを、さらに深く考察する場として多面的な内容を企画したい。

今回の見どころの一つが、公募作品の紹介である。これは、私たちにとっても初の試みであり、これまでに観たことのない新たな表現に出会える機会でもある。また、作者とその支援者を招いた座談会を実施し、創作風景・背景を紹介しながら、想いを共有し作品に対する理解をより深める場としたい。私たちとしても新しい出会いを楽しみながら、展覧会を構想していきたいと考えている。

作者や作者を支える多くの人々との関係性を築きながら、展示内容だけでなく、展示にリンクした関連イベントを充実させる。3日間という短い期間での開催だが、来場者により濃密な展覧会を体験してもらいたい。

［評価の視点］全国規模の福祉ネットワークとの共働

その1　田中正博さんの場合

田中正博

アメニティーフォーラム実行委員長。全国手をつなぐ育成会連合会 統括、全国地域生活支援ネットワーク顧問、社会福祉法人愛成会 副理事長、障害者政策委員会（内閣府）委員。1982年10月より民間福祉団体このみの設立に参画し、後にレスパイトサービスと呼ばれる支援体制を確立する。

アメニティーフォーラムは全国から福祉関係者が集まるフォーラムです。障害がハンディにならない地域社会の実現を目指して1998年にスタートし、毎年2月に開催されています。「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」は同フォーラムの会場内で同時開催された展覧会です。アメニティーフォーラム実行委員長である田中正博さんにこの場所で展覧会を開催することの意義について執筆いただきました。

アール・ブリュットとアメニティーフォーラム

毎年２月に行われるアメニティーフォーラムが、今年で19回を迎え、1,400人の参加者を得て盛大に大会が行われました。「障害者福祉」「相談支援」「発達障害」等、福祉分野のプログラムに加え、バリアフリーな映画上映とアール・ブリュット作品の展覧会が開催されています。

アメニティーフォーラムは全国の有志で実行委員会を組織しながら、全国地域生活支援ネットワーク（以下全国ネット）との連携で開催されています。全国ネットは、キャッチフレーズを「ユニバーサルな支援による共に生きる地域社会づくりをめざす」とするNPO法人です。活動の起源は、平成５年、当時30代だった４人の若者が飲み会で盛り上がって命名したボランティア組織です。名称は「平成桃太郎の会」略して「平桃（へいもも）」になります。名の由来は、各地に巣くう地域福祉の推進を阻害する「鬼」を桃太郎が中心となって退治していくことです。「鬼」とは、知的なハンディを負った人々がまちの中で暮らすことを妨げる人や組織や先入観になります。そして鬼を探して退治するよりは、桃太郎を発掘して育てる。大勢の桃太郎を見いだし、全国で密度の濃い連携をしていくことで、鬼退治の効果を上げていこうと思い直しました。そこで平成９年に滋賀県の琵琶湖のほとりにあるホテルで、当時は耳新しかったレスパイトサービス（※）のアメリカ、カナダの実践家を招いて、この事業の必要性を多くの方に広めるフォーラムを行ったのです。これがアメニティーフォーラムの始まりです。300人ほどの集まりから始まり、会を重ねるごとに人の集まりとプログラムが充実・深化していきました。毎年、全県から1,300人以上の参加者を得て行われています。参加者の顔ぶれは若者が多く福祉に関する勉強意欲だけでなく、多様な価値観への感性も高い状況です。

またアメニティーフォーラムは、講師陣が多彩です。多彩な講師陣の中には普段の福祉分野で支援するだけでは暮らしを支えられない人、ニート、引きこもりや子育てにおいて社会的養護の必要な方々へ

の関わりなどに造詣が深い方々にお願いしています。立場も国会議員や大学の先生、厚生労働省をはじめとするキャリア官僚から福祉現場を起業したばかりの若者まで幅の広い厚みのある講師陣となっています。

アメニティーフォーラムは、多くの参加者同士で自由に関わりが持てる開かれた広場のような存在です。社会的な立場を得て発言力のある方と、何かを変えていこうとするエネルギーのある人との融合の場なのです。先達である糸賀一雄先生の言葉に「自覚者が責任者である」と言うものがありますが、課題を意識的に拾い上げそれを解決に向けて行くエネルギーの塊なのです。

アメニティーフォーラムの場で、アール・ブリュットを発信する機会を得て展覧会を継続し続けてきたことは、多様な価値観を認め合うことに敏感な人たちに大きな刺激となりました。福祉現場の関係者が日常の支援のあり方を見直すきっかけになっただけではなく、作品を生み出す方達を作家として認め評価するようになりました。政治家や官僚など政策立案に携わる関係者にはアメニティーフォーラムが生み出すエネルギーと共に、アール・ブリュット作品と作家を大切にする参加者の感性に触発され、作家として認められるようになった皆さんが、その存在をもっと沢山の人たちに知られ、もっと大勢の評価の中で讃えられるような仕組みや制度化に向けての協力体制を整えていったように感じています。

変化しながら多様な価値を求めていくアメニティーフォーラム。その場で飛躍したアール・ブリュットは、まだまだ広い世界を求めてエネルギーを放出していくことでしょう。その展開に注目しさらなる飛躍を期待しています。

※乳幼児や障害児・者、高齢者などを在宅でケアしている家族の休息を提供するため、一時的にケアを担う家族支援サービスのこと。

ポイントまとめ！

ポイント1.
福祉現場の関係者が日常の支援の在り方を見直すきっかけになる。

ポイント2.
作者や作者を支える人々の存在を広めるための制度化に向けた動きにつながる。

［評価の視点］全国規模の福祉ネットワークとの共働
その２　野澤和弘さんの場合

障害がハンディにならない地域社会の実現を目指して1998年にスタートしたアメニティーフォーラム。過日開催されたフォーラムにおいて「障害者の社会参加と差別解消」といったセッションに複数登壇された野澤和弘さんは、これまでアール・ブリュットの可能性についても頻繁に言及されています。改めて野澤さんに、この場所で展覧会を開催することの意義について執筆いただきました。

野澤和弘

毎日新聞社論説委員。1983年毎日新聞入社、津支局、中部報道部（名古屋）を経て92年に東京社会部へ。いじめ、引きこもり、薬害エイズ、児童虐待、障害者虐待などに取り組む。主な著書に「あの夜、君が泣いたわけ」（中央法規）、「条例のある街」（ぶどう社）など。

そこにある意味〜アール・ブリュットと時代

沈黙の叫びや歓喜の光に刺されるような感じ、とでも言ったらいいだろうか。ただ、そこにある、色と線の芸術に心が吸い寄せられる気がするのである。アメニティーフォーラムに訪れた人々の多くがアール・ブリュットの展示を見たことだろう。その強烈な残影を脳に焼き付けながら各セッションの議論を聞いたはずである。考えてみると、それはなかなか痛快な構図だ。

障害者のことを福祉サービスや給付の「受給者」あるいは「支援される人」と私たちは見てきた。障害者運動といえば福祉予算の増額や利用者負担の無料化、虐待や差別をなくすための法整備などを目標にしたものだった。

しかし、アール・ブリュットの作者たちは支援される客体ではなく、芸術作品を生み出す主体である。福祉サービスを受ける人ではなく、芸術文化の価値を発信する人だ。福祉制度や支援のあり方を議論する壮大なフォーラムの隣で、役割の転換を果たした障害者たちが無言の逆襲を試みているようにも感じられるのである。「与えられる側」から「与える側」へ、「導かれる側」から「導く側」へ、障害者の立場を180度転換する仕掛けがアール・ブリュットには内蔵されている。

では、いったい障害のある彼らが私たちに与えるものとは何か、どこに私たちを導こうとしているのだろうか。

かつて私は舛次崇さんの作品に太古の記憶を感じさせられると書いたことがある。「恐ろしくなるくらいの長い時間の流れ、権力や社会的欲望という概念がなかったころの原子の空気を舛次の作品に感じるのである」（『アール・ブリュット アート 日本』／平凡社／2013）。総じてアール・ブリュットの作品に感じるのは、現代を生きる私たちとは別次元の時間的感覚の中で彼らは生きているということだ。なにかしら現代人が見失ってしまったものを突き付けられているように思うのである。

そうしたぼんやりした感覚が意味を帯びて意識下に像を結んだのは、2015年のアメニティーフォー

ラムで青柳正規文化庁長官と対談させてもらったときのことだ。『人類文明の黎明と暮れ方』（講談社／2009）という著書で青柳長官は「時間軸」について述べている。

“現代人は通信網と交通手段の発達によりたいへん大きな利便性、活動できる空間の拡大を手に入れた。しかし、過去への時間認識が昔の人々に比べて縮小した……昔の人間からすると、ひじょうに薄っぺらな時間軸の中で、ひどく刹那的に生きているように見えるだろう……日本のような見えにくい時間性と時間軸の短い社会にいると、過去からの実感のあるイメージをもちにくくなっている。このため将来への実感ある構想力をもつことがむずかしい。縮小した時間軸をいかに回復させるかは、現代人に課せられた重要なテーマである”

人間の脳細胞には自ずと機能的な限界がある。今日のように情報化社会が肥大しきった時代に生きていると、私たちの思考は停止した時間の上をどこまでも水平に広がっていき、過去への深化を阻害する。まさに「薄っぺらな時間軸の中で、ひどく刹那的に生きている」のである。私たちが超情報化社会を手に入れた代償として失ったものがアール・ブリュットにはある。人類は進化しているのではない。環境に適合して変化してきたに過ぎないのだ。

“世界の古代文明のほとんどは人間がゆっくり時間をかけて老いていくように、ゆるやかに衰退していく。ほとんどの場合、文明衰亡は繁栄を招いた要因の中に見いだすことができる”

私たちが生きている現代の文明もまた衰亡していくのだとすれば、緩やかに抵抗し得るものをアール・ブリュットは暗示するように思えてならないのである。

アメニティーフォーラム19での対談。青柳長官（右）、筆者（左）。

ポイントまとめ！

ポイント1.
アール・ブリュットの作品には「受け取る側」と考えられがちな障害者の立場を「与える側」に変換しうる力がある。

ポイント2.
超情報化社会で失われた豊かな時間軸がアール・ブリュットにはある。

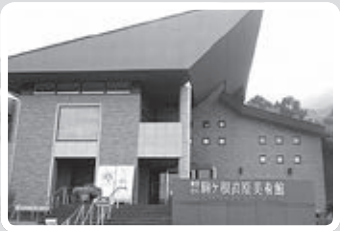
制作日誌

横井悠（社会福祉法人グロー（GLOW）・NO-MA学芸員）

2014年7月22日（火）
NO-MA会議。担当している展覧会の実施報告。残りの会期5日間。

2014年7月28日（月）
展覧会搬出。長い時間をかけて展覧会をつくり上げて、長い期間展覧会は開催されますが、搬出作業の数時間で、何も作品のないNO-MAに戻ると、その空間は想像以上の空虚感に包まれます。目に見えない思いの固まりである展覧会との対比でそう感じるのでしょうが。

2014年8月1日（金）
長野の駒ヶ根美術館に作品調査。「信州のアール・ブリュット」。発達障害の人たちのユニークなこだわりに焦点を当てた展覧会。



2014年8月12日（火）
終日倉庫整理。展示台などすごい物量でしたが、綺麗に整理されました。

2014年8月19日（火）
安土城考古博物館での展覧会関係業務。施設合同企画展実行委員会出席。

2014年8月26日（火）
「アール・ブリュット☆アート☆日本2」の展示に関する打合わせ

2014年9月3日（水）
NO-MAが特別協力として関わっている、鳥取県内3会場を巡回する展覧会「そこにある美術 - アール・ブリュット展」の設営。

2014年9月12日（金）
作品調査のため「やまなみ工房」へ。はじめて拝見することになった作品をはじめ、おもしろい作者が多かったです。文化庁補助事業で展示したい作品もありました。

2014年9月19日（金）
広報会議。展覧会をもっと多くの人に！

2014年9月22日（月）
NO-MA会議、広報会議、文化庁補助事業会議（アメニティー展覧会の骨子が急務）

2014年10月1日（水）
アメニティー展覧会の下案（企画案、実施スケジュール）制作。

2014年10月2日（木）
アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

2014年10月3日（金）
かなざわ宿直明け。文化庁補助事業緊急ミーティング（スケジュールの見直し及び共有）

2014年10月6日（月）
海外出張のための「アール・ブリュット☆アート☆日本2」に関する広報資料の下案作成

2014年10月17日（金）～23日（木）
海外出張（スイス サンクト・ガレン、アール・ブリュット・コレクション／フランス ナント、アル・サン・ピエール、LaM）

アートディレクターの視点

小林瑞恵

小林瑞恵

社会福祉法人愛成会及びNPO法人はれたりくもったりアートディレクター。2004年障害のある人の創作の場「アトリエばんげあ（東京都中野区）」を立ち上げる。国内で多数のアール・ブリュット関連展覧会のキュレーターを務めるとともに、海外展の日本側事務局及びキュレーターも担う。

ユートピア、私たちは どこにその地を見つけられるだろう。

今回の「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」の展示は、大きく分けて３部構成でできている。一つは、海外などでも展示された日本の著名なアール・ブリュット作家 ８名の作品を展示したセクション。二つ目は日本のアール・ブリュット作家を撮影してきた写真家・大西暢夫と、世界的にも著名な写真家・マリオ・デル・クルトの写真を展示したセクション。三つ目は、今年度開催され全国から2,319名の方から応募いただいた「アール・ブリュット作品全国公募―創造のカタチ、公募します―」（以下、全国公募）の中より入選した78名の中から31名の作品を展示するセクション。

展示構成を考えるにあたり、とりわけ、この三つ目のセクション、全国公募の話をしたい。この全国公募では私が所属する法人――社会福祉法人愛成会――が事務局を担ったため、公募期間中は全国津々浦々からひっきりなしに作品が届いた。多い日には100個口以上の量である。総計すると約4,600点もの作品が集まった。量も勢いもすごかったこともあり、応募されてきた作品を見るのがとても楽しみであった。届いた作品を開けてみると、使う素材も表現方法も本当に多彩で、人の果てしない表現する力にただただ心揺さぶられるのである。気になって応募者の年齢をみてみると下は2歳から上は88歳と、幅広い方に応募いただいた。多くの作品を見るうちに、私たち人間が持つ「ソウゾウ」をするという不思議な力に引き込まれ、今回の展覧会タイトルに思い至った。「ソウゾウ」とは、もっともアール・ブリュットという芸術文化を象徴するキーワードでもあるし、私たち人間が個々に待つ生きる力でもある。

「ソウゾウ」には、頭の中の空想や推察・希望を思い描く「想像」と、何もないところから実際にモノを創り出す「創造」とがある。この二つの「ソウゾウ」を使うと、私たちは頭の中に生まれたイメージを形にし、見たことのないモノや世界だって創り出してしまう。今回の展覧会の三つのセクション、公募展や写真展、日本の著名なアール・ブリュット作家展、それらに共通して出会うのが、作家それぞれが創った独自の世界、それぞれが創り出した千差万別の他には存在しないカタチ、「自分だけの王国（ユートピア）」ともいうような世界を覗きみることができるのである。この展覧会では三つのセクションを通して、いろいろな角度から作家たちがそれぞれに創り出すユートピアに観覧者をご案内できたのではないかと感じている。

観覧者からの反応としては、毎年、観覧している方々からは新しい作家や作品を多く紹介できたことから、「まだまだ日本には未知なる新しい作品がたくさん埋もれているかもしれませんね」との声を多く聴き、日本の作品発掘にはまだまだ高いポテンシャ

ルが潜んでいることを体感していただけたように思う。

さて、最後に今展覧会を作る上での縁の下の力持ちに触れておきたい。今展覧会を作る上で多くの人が関わり共働した。**（写真右下：全国公募審査会のようす）**とりわけ、三つ目のセクション、全国公募は応募作品の受付作業から始まり、展覧会に出展する際は作品や作家の情報が少ないものも多く、情報収集や作品展示に際する準備など、さまざまな人や団体がキャッチボールを繰り返し連携しながら展覧会開催へと奔走した。登場人物が多いほど、共働することは密な連携や大きなチームとしてのチームワークが必要となるが、多くの人の力が加わる分、展覧会としても広がりを見せ、また人や団体間のネットワークが築かれていく。今後、日本のアール・ブリュットをより広く発信・展開していく上でも共働する体制が構築されていることは大きな原動力となって未来につながっていくだろう。

展覧会レビュー　清水有香

アール・ブリュット ユートピアの創造主たち

見つけることと見せること
～アール・ブリュット、その困難

清水有香

毎日新聞社記者。2013年から大阪本社学芸部で主に美術を担当。

昨年のアメニティーフォーラムで同時開催された展覧会「アール・ブリュット ランドスケープ」は、筆者がアール・ブリュット作品をまとめて見る初めての機会だった。薄暗い会場には、国内だけでなく台湾の作家の絵画なども並んでいた。「既存の価値観や流行に左右されない表現」と定義されるアール・ブリュットだが、地域性や文化の違いはあるのかなどと考えさせられ、刺激的な内容だった。加えて、「アール・ブリュット」と一括りに語られがちな作品にも幅広い表現があることをこの時、肌で感じたのを覚えている。

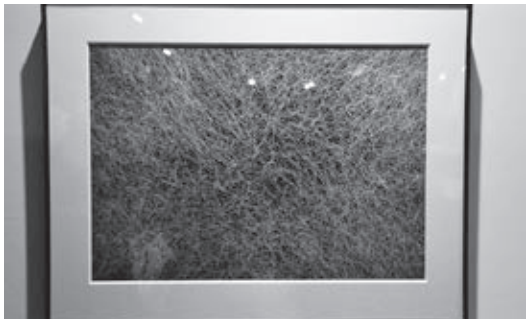
そして今年の展覧会「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」。今回もまた、想像を超えるような表現に出会えそうだという期待を持って会場に足を運んだ。3部構成で、全国公募で選ばれた作品、2人の写真家が捉えたアール・ブリュットの姿、日本のアール・ブリュット作家の紹介と続く。公募作品では審査を通過した78人のうち31人の絵画や立体が展示された。各都道府県から2,300人以上による計約4,600点の応募があったというのだから、その反響の大きさを伺うことができる。

一鑑賞者として率直な感想をまとめると、以下の4点が挙げられる。

まず、独創的で多様な表現に触れることができたのは、昨年に続き大きな収穫だった。例えば、色画用紙に自動筆記のように描かれた岡崎莉望のペン画。シンプルな手法から生まれる繊細で複雑な曲線の世界、その奥へと引き込まれた（写真左上）。酒井友章による四角い立体は大好きな冷蔵庫を紙やセロハンテープで制作したものだという。高さ10cm程度のミニチュア模型約15体はどれも作りが微妙に異なり、家電製品に対する作者の愛着が感じられる。フクロウやサルなど具象的な動物が描かれた4枚の絵に、カラフルな長短の直線が同じパターンで配された柳剛の絵画も印象的だった（写真右）。

作品募集の呼びかけでは、「主に『障害のある人たちの表現』を対象とするが、特に制限はない」とし、「暮らしの中にある、ありふれた素材を使って日々作り続けている」「誰から教わったわけでもなく独自の創作を行っている」「よくわからないが、何だかすごい」などが参考例に挙げられた。実際、会場の作品からは作家の属性を超えた表現そのものの豊かさが伝わってきた。「障害者アート」と誤解されがちなアール・ブリュットの解釈をできるだけ広げようとする主催者側の姿勢を評価したい。

次に、展示のバランスで気になる点があった。一つは公募作品のコーナーについて、全体的に空間に占める展示作品の数が多く感じられたこと。日本のアール・ブリュット作家を紹介するコーナーに比べ、雑然とした印象を受けた。多様性を保つためにはやむ



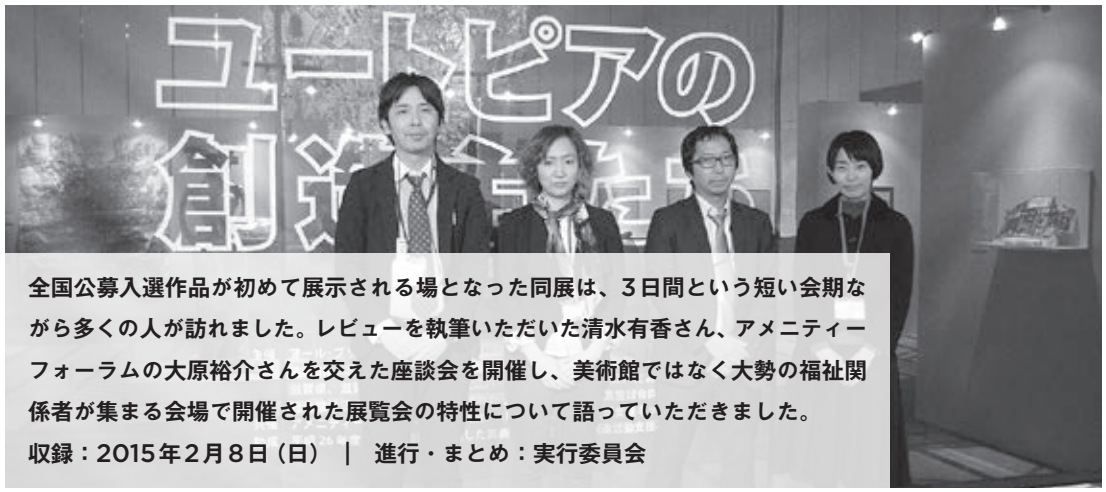
を得ない面もあるが、1作家当たりの出品数を調整するなど改善の余地はありそうだ。また、制作風景を捉えた写真の展示数についてはやや物足りなく感じた。日常から生まれるアール・ブリュットの姿をありのままに伝える貴重な証言ともいえるだけに残念だった。

第三に、会期中に開かれた関連イベントに関しては、福祉の立場だけではなく、作品評価という観点から美術の言葉で語るような場がもっとあってもいいのではないだろうかと感じた。その意味で、美術家・絵本作家の田島征三さんが聞き手となり、洋画家・野見山暁治さんが登壇した特別講演（※）は興味深かった（写真左下）。「私の場合、毎日同じことを繰り返して自分の表現したいものに近づいていく。でもアール・ブリュットの作家は最初から自分の中にある世界を描いている。そこが大きな違い」など、野見山さんが語る言葉はアール・ブリュットを考える上でヒントになりそうだ。

最後に、本展がアール・ブリュットと公募展との関係について改めて考えさせられる良い機会にもなったことを加えておきたい。他者から見いだされることで作品として成立するアール・ブリュットの本質を考えたとき、広く一般から作品を募集し、その中からふさわしいものを「発見」しようとするのは自然なことのように思える。これまで「美術」の外部にあるとされていた表現に光を当てることは、その作者や周囲に希望を、鑑賞者には驚きと感動を与えてくれるだろう。筆者もまた、そのような出会いに恵まれた一人である。しかし、審査には取捨選択が常につきまとう。それは専門家によるお墨付きに他ならない。良い作品に巡り会いたいという主催者の熱心で純粋な思いから生まれた公募展が、それ自体「権威」になってしまわないよう、アール・ブリュット作品を公募・審査することの功罪について議論をオープンに重ねていくことが必要だと思う。

※同時開催企画【アール・ブリュットネットワークフォーラム2015】における特別講演

アール・ブリュット ユートピアの創造主たち
展覧会の現場と実際を語る座談会



全国公募入選作品が初めて展示される場となった同展は、3日間という短い会期ながら多くの人が訪れました。レビューを執筆いただいた清水有香さん、アメニティーフォーラムの大原裕介さんを交えた座談会を開催し、美術館ではなく大勢の福祉関係者が集まる会場で開催された展覧会の特性について語っていただきました。
収録：2015年2月8日（日）｜ 進行・まとめ：実行委員会

清水有香（毎日新聞社 大阪学芸部記者・右端）× **大原裕介**（NPO法人全国地域生活支援ネットワーク代表・左端）× **小林瑞恵**（本展アートディレクター・左中）× **横井悠**（本展事務局・NO-MA学芸員・右中）

多様な表現に出会える場

――小林さんから展覧会の構成などについてお話ください。

小林　本展は三つのセクションに分かれています。一つ目が、昨年秋に開催した「アール・ブリュット作品全国公募」で入選した作品の展示です。次に、アール・ブリュット作家を撮影されてきたカメラマン大西暢夫さん、マリオ・デル・クルトさんの写真展セクションです。写真には創作風景が写っているので、完成した作品だけでは見られない作品の奥側を見られて、より臨場感が出たのではないかと思います。最後は来場者に国内外で評価を得ている日本のアール・ブリュット作家に出会っていただくセクションです。これまでにも展示してきた作家の作品を展示しました。3番目のセクションは全部で8名の作家ですが、うち1名は昨年の作品調査で出会った作家です。3部構成でアール・ブリュットの世界感を体験していただくという展覧会です。

清水　観させていただいて、アール・ブリュットと一言で言ってもすごく多様な表現があって、幅広い作品があるということを改めて感じました。公募ではどのように作品募集をされたのですか？

小林　行政や社会福祉協議会、美術館、ギャラリー、特別支援学校、福祉施設、精神科病院、全国の特別支援学校など、18,000通ほど案内を送付しました。結果、全国47都道府県から2,319名、約4,600点が集まりました。この数は他の公募と比べてもすごく多いです。最終的に78名の方が入選して、うち31名の方々を本展で展示しました。本展で紹介し

ていない方は2月21日から始まる「アール・ブリュット☆アート☆日本2」に展示します。

清水　観ている分には表現の幅広さが感じられる一方で、ちょっと作品数が多いかな、という感じもしなくはなかったです。じっくりじっくり観ていけば丸一日かかるくらいかな、というほど見応えのある展覧会でした。見応えがあるというのと、多すぎると感じる作品数の分かれ目は難しいところですよね。

小林　そうですね、昨年に比べると作品数は多いです。アメニティーフォーラム（以下、アメニティー）に参加されている方は、プログラムの合間に展覧会場へ来場されるので1度では周りきれずに、何度も来られる方もいらっしゃいました。

清水　公募の31名の方は、78名の中からどのように選ばれたのですか？

小林　多様な表現が観られるバランスと、立体と平面のバランス、来場者が観ていて退屈しないよう考えました。冷蔵庫もあったり、切り絵もあったり。会場の特性も考慮しています。吉田一郎さんの5mを超える作品は、今回の天井が高い会場にぴったりと思いました。

清水　すごくインパクトがあって、よかったです。

新しい作品・表現に出会える

清水　公募では、小林さんのように長くアール・ブリュットに関わられている方が新しい表現を発見されることもありましたか？

小林　公募でも公募以外でも新しい発見は、たくさんあります。アール・ブリュットの面白さは、自分たちが考えている枠を軽々超えて来ること。しかも、世の中で観たこともないものに出会える確率がすごく高いと思うので、障害のある方の作品についてある種の先入観があったとしてもそんなのはとっくに超えている。アール・ブリュットマニアのような人がいても、新しい作品が発掘されたら今まで観たことのない表現に出会うんですよね。それが楽しい。

清水　冷蔵庫の作品などは、こんな表現もあるのかとびっくりしました。他にも、岡崎莉望さんはすごく作品に引き込まれて、印象に残りました。そこまでたくさんアール・ブリュット作品を観たことはないですが、こういう作品もあるんだと。興味がつきなかったです。

横井　僕も岡崎さんのような作品は珍しいと思いました。線で細かく描きこまれているんですが、ご本人は描く前から作品の完成図があってそれをペンでなぞっている感覚だそうです。

小林　公募で入選された方のうち、何名かは私たちが知っている方でしたが、ほとんどが今回の展覧会で初めて一般に紹介する方々です。展示全体についても、例年行っていた展示よりもさらに裾野を広げて新しい感じが印象に残っ

たのではないかと思います。実際に、そのようにお話されているのも耳にしました。

清水　アール・ブリュットの定義がまだ日本では定まらず、イコール障害者アートと捉えられがちな状況の中で美術サイドの方がどのように思われているのかは率直な疑問です。

横井　アール・ブリュットであれ障害者アートであれ美術関係者の中でも関心が集まっているように感じます。公立美術館の学芸員が調査の一環で来場されたり、NO-MAと近い取り組みをされているミュージアムの方や、アーティストも来場されていました。

小林　美術が好きで普段から美術作品に触れている人でも、アール・ブリュット展に行くと「こういう表現があるのか」と驚く。だから美術系の人達も惹き付けられるんだと思います。

創作の背景を知りたい

大原　私がアメニティーに参加したのが7～8年前で、当時は展覧会はまだなかったはずです。

小林　アール・ブリュットの展覧会は7年ほど前からですね。

大原　ここ数年の間に展覧会を同時開催するという状況をアメニティーの主要メンバーが作ってきた中で、私は参加者として、また運営する立場で展覧会を観てきました。来場者が福祉のフォーラムに参加される方ではない、一般の方も多くなった印象があります。美術関係者や一般市民の方々が来場されて、逆に展覧会からアメニティーに参加される方もあり、相乗効果が生まれているように感じています。

――アメニティー参加者ではない一般の来場者数の割合はどのくらいですか？

横井　正確な数字はまだ出ていませんが、1割ほどだと思います。（実際は1.5割）今回は公募入選作品が点数も多く、作者の関係者などもたくさん来場いただいて、例年よりも一般来場者が多かったように思います。

大原　1割でもすごいですよね。特に安倍昭恵さん、はたよしこさん、小林さんの3人でギャラリーツアーをされた「女子会ミーティング」はとてもいい企画だと思いました。はたさんや小林さんの作品解説を聞きながら、みんなでぞろぞろと一緒に会場を巡る。参加者は、最初はファーストレディと一緒に観たいという気持ちだけだったかもしれないですが、どんどん解説や作品に引き込まれていって、作品に目が向いていましたね。昭恵さんのお話されたことは、純粋に作品に興味関心があって、作者に会ってみたいとか、作っている方のことを知りたいという

ことでした。

清水　そういう意味では、もうちょっと制作の背景が分かるようなものを見たかったという思いはあります。作品を観ていると、どういう人が作ったのか、なんで冷蔵庫なのかとか、その人の物語に関心がいきます。背景を知れば、自分の中でも物語が膨らむので。

横井　作品は日常の中で創られているのですが、展覧会に展示すると「作品」として成立してしまう。すると、作品と観客との間に距離が出来てしまうことがあると思います。その中で創作風景の写真があると、そういったフィルターが和らぐかもしれません。

福祉関係者が作品に出会う場

大原　私が代表をしているNPO法人全国地域生活支援ネットワークからも公募に応募しました。ある方はずっと幼稚園から創ったものをかなり膨大に保管しておられて、段ボール箱一杯に持って来てくださいました。これまでどこも評価してくれなかったものを、公募に出すチャンスが得られて、世の中にも発信された。残念ながら入選はなりませんでしたが、こういう機会があることは、彼らにとっても支えているスタッフも親御さんにとっても、すごく勇気の出るきっかけになったと思います。

横井　審査員もきっと相当苦しんで審査されたと思います。

小林　公募の応募用紙は愛で溢れていましたね。問合せにも「まちがいなく天才なんですよ。生まれた時からこの子にしかこんなことできない」という親御さんからの電話があったり。

大原　素敵なエピソードですね。

清水　そういうエピソードがいっぱいあるんですね。

大原　本当にこういう機会なかったと思うんですよ。アール・ブリュットでこういった発信がなされ、それが企画展となったことにすごく希望が見えたんじゃないでしょうか。ようやく親御さん自身や、子どもが日の目を浴びるというか、ようやく認めてもらえる機会を作ったのは大きいなと思います。

清水　こういう福祉と同じ場で紹介されるというのは、結びつき、福祉と美術の結びつきがそこからおのずと見えてきますよね。福祉に関わってらっしゃる方と、美術で関わってらっしゃる方のいい出会いになればいいな、と思います。

大原　今回のアメニティーにはスタッフを入れて1,481名の参加がありましたが、そのうちほとんどが福祉法人の事業所の職員や経営者達です。その中で、アール・ブリュット作品のようなものを生み出す活動をやっている法人はそう多くないと思うんですね。ですが、アメニティーに参加して、こういう作品に触れた時に、もしかしたら自分の法人の利用者のあの行為、作品とも思っていなかったあれはすごいんじゃないか、ということが話題になり、ちょっと公募に出してみようかと、作品保管のきっかけになるのではないかと。働いている職員は、どちらかというと制度政策の中でどのように人を支援していくかが得意で、感性を表現するのは苦手な事業所も多いと思うんです。だから、このような展覧会がフォーラム会場にあるという意味はとても大きいと思っています。

制作日誌

横井悠（社会福祉法人グロー（GLOW）・NO-MA学芸員）

2014年10月28日（火）
アメニティー展覧会のテキスト固め

2014年10月29日（水）
アメニティー展覧会のテキスト固め
全体のスケジュールを芸文チーム内で共有

2014年11月4日（火）～5日（水）
東京　全国公募事業手伝い

2014年11月13日（木）
「ユートピアの創造主たち」展チラシ制作関連作業

2014年11月17日（月）～24日（月）
東京　全国公募事業準備、選考会

2014年12月16日（火）
公募入選者の作家情報をディレクターの小林さんと共有。入選作品の輸送の段取り（旧東中野小学校～グロー）

2014年12月25日（木）
小林さんと展示計画作成に関する調整

2015年1月5日（月）
ユートピア展紹介文作成に関する打ち合わせ（木元、藁戸、川那辺）。入選者と連絡調整し各自紹介文を仕上げていく。

2015年1月6日（火）
ユートピア展関連ベント登壇者との連絡調整。登壇依頼文作成

2015年1月7日（水）
展示図面の骨格が小林さんから届く。展覧会場内で、講演イベントも行われるため、図面を基に話し合う。

2015年1月8日（木）
ユートピア展と界隈展のスケジュールについて話し合う。入札までの段取りは西川課長が、横井は界隈展の展示図面の作成に回る。

2015年1月12日（月）
公募入選者のご家族、支援員と連絡を取る中で作品の新たな情報が続々と入ってくる。（過去にどのような作品を作っていたか、作品に込められた意味など）

2015年1月15日（木）
小林さんと打ち合わせ（設営業者の質疑に関すること）

2015年1月16日（金）
展示するアール・ブリュット写真パネルの情報が小林さんから届く

2015年1月26日（月）
コーディネーターのアサダさんから座談会の行程と趣旨をお送りいただく。（座談会の内容がかなり整理されました）

2015年1月28日（水）
八木さんに作品キャプションを作ってもらう。

2015年2月3日（火）
会場設営スタート

2015年2月8日（日）
ギャラリートーク。作品撤去。

開催概要

アール・ブリュット☆アート☆日本2

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA界隈の地域と連携し、日本のアール・ブリュットの魅力を近江八幡から国内外へ発信する展覧会。また、海外の著名なアール・ブリュット作品も大々的に展示しました。

会期｜2015年2月21日（土）～3月22日（日）　26日間

会場｜＜作品展示＞ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、奥村邸、尾賀商店、カネ吉別邸、旧吉田邸、かわらミュージアム、町なかショーウィンドウ（白雲館、初雪食堂、タカモリ時計店、スミ利文具店、丸重商店、近江八幡市立近江八幡図書館）＜インフォメーション＞旧八幡郵便局

出品作家｜74名　＜ボーダレス・アートミュージアムNO-MA＞アドルフ・ヴェルフリ＜奥村邸＞井上優、舛次崇、吉居卓也、谷口ちよ子、高橋信之、岡元俊雄＜尾賀商店＞岩城敏夫＜カネ吉別邸＞水村英喜、木代至子、古久保憲満、川上敏朗、村田将吾、狩俣明宏、中川正信、倉田祐子、戸次公明、芝田貴子、藤田千香子、西本政敏、東恩納侑＜旧吉田邸＞高岡源一郎、藤原薫、宮川佑理子、杉本たまえ、新屋喜生、齋藤勝利＜かわらミュージアム＞朝原正夫、朝本俊生、有川剛司、有瀬龍介、飯岡砂登美、五十嵐朋之、市川洋行、稲田萌子、植野康幸、内田拓磨、岡部亮佑、尾崎聡彦、喜舎場盛也、はくのがわ、蔵田亮平、栗原和秀、河野大典、小林龍介、シノタケ、柴田鋭一、正堂恵美子、出納智則、助川実、高須賀優、玉上圭吾、土屋彰男、戸舎清志、西川泰弘、半澤真人、藤森理巌、星清美、細谷武、松下高徳、水谷伸郎、宮澤旬子、森村達夫、山下壮、ANNA、山本恵美、四元雄飛、谷上グレェイバ志凪太＜町なかショーウィンドウ＞澤田真一（白雲館）、大江正章（初雪食堂）、酒井清（タカモリ時計店）、藤岡祐機（スミ利文具店）、伊藤喜彦（丸重商店）、山際正己（近江八幡市立近江八幡図書館）

作品点数｜1,272点　　**延べ観覧者数**｜1,673人

関連イベント

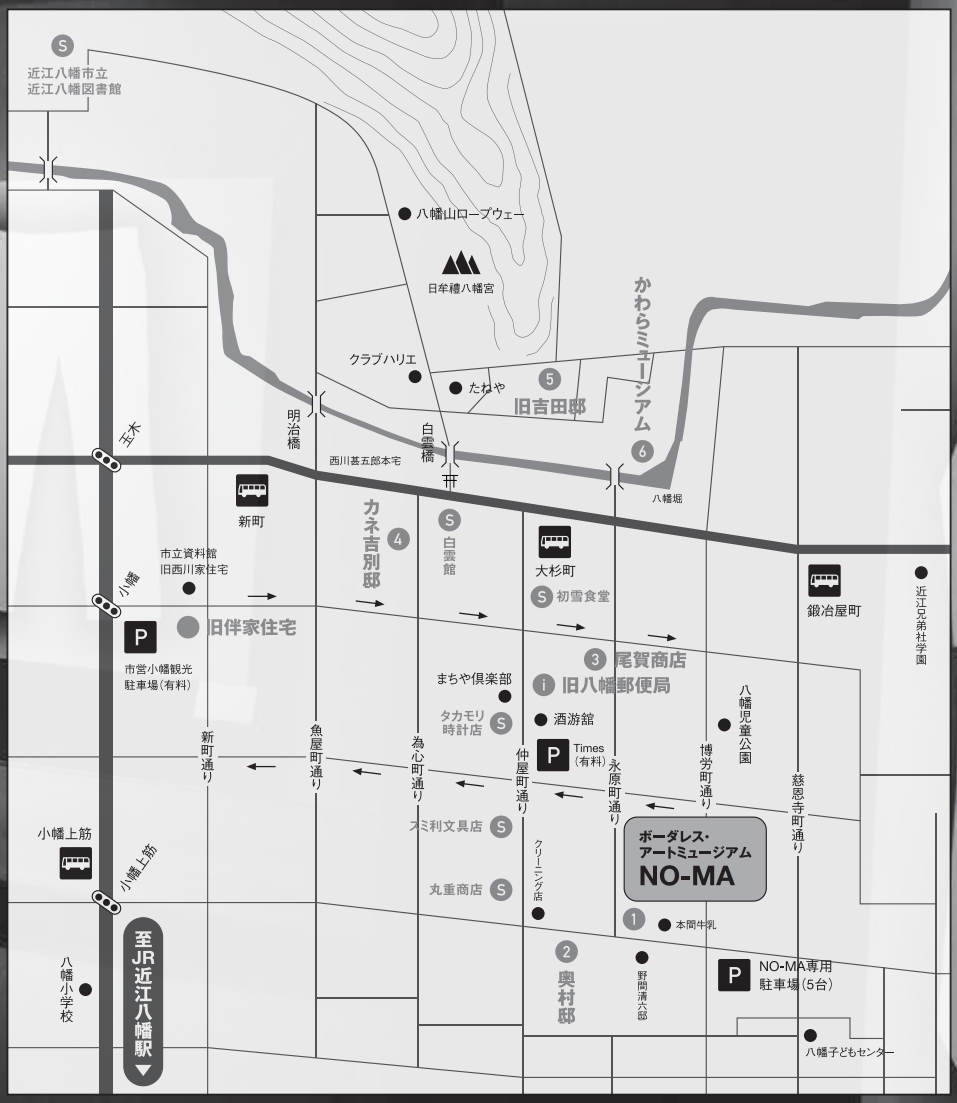
（1）オープニングレセプション 記念講演「なぜ人は絵を描かずにいられないのか？ アンリ・ルソーとアドフル・ヴェルフリの場合」
講師｜遠藤望（世田谷美術館学芸員）
日時｜2月21日（土）13:00～15:00
会場｜まちや倶楽部
参加者｜45名

（2）「NO-MAのちっちゃなお祭り」『ちっちゃい火』を囲みながら、おしゃべりや飲食を楽しむ小さなお祭り。
講師｜小山田徹（美術家・京都市立芸術大学教授）
日時｜2月21日（土）14:00～21:00
会場｜八幡児童公園
参加者｜約35名

（3）講演「自閉症の人はなぜ電車が好きなのか―絵画作品を手がかりに―」
講師｜奥平俊六（日本美術研究者・大阪大学教授）
日時｜2月28日（土）13:00～14:30
会場｜酒游舘
参加者｜41名

（4）上映会＆トーク 映画「トークバック 沈黙を破る女たち」／トーク「表現を通して自分を語ること」
講師 坂上香（映画監督）、西川勝（大阪大学コミュニケーションデザインセンター特任教授）
日時｜3月1日（日）映画上映 13:00～15:00／トークセッション 15:15～17:00
会場｜酒游舘
参加者｜23名

（5）講演「老いの力」
講師｜保坂健二朗（東京国立近代美術館 主任研究員）
日時｜3月7日（土）13:00～14:30
会場｜酒游舘
参加者｜36名


近江八幡市立
近江八幡図書館
八幡山ロープウェー
日牟禮八幡宮
かわらミュージアム 6
クラブハリエ
たねや 5
旧吉田邸
明治橋
白雲橋
西川甚五郎本宅
五木
新町
八幡堀
カネ吉別邸 4
白雲館
大杉町
初雪食堂
鍛冶屋町
近江兄弟社学園
市立資料館
旧西川家住宅
小幡
旧伴家住宅
市営小幡観光
駐車場(有料)
3 尾賀商店
まちや倶楽部
旧八幡郵便局
八幡児童公園
タカモリ
時計店
酒游舘
Times
(有料)
新町通り
魚屋町通り
為心町通り
仲屋町通り
永原町通り
博労町通り
慈恩寺町通り
スミ利文具店
小幡上筋
ボーダレス・
アートミュージアム
NO-MA
丸重商店
クリーニング店
1 本間牛乳
2 奥村邸
野間清六邸
NO-MA専用
駐車場(5台)
八幡小学校
至JR近江八幡駅
八幡子どもセンター

担当者のねらい

藁戸さゆみ（社会福祉法人グロー（GLOW）・NO-MA学芸員）

本展覧会の目指すところは、昨年と同様、日本のアール・ブリュットを国内外へ発信することである。加えて、アール・ブリュットを代表する作家アドルフ・ヴェルフリの展示、地域住民や来館者がアール・ブリュットと交わる仕組みを昨年よりも意識して構成する。

ボーダレス・アートミュージアムNO-MAでは初の展示となるアドルフ・ヴェルフリは、「アール・ブリュット」を提唱した画家ジャン・デュビュッフェなど多くの画家に影響を与えており、アール・ブリュットを語る上では重要な作家である。本展示が実現した背景には、NO-MAと所蔵先であるアール・ブリュット・コレクション（スイス、ローザンヌ市）との約10年にわたる連携がある。26点という展示数は国内初の規模であり、また他館への貸出しが初めての作品もあるので、ヴェルフリ作品を堪能できる貴重な機会となる。

もう一つの新しい取り組みは、商店のショーウィンドウを活用した「町なかショーウィンドウ展示」の実施である。これは、近江八幡の町歩きを楽しみながらアール・ブリュットに触れてもらうことを目的としている。実施にあたっては、商店の方と展示場所や作品について話を重ねてきた。このことで、地域の人々の関わり方が、鑑賞者という受け手から、少しずつではあるが変化してきており、アール・ブリュットへの関心も増している。また、アール・ブリュットを介在させることで、地域の魅力を別のアプローチから発信する一助になるのではないかと考える。

いくつかの会場には鑑賞者参加型の展示手法を取り入れる。ある会場では「五感でみるアール・ブリュット」と題し、触れる展示や音で鑑賞する展示、色で体感する展示などを展開する。触れる展示は、作者が目の見えない方であり、作者の創作を追体験する意味も持つ。また音の展示は、粘土を棒でたたくという作者の表現行為そのものを伝えることが、作者を知る上で重要ではないだろうかとの思いがあった。

会場を守ってくれる多くのボランティアスタッフは、昨年度から引き続き参加する方も多い。参加する方々には、少しでも身近な存在として、アール・ブリュットと向き合ってもらえたらと思っている。

アール・ブリュット★アート★日本2展
2015.2.21～3.22
http://www.no-ma.jp
no-r-malization
日本のアール・ブリュットの祭典を
滋賀・近江八幡の町屋を会場に開催中

［評価の視点］地域コミュニティとの共働

その1　上田洋平さんの場合

四季折々の趣を見せる山々と日本一の琵琶湖が奏でるシンフォニー。滋賀ではこうした穏やかで美しい環境の中で、自然と共生する独自の文化が育まれてきました。また、滋賀の福祉の歴史を背景にしたアール・ブリュットの存在も、生活の中から紡ぎ出された美術と考えられるのかもしれません。滋賀県立大学地域共生センター 助教の上田洋平さんに、アール・ブリュットが地域コミュニティとつながりあうヒントを伺いました。

上田洋平

滋賀県立大学全学共通教育推進機構、および地域共生センター助教。1976年京都府生まれ。滋賀県立大学人間文化学部入学後、同大学院博士課程に進学。自身が考案した心象図法による「ふるさと絵屏風づくり」は、地域研究に新しい光を当てるものとして注目される。

現在の私たちなりの“在所”をどうつくっていくべきなのか。

上田さんは、これまで県内30余の集落に入り、その地をよく知るお年寄りの生活文化、伝統、風俗を丁寧に聞き取り、そこで語られた記憶を「ふるさと絵屏風」という絵画作品へと発展させる活動をしてきた。発端は「自分の在所探しだった」と語る。在所とは、本来自分の居所や郷里を指す言葉だが、上田さんはこの言葉を「からだ・こころ・たましいの根拠となる場所」だと解釈する。ここで生まれ、この川の水を飲み、ここの野菜や米を食べ大人になり、果すべき役割を果し、ここでいずれ死ぬのだが、死者にも居場所と役割があるので、お盆には孫たちが墓まで迎えにきてくれる。この確固たる在所の存在は、地域で培った技術や知恵の結晶とも言える。例えば漁師なら漁師、農民なら農民の生業を支えてきたワザとまなざし、日常の挨拶の所作、子どもが子どもとして担うべき役割なども、人々をその在所に結びつけるはたらきをしたと言えよう。一方で、無縁社会とも言われる現在において、「先祖ー私ー子孫」という歴史的紐帯や土地と結びついた身体感覚はいよいよ希薄化する。上田さんは集落のお年寄りとの対話を重ねた結果、改めて「たしかな在所を生きてきた人びとにひきかえ、自分はなんて所在ないのだろうと思う。だからって過去には戻れない。過去を育てながら、今を生きる私たちなりの在所をつくりたい」と語る。この「在所」は地域づくりのひとつのヒントになるだろう。

“五感”の中に染み込んでいる記憶を頼りに。

上田さんのふるさと絵屏風の原点は、「五感アンケート」にある。五感アンケートとは、心に残る風景や懐かしい音、自然や食にまつわる匂いや味覚、作業にまつわる熱さや冷たさなど、一人ひとりの人が自身の目・耳・鼻・舌・皮膚を通して五感で体験した具体的なものごとから、人と自然、人と人、人と地域との関わりの物語り、その思い出をひもといてゆく方法だ。例えば、魚を獲るときに、石垣の間に手を入れて魚を掴んだそのぬるっとした感触といった、

なま身の記憶を年寄りから聞き取るのである。上田さんは、NO-MAの企画展『快走老人録Ⅱ』（2014年8月9日～11月24日）の関連イベントとして、近江八幡に住む地域住民の方々と「五感マンダラ」制作ワークショップも実践。身体に刻まれた強い記憶（上田さんはそれを「知識」と対比させて「身識」と呼ぶ）を媒介にするからこそ、地域住民同士の身と身が共振するようなコミュニケーションが生き生きとひらかれていく。

“生活に溶け込んだ美”としてのアール・ブリュット

滋賀県はいま「美の滋賀」というプロジェクトに取り組んでいる。これは滋賀の生活に寄り添うカミ・ホトケの美術、滋賀にゆかり深い作家が生み出してきた近・現代美術、そして滋賀の先進的な福祉環境から今まさに注目を集めるアール・ブリュット。これら三つの美を融合させて発信していくというのが概要だ。上田さんは、これらを「千年の美（カミ・ホトケの美術）と百年の美（近・現代美術）」そして現在まさに生まれている「いまここの美（アール・ブリュット）」と形容する。地域の生活文化を研究してきた立場から、上田さんがこれらに共通して感じるのは、「滋賀の生活に溶け込んだ美」であること。農業や漁業といった生産の営みと、日々、作品を淡々と作り続ける表現の営みを、人々がそれぞれの地域や施設・場所に「いるすべ（居る術）」なのだと言って地続きに捉える考え方は、アール・ブリュットにまつわる地域活動を行なう上で、より大きな視野を与えてくれるかもしれない。

（KBS京都ラジオ「Glow～生きることが光になる～」より　まとめ：実行委員会）

ポイントまとめ！

ポイント1.
地域のお年寄りの「在所」を手掛かりに、現在のコミュニティを捉えなおす。

ポイント2.
頭（知識）より身体の「五感」に染み込んだ記憶（身識）を生かし、豊かなコミュニケーションを創造する。

ポイント3.
「それぞれの場所でそれぞれにそこにいるすべ」という視点から、アール・ブリュットを捉え直す。

［評価の視点］地域コミュニティとの共働

その２　高橋伸行さんの場合

高橋さんは、これまで病院、老人福祉施設、障害福祉施設、ハンセン病療養所や東日本大震災被災地域などで様々なアートプロジェクトを展開されてきました。障害のある方が取り組む造形活動にも精力的に関わる中で、アール・ブリュットとはまた違った“出来事としての表現”に取り組む「やさしい美術プロジェクト」のお話を通じて、地域コミュニティとの共働の可能性を考えました。

高橋伸行

やさしい美術プロジェクトディレクター、名古屋造形大学教授。1967年愛知県生まれ。2002年に「やさしい美術プロジェクト」を開始、各地の芸術祭に参加。現在、国立療養所大島青松園で展開する「つながりの家」、JA愛知厚生連足助病院、老人福祉センターぬくもりの里等での活動を継続中。

まず、関わってみること。

「やさしい」という言葉は、一見、自己を強く主張する美術という表現から遠い印象がある。しかし、高橋さんは、「もっと一人ひとりの人に寄り添っていく形の、やさしい関係を築ける美術があってもいいのではないか」と思うようになった。最初期に、プロジェクトの舞台となったのはJA愛知県厚生連足助病院。ここでは、まず「作品を作って展示をする」という約束をせずに、「まず関わっていく」ことに軸足を置いた。すべての病室をくまなくまわり、患者さん一人ひとりの背景――暮らしてきた町の風土や生い立ち、家族のことなど――をインタビューし、それらを素材にしながらコンセプトを練り上げてゆく。病院の壁面に展示した造花の作品は、月日を重ねるごとに芽が枝に、枝から花が咲き、といったように作者の手によって変化する。水も土もない無機質な院内で「成長」する作品の存在に、やがて患者が関心を持ち、日々を過ごす病院自体が特別な場所へと「成長」していく。時間をかけて関わり続けるなかでしか生まれない豊かな関係性がここにはある。これが「やさしい美術」の最も特徴的な美術の有り様だ。

「フック」のようなものが、出来ていけばいい。

老人福祉センターぬくもりの里（愛知）では、センターで過ごすお年寄りや職員と、地域に暮らす大人や子どもたちが関わりあえるきっかけづくりを重視した。高橋さんは、「美術には、本来くっつかなさそうなもの同士をくっつけていく力があるんです」と話す。例えば、お年寄りが書道のワークショップをして出来た書をモビール仕立てにして展示する。「あれ、私が作ったんだよ」というような喜びを皆で共有する段階から、さらに地域の子どもたちがセンターに来て大きな絵を描き、それを天井に掲げて飾るという段階へと移行していく。すると、今度は子どもたちがお年寄りの作品も見て、普段交流しない者同士が同じ空間と時間を共有して、少しずつ対話が生まれるのだ。こういったきっかけの連鎖を生む「フック」としての意義が、美術にはある。

たった１人の人のために、作品が作られてもいいわけなんです。

国内で唯一離島のハンセン病療養所である大島（香川）では、国の隔離政策などによってこの病気にまつわる様々な偏見、差別のまなざしが今もなお存在する。大島に何度も通ううちに、そういったイメージでは決して括りきれない一人ひとりの島民と高橋さんとの関係性が築かれていった。そこで交わされる会話は「年表に載らない生の歴史」だ。高橋さんは、あるときに「島が何か表現している」と強く感じ、その島で暮らしてきた人たちの生きた証の断片――自助具や食器、家具や道具など――を集め、展覧会を開催した。「僕の役割は、この島で暮らしてきた人々、亡くなった人々の声を外側に伝えること。ならば僕の作品は一切そこにはなくて、その島に残されている記憶や人々の息遣いを僕が少しずつ掬い取って観せていくことが必要だったんです」。始めは「そんながらくた集めてどうするんだ」といった反応をしていた島民たちも、展示を島外から観に来る来島者の様子を見て、そして来島者と対話を重ねるうちに、自分たちが過ごして来た人生が新たな形で受け入れられる体験につながってゆく。高橋さんは、大事なことは「ハンセン病への差別をなくす」といった社会的な要請だけではなく、「一人ひとりの個人の痛みを感じ、そこに自己を投影する」という態度にこそあると語る。たった一人の個人の記憶に向き合う極私的な美術の有り様を認めながら、創造性を働かせる原動力はむしろその有り様にこそあるのではないか。またその美術の存在は、アール・ブリュットの有り様とも共通しているのではないかと、高橋さんは考えているようだ。

（KBS京都ラジオ「Glow～生きることが光になる～」より　まとめ：実行委員会）

ポイントまとめ！

ポイント1.
形態などにこだわらず、まずその地域に関わってみることから始める。

ポイント2.
様々なコミュニティや世代をつなぐ、「フック」としての美術の役割を生かす。

ポイント3.
社会的要請だけに捕われず、たった一人の人生に向き合うアートプロジェクトの有り様に着目する。

［評価の視点］地域コミュニティとの共働

その３　小暮宣雄さんの場合

小暮宣雄

京都橘大学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科教授。1955年大阪市生まれ。1978年に旧自治省入省、ふるさと創生の担当や財団法人地域創造の創設などに関わり、大学に移ってからも、アーツマネジメント（芸術営）を中心とした文化政策・公共政策を研究している。

公共文化政策・地域芸術環境研究、アーツマネジメントなどの研究をされてきた小暮さん。NO-MAが開催してきた地域交流プログラムの講師をされるなど、開館当時から関わっておられます。NO-MAを中心に界隈の町屋や商店を巡る展覧会の魅力に触れながら、地域との共働について執筆いただきました。

近江八幡地域と呼吸する芸術場NO-MAのいま

「アール・ブリュット☆アート☆日本2」展は、去年に開催された第1回目と同じく、滋賀県近江八幡市の歴史的地区にある町屋をつないで開催され、織田信長も参加したという「左義長まつり」とともに、春の兆しを告げる美術展となっている。企画の中心主体、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAは、障害者などによるアール・ブリュット作品とその研究を蓄積する芸術場である。

この展覧会は、NO-MAの蓄積をもとに、観光で訪れる人びとに向かってアール・ブリュットの魅力を伝えるイベントである。同時に、アール・ブリュットや現代アートに関心の深い美術愛好家に対しては、NO-MA以外の展示場所を探すために散歩することによって、ここの歴史や町屋景観の保存活用価値について再認識してもらう絶好の機会でもある。

今回の展覧会にも様々な魅力があったが、特に地域との関係で気づいた以下の三点を挙げたい。

第一に、鑑賞無料の「町なかショーウインドウ展示」が５ヶ所で実施されていたということである。一つひとつの展示は小規模で、滋賀県を代表するアール・ブリュットの作者の数点の作品であったり、熊本の若いアール・ブリュット作家の作品と制作風景映像であったりする。しかしながら、この５ヶ所は、観光で訪れる人の多い白雲館のほかは、地域の人びとの日常的生活のためにある初雪食堂、タカモリ時計店、スミ利文具店（入り口付近の店内に展示）、丸重商店であり、有料の町屋展示に加えて、普段気づかれない世界を描くアール・ブリュットであることともマッチして、見過ごされそうな街角を発見するための新企画になっていた。

第二には、町なかの展覧会ならではのスタッフワークが見られたという点である。旧八幡郵便局のインフォメーション会場にいた二人の若いボランティアと話して気づいたことだが、二人は、特に美術や建築に興味はなく高校３年生の最後に何かしたいということだけで応募したという。美術館でのボランティアであれば敷居が高く躊躇したかも知れない。他方、こういう歴史的建造物を含む「まちつかい」の企画

であれば、地元の住人はじめ、県内各地の市民にとって、新たで有意義なアートボランティア体験をしてもらう機会が創出できるのであり、そこからアーツ鑑賞を日常化することにもつながっていく。

また、旧吉田邸やカネ吉別邸などにおいては、去年と同じく、年配の男性たちがスタッフとして丁寧に案内していて、日頃から、町屋保存などのまちづくり関係で活躍されている方々が、アール・ブリュットをまちなかに導入するために係わっていることがよく分かる。

第三に、市外との地域間連携や域内の多様な地域主体同士の連携とが進んでいることが実感できた。今回の展覧会では、全国各地からの公募作品が2,319点も集まり、そのなかから45名の作品が、近江八幡市立のかわらミュージアムを中心に展示されている。また、尾賀商店では、「芸術療法の先駆け―青森・青南病院の作品から―」ということで、青森地域からの貴重な作品や仏像などの写真を鑑賞することができた。さらに、NO-MAにおけるアドルフ・ヴェルフリが26点も鑑賞できるのは、言うまでもなくスイス・ローザンヌ市のアール・ブリュット・コレクションとの長い交流活動の賜物である。

また、域内の多様な地域主体同士の連携が進んでおり、商店や町屋のような民間と公立文化施設、そして、NO-MAのような非営利組織という形態の違う主体との関係もよりボーダレスでシームレスになりつつあることが分かる。

以上、この展覧会における地域の関係について記述してきた。NO-MAという名称は、筆者にとって、“野（野生→生の＝ブリュット）にある間”であるとともに、「～の間」を連想させるもので、今回の展覧会訪問でも、NO-MAという「間」が他の「間」を呼び集めて「間―地（「まち」の語源説の一つ）」を作る過程を確認できたと思う。

ポイントまとめ！

ポイント1.
見過ごされそうな地域の人々の日常生活を知る機会を作る。

ポイント2.
地域の人々にとって有意義なボランティア体験の場を作る。

ポイント3.
市外との地域間連携、多様な地域主体同士の連携を行う。

制作日誌

藁戸さゆみ（社会福祉法人グロー（GLOW）・NO-MA学芸員）

2014年8月12日（火）
倉庫ひだまりの大整理。大量の展示台とアクリル板を目の前にして、これまで沢山の展覧会をやってきたんだと再認識する。

2014年8月21日（木）
文化庁会議「ヴェルフリがNO-MAに来ること」について皆で話し合う必要がある。
「五感マンダラ」のイベント1回目を明日に控え、最後の行脚。皆さんお元気に働いている（ボランティアも含めて）方が多いことに気づかされる。

2014年8月25日（月）
会議漬けの日。NO-MA会議、スタッフ会議、横井さん安藤さんと界隈展打合せ。ヴェルフリの「彼が超えてしまったボーダーと彼が無くしたボーダー。」について。

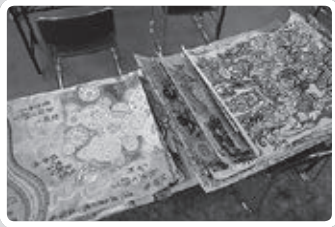
2014年9月4日（木）
NO-MAの来場者数が今年度中に10万人を超えることに気づく。

2014年9月8日（月）
ヴェルフリの最終リスト写真データが届く。界隈展の会場下見。横井さんと20件ほど見つける。

2014年9月9日（火）
編集会議。NO-MA懇談会。界隈展などについて意見をいただく。

2014年9月11日（木）
界隈展、ボランティアについて話し合い。昨年の振り返りを主にする。

2014年9月16日（火）
青南病院訪問。院長の説明を伺いながら見学。資料館も案内していただく。岩城氏の作品が400点ほどあり、翌日に選定し、グローへ発送することになる。



2014年9月17日（水）
青南病院にて大西さんの撮影、引き続き行う。蚊に襲われて四苦八苦。夜は寒い。

2014年9月20日（土）
界隈展会場について打合せ@旧八幡郵便局。界隈がにぎわうと喜んでくださる。お客さんが集う場を作りたいねと、小さいテントにこたつを作ったらどうかなどアイデアをいただく。相談することで、皆さんとの仲も深まる感じがする。

2014年9月22日（月）
界隈展会場打合せ、尾賀商店。快諾いただき、イベントでも連携できればと伺う。

2014年9月29日（月）
界隈展、ボランティアのことを話す。あるアートプロジェクトの方法を参照。会期中の日誌も活用しようということに。ボランティアさんがやらされている感じを持つのでなく、ついつい書きたくなる気持ちになるようにできればいいなあ。

2014年9月30日（火）
界隈展、会場打合せ、観光物産協会田中さん。ショーウィンドウの展示を相談。地元の方の情報をたくさん知っておられる。去年よりも積極的に関わってくださっている印象で、嬉しい。

近江八幡地域との共働 ショーウィンドウ展示の試み

本展の見どころの一つである「ショーウィンドウ展示」。「アール・ブリュット☆アート☆日本2」の会場界隈で商店のショーウィンドウや店内、また図書館の館内にアール・ブリュット作品を展示しました。一つひとつの展示規模は小さいながら、展覧会を目指して近江八幡を訪れた人だけでなく、観光で訪れた人や地域の人たちも通りがかりに足を止めて作品を観る姿がありました。

NO-MAの場所をよく尋ねられるというクリーニング店の壁にポスターなどを貼らせてもらった。

近江八幡市立近江八幡図書館

八幡山の麓に建つ近江八幡市立近江八幡図書館には、「正己地蔵」と呼ばれる山際正己さんの作品を展示した。職員の泉野さんは、「展示作業中はどんなふうになるんだろう？と興味深く眺めていました。数が多くていろんな表情があるのが面白いですね。展覧会の開催を知らず、図書館を利用するために訪れた人は帰り際に立ち止まって作品を観ることが多かったです」と話してくれた。作品の傍らにはアール・ブリュットに関する蔵書が並べられるという図書館だからこそのアプローチが見られた。

大きな屋根に使われているのは八幡瓦。

1階が開架フロア。

展示スペースのすぐ側に
アール･ブリュット関連の蔵書が置かれていた。

白雲館

白雲館の1階には現在最も注目を集める作家の一人である澤田真一さんの作品を展示した。明治時代に学校として建てられた貴重な建物で、館内には観光案内所があり、近江八幡の特産品の展示販売も行っている。観光客が多く訪れる場所だ。実行委員会の構成団体の一つである、近江八幡観光物産協会が管理・運営を担っている。

西洋デザインと日本の技術を
融合して建てられた白雲館。

澤田さんの作品の横には
近江八幡の特産品や工芸品が並んでいる。

目の前は日牟禮八幡宮なので左
義長まつりでは多くの山車が通る。

初雪食堂

地域の人たちはもちろん、観光客も多く訪れる初雪食堂は、NO-MAスタッフもよく利用する。普段はメニューが置かれ、季節の飾り付けがされているショーウィンドウに、大江正章さんの作品を展示した。「ショーウィンドウの前を素通りしかけた常連客が引き返して作品を眺めていく様子や、展覧会のチラシを持って食事に訪れる人が何人もいた」とご主人。用事でスミ利文具店に行き、展示されている作品を観て驚いたことを、スタッフが食事に訪れた時に教えてくれた。

看板はボランティアスタッフが
道案内をするときの目印にもなっている。

展覧会期間はまだまだ寒く「この時期なら」
とすすめてくれた鍋焼きうどん。

大江さんのフシギな人形と
食堂のメニューが一緒に並んだ。

タカモリ時計店

八幡堀界隈のメイン通りにあるタカモリ時計店には三つのショーウィンドウがあり、そのうちの一つに酒井清さんの作品を展示した。店主の高森さんは近江八幡出身で、祭りの話や地域にかつてあった商店のことなど町の様子にとても詳しい。以前、NO-MAが開催したワークショップ「五感マンダラー近江八幡の心象マップをつくるー」でも近江八幡に長く暮らしている方の一人としてたくさんのことを教えていただいた。このようなつながりも、今回の展示が実現したきっかけとなっている。

看板には大きな時計が描かれている。

3月の左義長まつりで使うために
準備している「赤紙」。

ショーウィンドウの中は
壁と台の部分をスタッフが白く塗り直した。

スミ利文具店

ショーウィンドウ展示の中で唯一、紙を使った作品を展示したスミ利文具店。入り口を入ってすぐのところに藤岡祐機さんの作品と制作風景の映像を展示した。店内は懐かしいものから最新のものまでぎっしりと商品が並んでいる。作品について来場者と会話を交わすことも多く、お土産として文具を購入して帰る人もいたという。ご主人は藤岡さんの作品を観て「自分ではできないような繊細な作品で驚いた」そうで、映像から「使っているのは刃がカーブしていて根本から先まで力が均等に加わるハサミではないか」と解説してくれた。

文具のチラシの上に
展覧会のチラシを貼ってくれていた。

琵琶湖型クリップや、
琵琶湖の葦を使ったノートなどもある。

展示設営を見守ってくれたご主人と
映像チェック。

丸重商店

伊藤喜彦さんの作品を展示した丸重商店は日用雑貨を扱う金物店だ。作品のあるショーウィンドウから道路を挟んで反対側が店舗になっており、調理器具から小さなネジまでたくさんの商品が並んでいる。昨年の「アール・ブリュット☆アート☆日本」展では、備品が足りない、工具が壊れたなど困った時に何度も訪れて助けてもらった。ご主人の喜多重夫さんは商店街の会長でもあり、今回の展示が商店街の賑わいにもつながればうれしい、と話してくれた。

作品を展示したショーウィンドウの奥は
現在倉庫として使われている。

ラジオ番組「Glow ～生きることが光になる～」
に出演していただいた。

店舗にはたくさんの日用雑貨が
所狭しと並んでいる。

地域資源の再発掘

小山田徹さんインタビュー

「共有空間の獲得」をテーマに様々な活動を展開する小山田徹さんは、「焚き火は世界最古で世界最小の共有空間」だと考えておられるそうです。これまでに各地で焚き火のある空間づくりをされてきた小山田さんに近江八幡での「ちっちゃい火を囲む」（ちび火）について伺いました。

小山田徹

美術家、京都市立芸術大学教授。1984年、友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を京都で結成。1990年からさまざまな共有空間の開発を始める。2012年からは宮城県女川町にて「女川常夜灯 迎え火プロジェクト」を実施している。

焚き火の記憶

NO-MAでちび火を開催することが決まって、町の人に「焚き火やるんですよ」と声をかけた時の反応で、この町の人たちは焚き火の危険性も楽しさもすでに知っているんだなと感じました。焚き火は経験しないと、その楽しさが記憶に残らないんですよね。近江八幡は祭りで大きな奉火があるし、焚き火も身近に感じられるのではないでしょうか。祭りとか、餅を搗くためとか、昔なら風呂を沸かすとか、何かをするために焚き火がありますよね。何の目的もなく、ただ焚き火をすることは普通にはありません。現代は家の中に直火（火鉢や囲炉裏、竈など）が無くなってしまったし、都会では焚き火ができないことも多い。すると、「何の集まりで焚き火？」と警戒される。せめてキャンプファイヤーの経験があれば、焚き火が楽しいという記憶が残せるんですが。

地域性が現れやすい場

焚き火は目的の無い場として古代からある場所で、その記憶が人間に残っているとしたら、そこに集まるのは自然じゃないかと思うんです。焚き火があればそれだけで十分だろうと。その場にいる何パーセントかの人がアートに関わる人だったらアートの話になるだろうし、町内会の人が多ければ自然と町内会の話になる。それが自然に、無理なくできる場として、焚き火場がとても適している場だなというのはこれまでの経験で感じていることです。焚き火に限らず、味噌作りを教えてもらうとかみんなで料理をするとかでもいい。味噌を作っている間に嫁姑の話とか色んな話をする。そういう時に交わされる言葉を誘発したり、蓄積したり、交換したりできるのが「場」だと思うんですよね。今のところそれが一番やりやすいのが焚き火なんです。

海で焚き火をするなら盛大にやってもいいとか、山なら小さめにしようとか、祭りで慣れたところならおっちゃんたちに任せたら大丈夫とか、子どももできるとか。でも都会だったら色々な関係性を考えて丁寧にやらないといけないとか、焚き火をやろうとするとどうやっても地域性が関わってくるんですね。そういうところが面白いと思います。

地域の色んな人が力を合わせる祭りの時には、普段の職業で身につけたスキルをちょっと違った形で

発揮しながら混ざり合っていく。完成の喜びを分かち合え得るし、共同作業の中で自分がやったことは感謝される。お互いを認め合う場で、自分の手にした職をもう一度噛み締める機会になるんじゃないでしょうか。

多様な関係性を作る

NO-MAは場として完成されていると思います。しっかりとした企画ができる場で、落ち着いて作品を観ることができる。だからこそ、町や外部との関係性の作り方は多様になることが大事になってくる。これまで苦労してアール・ブリュットという分野の評価を作ってきたことで、その価値観が社会化した。誰もが安心して心を預けられる価値観が出来ると、色んな人が利用し始めるんですよね。本来は作品を自分の目で観て、自分で考えて、感じて「これがアール・ブリュットか」という体験をすべきなのに、既存の価値観という簡単な回路に頼ってしまう。もう一度、社会化した価値観を超えて、自分で感じ体験することの大切さを思い出させる方向に導く役割をNO-MAが担う必要があるかもしれません。

アール・ブリュットという概念だけではなくて、これからは老人とか介護といった地域に偏在している同じ根っこを持った問題も絡んでくるだろうし、災害はまた起こる。もう一度社会を作り直す段階でどういう関わりができていくのか、といったことも考えなくてはいけないでしょう。NO-MAは先を走ってきた分、日本のアール・ブリュットの聖地というように見られる可能性があります。すると、どんどん柔軟性、多様性を持ちづらくなる。周囲との関係性を豊かにして、一生懸命に次のフィールドや次のステップを常に探さないといけない立場にあるだろうと思います。

展覧会レビュー　竹内厚

アール・ブリュット☆アート☆日本２

アール・ブリュットとボーダレス。
近江八幡ならではの成果。

竹内厚

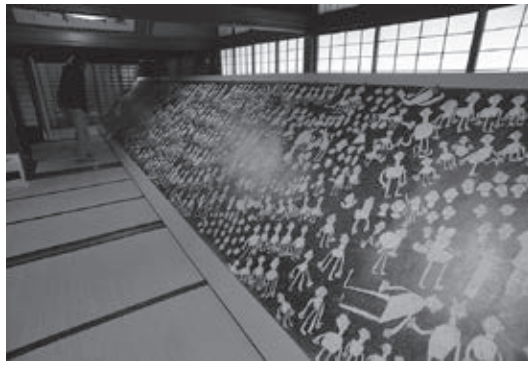
編集者、ライター。関西圏を中心にアート記事の執筆、書籍やフリーペーパーの編集などを手がける。

もともと野間さん家だったことが、その名前に残されている「ボーダレス・アートミュージアムNO-MA」。そこからほんの10mほど歩いた、同じ通り沿いに築150年ほどの町屋「奥村邸」がある。近江八幡の歴史を宿したそうした建物が、『アール・ブリュット・アート・日本２』の展覧会場である。どちらも古い町屋を活用した展示、にもかかわらずNO-MAと奥村邸での体験が真逆といえるほどに違っていたところに今展のらしさが現れていた。

ミュージアムとして改装され、2004年から使われてきたNO-MAでは、「ヨーロッパの著名なアール・ブリュット作家」、アドルフ・ヴェルフリの作品を展示。作品を所蔵するスイスのアール・ブリュット・コレクションに習って、暗がりの中に作品が浮かび上がる展示空間は、おのずと作品への集中が高まる。見れば見るほど脳内宇宙に誘われるようなヴェルフリの作品は、時代を経て残ってきた作品ならではの風格もあり。一展覧会として捉えても、十分に満足できる鑑賞体験だった。

一方、奥村邸は６人のアール・ブリュット作家による展示。床の間や広い土間といった町屋の特徴を活かしながらも、空間に収まるのではなく、空間を食い破るような作品の力も見られた。（写真左上）ところが奥村邸にあっては、展覧会と作品だけに集中することはかなり難しい。軒をくぐってまず目に飛びこんでくるのは、２基の巨大な雛飾り。展覧会の受付には、普段から奥村邸の管理もされているというおじさんおばさんが座っていて、ふたりの話す世間話が否が応でも耳に入ってくる。奥村邸の空間自体もよく見れば（いや、よく見なくても）、雑多な物が置かれたまま。たとえば、大量の紙をこより状に破いている吉居卓也の作品が置かれた3畳間では、フスマは破れ目と補修跡が目立っていたし、割り箸と墨汁で作品を描く岡元俊雄の絵が展示された土間では、作品のすぐ左に「照顧脚下」と力強い筆文字で書かれた張り紙、右には赤い着物を着せたマネキン、その奥にはむきだしの配線板まで。（写真右）一体、どこからどこまでが『アール・ブリュット・アート・日本2』なのか、だんだんわからなくなってくる。これは、決して粗さがしをしているのではない。実際、展覧会に向けて見事にチューンアップされたNO-MAと比べても、奥村邸での鑑賞体験は勝るとも劣らないものだったのだから。

昨年の展示会場でも、オレの絵も展示してほしいと、近所のおじさんが自分の絵を持ちこんでいたし、町屋の内部が雑然としているのはそれほど変わっていないことかもしれない。あるいは、そのことをこちらが見て見ぬふりで済ませて、展覧会に集中してみせたのかもしれない。ところが今年は、日常がむき出しになった町屋、近江八幡の様子がいつも以上



に目に留まった。一体どうして!?

奥村邸に続いて見たのが「町なかショーウインドウ展示」。ここでも、作品が展示されたショーウインドウと普段使いされているショーウインドウが、同じように目に入る。店内に作品が置かれたスミ利文具店では、歴史が積もり積もった店の商品、奥から聞こえてくるAMラジオさえも作品のよう…。

そもそもアール・ブリュット作品が境界領域に属するものであり、だからこそ、NO-MAは「ボーダレス」を掲げて、それをコンセプトにもし、実際、NO-MAでの公募企画として、町民の手づくり品やコレクションを集めた展覧会が企画されたことだってある。どこからどこまでが作品で展覧会か、その境界の行き来を楽しむのがNO-MAがやってきた活動のひとつだったともいえる。

今回の展覧会に向けて実施された「アール・ブリュット全国公募作品」も、公募条件として実は何の制限もなかったことを後から知らされた。アール・ブリュットを冠した展覧会でありながら、ボーダレスアートの祭典でもあったのだと、すべてを見終えた今にして思う。

話の都合上、うまく触れられなかったが、尾賀商店での「芸術療法の先駆け　青森・青南病院の作品から」は、もうひとつの展覧会のハイライト。**(写真右下)** 日本でアール・ブリュットという言葉が広まる、ずっと前から現場では様々な取り組みが行われてきたこと。華やかにスポットライトが集まるアール・ブリュットの現状に対して、足元から冷静に歴史と現場を見直す目線は、展覧会全体をぴりりと引き締めていた。

展覧会レビュー　米津いつか

アール・ブリュット☆アート☆日本2

米津いつか

フリーランス。各地で開催されるアートプロジェクトや展覧会等のPR、コーディネート、マネージメントに携わる。

パラレルな魅力を秘めた界隈展

関係者の間では「界隈展（かいわいてん）」と呼ばれる、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAとその「界隈」である近江八幡の町を舞台にして開催される周遊型展覧会「アール・ブリュット☆アート☆日本2」。「界隈」を巻き込んでの展覧会は、10年間この地域で活動をしてきたNO-MAとしても昨年の1回目が初めての試みだった。

アール・ブリュット関係者には特に、アドルフ・ヴェルフリの作品がNO-MAに迎えられたことが今回の展示の特筆すべき事柄となったようだが、2年目にして実現に至った「町なかショーウィンドウ展示」もまた、今回の展示の特徴といえよう。

道ばたから見えるスペースだけに作品が設置されているのではない。周遊マップと「店内で開催中！」（写真左）という看板をたよりにおそるおそる「スミ利文具店」の戸を開けてみると、所狭しと文房具が並ぶ懐かしい光景があった。キョロキョロと店内を見回していると、店主が作品のある場所を教えてくれた。（写真右上）

この文具店で展示された藤岡祐機の作品は、同年2月に大津プリンスホテルで開催された「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」のチラシのビジュアルにもなっていて実物を見たかった一つであったのだが、糸ほどの細さに紙を切っていく制作風景の映像から、使われている「ハサミ」の話になった。そこは文具店、ハサミの性能に話が及ぶかと思いきや、「最新のハサミを使ってもこれはできないよね」とあっさり店主は言う。そんなやりとりから話に花が咲き、品揃え豊富な店内で気づけば「びわこ文具」や万年筆を買い求めていた。この地域の人とのコミュニケーションの生まれる場づくりこそが界隈展で仕掛けたかったことなのだろう。琵琶湖の形をしたクリップを眺めるたびに、この展示がなければ足を踏み入れることがなかったあの文具店のことを思い出すことになるのである。

スタッフが常駐するNO-MAを除くそれぞれの会場には、2名前後のボランティアスタッフ（有償）が配され、開館準備、受付、監視、閉館作業などの活動を行う。寒さが厳しい町屋で来場者を迎える姿もこの界隈展ならではの光景となった。（写真右下）

昨年、私もボランティアスタッフとしてここ近江八幡で数日間活動を行った。全国各地で行われているアートプロジェクトにおいてもボランティアの存在は欠かせないのだが、アートプロジェクトの現場で時間をかけて積み上げていくような運営のノウハウが、1年目から非常にいい形で機能していたことに驚いた。社会福祉法人が福祉の現場で培ってきた経験の厚みを感じていた。

今年のボランティアスタッフからは昨年以上に活発な意見や提案があると関係者から聞いた。アール・

ブリュット作家のほとんどは言葉で意思などを伝えることができない。作家は展示されることや評価を期待して表現活動を行っているわけではないので、展示担当者はこの展示方法でよかったのかと常に自問自答をしている。そんなアール・ブリュットの作品だからこそ、肩書きに関係なく対等なコミュニケーションが生まれている状況があるのかもしれない。

アール・ブリュット作品は、そもそも家族だったり施設の支援員だったり、誰かの手によって発見されなければ、こうして私たちの目に触れることはない。人と人との関係がその魅力を運ぶ作品なのである。だからこそ、今後、ボランティアスタッフとの関係性においては、アートプロジェクトのように時間とコミュニケーションを経て築かれることを期待したい。

今回、地元のクリーニング屋の店主もボランティア登録をし、参加してくれたという話を聞いた。また、ある会場のボランティアスタッフの方からは「他の企画では建物ばかりに目がいっていたが、この展示は建物と同様かそれ以上に作品の魅力を感じる」という声が聞かれた。そういった人たちの気づきは、確実に一プレイヤーとして、アール・ブリュットや近江八幡の魅力を外に伝えていくものになっていくはずである。

アール・ブリュットという溢れ出る表現の作品群に出会えることと、近江八幡という地域で巻き起こるアートプロジェクトというパラレルな状況が、この界隈展の一番の魅力だと言わしめる日が来るのを楽しみにしたい。

スイス・フランス　訪問レポート

―日本でヴェルフリ作品を迎えるにあたって考えたこと―

田端一恵（社会福祉法人グロー（GLOW））

2014年晩夏、今までアール・ブリュットで連携してきたヨーロッパ関係者と、今後の交流事業についての打合せに出席する機会を得て、スイス、フランスへ行った。スイスでは今回の展覧会のためにアドルフ・ヴェルフリ作品をお借りすることになっていたアール・ブリュット・コレクション（ローザンヌ市）、そして、日本とスイスの国交150年を記念して日本のアール・ブリュット展（日本・スイス国交樹立150周年記念事業「ART BRUT JAPAN SCHWEIZ」展／2014年4月1日～11月9日）を開催していたラガーハウス・ミュージアム（ザンクトガレン市）を訪れた。ラガーハウス・ミュージアムのモニカ・ヤークフェルト館長は、国立ベルン美術館も案内してくださった。

ベルン美術館の中には、スイス人であるヴェルフリの作品を所蔵するアドルフ・ヴェルフリ財団もあり、収蔵庫も同館にある。ヤークフェルト館長は、可能性があるかもしれないということで、同財団のダニエル・バーマン氏に前日に連絡を取ってくださっていた。朝、待ち合わせしていた時間にベルン美術館に行くと、「ラッキーなことに、バーマン氏がベルン市にいるということで、財団の事務所で会ってくれることになった」と告げられ、急遽ヴェルフリ財団を訪問する機会に恵まれた。

バーマン氏との約束の時間までベルン美術館を鑑賞し、展示してあったヴェルフリ作品についてもヤークフェルト館長にいろいろと質問し、2008年に初めてアール・ブリュット・コレクションでヴェルフリ作品を見た時とは違う高揚感を覚えた。その後、バーマン氏と合流し、関係者専用のドアから入りエレベーターで上階へ。事務所内のミーティングテーブルで待っていると、バーマン氏が収蔵庫から作品を数冊、持ってきてくれた。作品をめくりながら、とめどない私たち訪問者の質問に次々と答えてくれた。ベルン美術館に展示されていた作品のうち、いくつかの作品の片隅がちぎりとられたようにいびつになっていたのだが、バーマン氏の説明でヴェルフリ本人が「製本」した本から外して飾っている作品であることがわかった。ヴェルフリの製本の仕方も伺い、とても興味を引かれた。また2014年は、アドルフ・ヴェルフリの生誕150年の年であり、関連した大きなイベントがあることも知った。

そのヴェルフリ作品をNO-MAで展示できた。今回はヴェルフリ財団からお借りしたのではなく、アール・ブリュット・コレクションからお借りしたのだが、ヴェルフリ作品を迎えたことが、私たちに示唆することはいくつかある。

一つは、一人のアール・ブリュット作家の作品を財団が守っている事実だろう。日本においてはほぼどの作者も、自宅や所属する施設という現状の中で、この事実は色々なことを考えさせられる。ただし今後滋賀県では、県立近代美術館に一定数アール・ブリュットが収蔵される予定であり、明るい兆しは見えている。

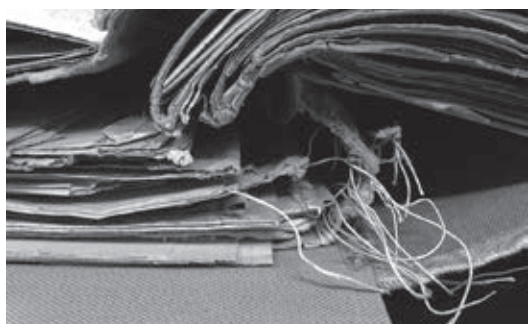
また一つはアール・ブリュット・コレクションとの関係である。2006年から2008年の「JAPON」展までの連携事業、そして以後も折に触れて交流を続けてきた。今回また同館の作品をお借りし

NO-MAに展示できたということで、一から関係を築いて作られた「JAPON」展以降にNO-MAに関わった私や後輩たちには、つながりや信頼関係を改めて目に見える形で実感することができた。

そしてもう一つは、アール・ブリュットという概念で複数の作者の作品を見せるだけでなく、一人の作者に焦点をあてて紹介する道筋も必要ということである。ヤークフェルト館長は、アール・ブリュットという言葉より、アドルフ・ヴェルフリという名前のほうがスイス内でも知られていると言っていた。今、私たちが紹介している日本のアール・ブリュットの作者たちも、それぞれ個人の名前で紹介して行けるような機運を高めていくことも一つ、求められていることであろう。ヴェルフリ作品を展示する今回の展覧会が日本でも個別に紹介される作者が増える、きっかけになればと思う。

アドルフ・ヴェルフリ財団があるベルン美術館

左から、ダニエル・バーマン氏、モニカ・ヤークフェルト氏、筆者



ヴェルフリの手で絵は綴られている

本から外さずとも絵を展開できるよう、一部だけが綴じられている

アール・ブリュット☆アート☆日本2
展覧会の現場と実際を語る座談会

近江八幡という地域の特性を活かし、アール・ブリュットの魅力を多角的に発信する展覧会「アール・ブリュット☆アート☆日本2」。アドフル・ヴェルフリの存在、公募入選作品、アートプロジェクトとしての展覧会の可能性について、展覧会レビューを執筆いただいた竹内厚氏と米津いつか氏、観光物産協会の田中宏樹氏、事務局を交えた座談会を開催しました。

収録：2015年2月27日（金）｜ 進行・まとめ：実行委員会

竹内厚（ライター・左中）×**米津いつか**（アートマネージャー・右中）
×**田中宏樹**（近江八幡観光物産協会 事務局長・左端）×**藁戸さゆみ**（本展事務局・NO-MA学芸員・右端）

鑑賞後の率直な感想

米津　私は昨年3日ほど運営ボランティアとしても関わりました。そして今年その2回目ということなので、規模感や町並みの魅力などが私の中である程度想定されていたため、去年よりも期待値がやや低かったかもしれません。でも実際訪れたらやっぱりすごく面白かった。特に観た順番。私はNO-MAからほぼチラシに書いてある番号順に観て行ったのですが、これは「この順番で観るといいよ」ということを推奨しているということでしょうか。あとはNO-MAの空間の使い方に関して、今までの展示とはまったく違う印象を受けました。ヴェルフリ作品を集中して鑑賞できたことで、世界のアール・ブリュットの歴史や、日本で観ることができる経緯を理解し、他の会場の作品を観る心構えが出来ましたね。

藁戸　観る順番に関しては、正直に言えばNO-MAスタートで近いところから番号を付けたのですが、でももちろん行ったり来たりしないように回りやすい順番を考えました。そしてNO-MAの空間に関しては、一階はスイスのローザンヌ市にあるアール・ブリュット・コレクションの空間のイメージをそのまま再現するような真っ暗な空間づくりを通じて、作品一つひとつに集中してもらえるような工夫をしました。2階は、NO-MAらしい町屋の空間を生かし、仮設壁も和室に合うような柔らかい色に設えました。

米津　旧吉田邸のあとに、最後にカネ吉別邸を回ったことも体験の順番としてはすごくよかったです。「好きがとまらない！」というテーマで想像を超える展示がカネ

吉別邸にはあって、「ああ、やっぱりアール・ブリュットってすごいな」という感動を最後にまた噛み締めることができました。吹き抜けの入り口にある芝田貴子さんの作品。あの吹き抜けは昨年もすごく展示映えのする空間だったと思いますが、裏面に描かれた絵も時々見えたり、今年もうまく使っているなと。

そして胸の高鳴りを感じつつ室内に目をやるとまたパワーを放ったものが見えて、ワクワクが次々に降り注いでくる展示でした。ショーウィンドウの展示は最初に丸重商店から観ました。ウィンドウ越しに作品を観るというだけの展示はちょっと物足りない感じがしたのですが、スミ利文具店の展示では思いがけない出会いが待っていました。この日、母と一緒に回っていたのですが、雨が降っていたので、店内での展示に母は傘を閉じて中に入るということが少し面倒くさそうでした。でもその一歩を踏み越えて中に入ると、そこには実物を観たかった藤岡祐機さんの作品がありました。きっと普段、NO-MAに行ってもその文具店に入ることはない。でも街のなかの文具店にアール・ブリュットがあることで会話が生まれて、母もちょうど欲しかった万年筆を購入することになったんです(笑)。

田中　スミ利文具店さんは、万年筆、すごくこだわってらっしゃるんですよ。

米津　そうなんですね。ひとしきりお店の方とお話したあとに、立派な万年筆のショーケースを見せてもらったんです。こういう対話が生まれることが、地域の中で展示をしていく醍醐味で、企画の成果だと思いました。

竹内　今改めてチラシを見て気付いたんですが、各会場に展示テーマがあるんですよね。それを知らずに巡ってしまってましたが、やはり一つひとつの会場が小さなミュージアムのようでした。この展覧会に限らず近江八幡の町屋はBIWAKOビエンナーレでも使われている場所じゃないですか。それでこの辺りの町並みは何度も巡っているんですが、どうしてもなかなか作品に集中できないことが多くて、それは町の力が強いからだと思うんですね。町屋一軒ずつに出たり入ったりしていると、作品を観るテンションがその度ごとにやっぱり途切れてしまう。でも今回は各会場ごとのテーマ設定がしっかりしていて、特に尾賀商店の展示、大西暢夫さんの写真と岩城さんの作品という組み合わせはものすごくよかった。アール・ブリュットの展覧会において、制

作現場の映像を流すことはよくあると思うんですが、それよりももっと手前の歴史の部分を写真によって紹介していく、そしてその写真のトーンとはまた全然違う生の作品があるっていう展示構成に感動しました。しかもアール・ブリュットってNO-MAがきっかけになって国内でも広がってきたところがあると思うんですが、当たり前のことながらそれよりも古い歴史的な取り組みまで知ることができて気持ちが引き締まりました。もちろんNO-MAの空間もよかった。やはり大阪から来ている立場からすると近江八幡って何度来ても観光気分というか、ちょっと浮ついた気分になってしまうんですよ（笑）。でも今回のNO-MAは完全に展示空間を作り込んでいるので、その浮ついた気分からちょっと切り離してくれる感じがありました。

一方で、僕もスミ利文具店でノートを買いましたけど、あの日常の感じもすごくよかったんですね。単にショーケースというよりもやはりあのように店の日常や歴史と混沌となって展示されると、町のあらゆるものが作品に見えてくるようなところがあります。北村歯科という病院の玄関に飾られている変な絵のことなども気になったり（笑）。色んなものが作品なのかそうでないのかの差が失われていく。タカモリ時計店も作品のショーケースとお店に元々あるショーケースとどっちがすごいかって聞かれると、もはやよく分からない。やはり町を普段よりもよく観察することにつながったと思います。そういう意味では町屋の会場でも同じような感覚がありました。例えば奥村邸では、どこまで入ってOKなのかが分からない。2階まで上がっていいのか、奥の謎のギャラリーまで行っていいのかとか（笑）。その街の素の部分とアール・ブリュットが拮抗している感じが如実に出ていることがよかったですね。それは視覚的なことだけでなく、音もそう。おじさんのボランティアさんたちってよく喋っておられますよね。もちろん作品の話もしているし、一方で日々の世間話も。それがまたすごくよかった。スミ利文具店のAMラジオが流れている感じとか。視覚だけでなく様々な面で日常と作品がボーダレスになっている感じが、今までのNO-MAの展示以上にはっきりと伝わってきました。

田中　アートに関わりのない私のような立場からすれば、アート作品というのは都会の大きな建物のなかで観るものという固定観念があるわけですが、まずこの企画は肩肘を張らずに自分の見方で観られるというのがありがたいなと思いました。逆に言えばなんでもアートになるのかなという思いもあって、「これを観てください」と言われてもその隣に置いてあるものであったり、家具であったりとか、他のものにも目がいく。実は色んな楽しみ方があるけれどもそのことに普段は気付いていないだけなのかなと思いましたね。

どうしても社会福祉法人が運営している美術館や展覧会といった

話だけを聞くと、苦労がある人の作品だという固定観念を勝手に作ってしまって、作品と自分の間に差を設けて観てしまうようなことがあると思うんです。でも、このボーダレスというコンセプトを少しずつ理解していくと、見え方はやはり変わっていきます。私には小さい子どもがいますが、もう無我夢中に描いているんですよね。それは誰かに見せたいとか評価されたいとかではなく、ただ純粋に描きたいという感情があるわけですが、おそらく自分自身が子どもだった頃もそうだったんじゃないかと。でもいつの間にか誰かに「下手だ」って言われたり、「そうか、自分は得意じゃないんだ」ってことを決めつけてそれで描かなくなってしまう。でも自分しか持っていないものが確かにあって、それが知らない間に消されていたり、自分で消していたりしていただけなのかなと、この展覧会を観て素直に思いました。

また、地域のことで言えば、地元の人にとって町屋は古いもの、汚いものというマイナスイメージが強かったと思います。でも、実は風情があるということで都会からわざわざこの町並みを見学に来られる方々がいるわけなんですよね。そうなると地元の人もこの町並みの可能性を見直すわけです。そして実際今回のように展示空間として活用されることで、「こんな使い方があるんだ」とか「綺麗にしなくてもそのままで魅力があるんだ」ということに気が付く。カネ吉別邸もそうですけど、時間によって光の入り方が違って作品の見え方が変わるとか。単なる窓や扉や障子が、アートを際立たせる存在になり得ることを自覚できたきっかけになった。そういう魅力を求めて、全国各地からも海外の方も来られているというのは、やはり地元の人のプライドがくすぐられるところが存分にあると思います。

ヴェルフリの地域での受け入れられ方

藁戸　今回、ヴェルフリの展示に接するお客さんの態度として、ヴェルフリを観るときと他の作品を観るときとで特に差がないことに気付きました。ヴェルフリという名前だけですごいと判断されるようなことがあるかもしれないとオープン前は危惧していたのですが、そんなことはなかった。

田中　特に先入観はなかったですね。結果的に展示を観て、彼の歴史も読んで分かったことがあるという感じです。国籍とか肌の色が違っても、ある障害を持っていることで国を超えた共通の才能が見えてきたり。逆にその中でも日本にはない題材が描かれていたりするのを目の当たりにすると、その

国ならではの作品の特徴を知ることができたり。そうなると逆に日本の作品が海外だったらどんな風に受け取られているのだろうかということにも関心が向かいますよね。そういった交流から生まれる発見がたくさんある展示だったと思います。

米津　まだ観たことのない作家の作品に出会うという意味では他の作家の作品も含めて、ヴェルフリとの向き合い方も一緒でしたね。NO-MAの展示ではスイスのアール・ブリュットの背景を知れるわけですが、演出や構成が違うにしても、他の会場では現代の日本の作家や状況を知ることができました。

竹内　僕も名前は聞いたことがある程度で。そんなにみんなが知っているわけではないしょうし、むしろチラシを見た時に「あっ、こんなにヴェルフリを推してくるんだ」と思ったくらい。展示を観た印象は、全体の中で町との接点も何もなく、きっちりとした演出でヴェルフリのような海外の作品が観られるということはよかったですね。また、意図していなくても同時代性が反映されてくる展覧会だと思いますが、100年も前の異国の作家の作品が目の前に存在しているという事実が、すごく企画全体の中で利いていたと思います。

葉戸　ありがとうございます。実は、ヴェルフリの作品を展示ができることが決まってから、どういう展示をしようか、何を伝えたいのかなどを繰り返し皆で議論してきました。今回の展示が、NO-MAとヴェルフリを所蔵するアール・ブリュット・コレクション（スイス・ローザンヌ市）とのこれまでの交流で築き上げた深い信頼関係なくしては実現できなかったことは言うまでもありません。ですがなぜ今、ヴェルフリをこの展覧会に持ってきたかというと、一つには作品の力が素晴らしいこと。もう一つは、ヴェルフリの作品を通して「光」と「影」のような、誰にでも存在するであろう二重性に焦点を当てたかったからなんです。人はそれぞれ色んな側面を持っていて、きっと誰もがそれに気づいているはずだと思います。そういったことについて彼の存在や作品をきっかけに考え始めることができればいいね、という話し合いをしてきました。

キャプションの存在について

竹内　僕はいつもNO-MAのキャプションの有り様はいいと思っています。ただ、今回は逆に説明しすぎだと感じるところもありました。作品が生まれる背景は書かれていて然るべきだと思いますが、作品の見方にまで踏み込んでくるキャプションが結構あって。一人の方ではなく色んな方が文章を書いているからこそ、書き方とか文字数とかフォーマットを整えていますよね。そのためバラバラな作品に対してキャプションの方がちゃんとオチをつけていってるような感じも受けました。作品の見方をシンプルな言葉でどうしても表してしまう。逆にヴェルフリの紹介キャプションは、見方ではなく背景が中心だったのであまり何も思わず、読みすごしていました。

米津　確かに、私も母と二人で観ていたときに「これ何を描いているんだろうね？」っていう会話が発生したんですが、その後にキャプションを読んだら木らしいということが情報として分かってしまって、そこで会話が終わっちゃったんです。キャプションの作り方は昨年と同じなんでしょうか？

藁戸　基本的には同じ作り方なんですが、結果として施設の支援員の方が書いてくれたパターンが少し増えたのかもしれません。施設によってはすでにキャプションの文章が出来上がっていて、それをいただいたものもありました。書いた人の名前を載せているのは、文責としての意味が強いですね。

竹内　なるほど。例えば、先ほど年配の女性数人がNO-MAで観ていたんですけど、「これは同じモチーフを反復して描いていて」「これは左右対称形だから」といったことを話されていて、既にアール・ブリュットの特徴をよく勉強されているんですよ。意地悪に言えば、その見方を確認するような鑑賞にもなっている。元々は、ただ黒く塗りつぶしているとか繰り返し描いているという意味だけではなかったはずなのに、観る角度が固定化してしまっているところがあり、それはもしかしたらもったいないことなのではないかと思いました。

公募の背景を知りたい

竹内　かわらミュージアムは作品が圧縮展示されていて、見づらい展示だとも思ったんですが、公募展としてはよくある展覧会の様子に近い感じだったとも言えます。他の会場に比べてわりと雑多というか。あれはあれで楽しめる展示でした。一方で、公募の枠が障害の有無に限らず集めたという事実を先ほど藁戸さんから伺うまでは知らなかったので、もう少し公募の背景の説明があってもよかったのではないでしょうか。この展示には個々の作品キャプションがなかった分、「こういう前提で集められた作品群がこの展示なんです」というメッセージが前に出ていれば、もっと違和感なく観られたと思います。

藁戸　公募で入選した作品だとい

うことは、かわらミュージアムの看板には書いてあるんですけど、その条件までは確かに触れていませんでしたね。

――障害の有無は問わないという条件で選ばれたということを説明した方がいいということは、逆に言えば、わざわざそう言わないと「アール・ブリュット＝障害者アート」とやはり思われているということですよね。アール・ブリュットという概念自体は、実は障害の有無がそもそも絶対的な基準ではないところから定義付けられているのでそこは結構ジレンマなのかなと。

竹内　例えば僕が編集者としてよく仕事を頼むイラストレーターさんと同じようなタッチの作品が展示されていたんですよ（笑）。一体、これは他の展覧会とどこに差があるんだと。これはいわゆる普通のイラストレーションじゃないか、なんなら仕事を依頼できるんじゃないかって（笑）。そういう意味では、障害の有無とか本当に関係ないと思いましたが、そのことについての説明が何もないので、結局「で、この公募展ってなんなの？」ってことになってしまう。

米津　今回のかわらミュージアムの展示では公募作品が展示されているということで、評判のよかった大津プリンスの展覧会「ユートピアの創造主たち」に出品された入選作品を観られるのかと期待していました。でも実は大津で展示された作品はここでは展示されていないことを知りました。空間の特徴もあって、とまどいながら観てしまったこともあり、もう少し展示の前提の説明が示されていれば観やすかったと思います。

展覧会？　アートプロジェクト？　その両面を持ち合わせる可能性

――今、全国各地で、街中で開催されるアートプロジェクトや地域を舞台にした国際現代美術展が多数開催されています。今回、アール・ブリュットが地域と交わりながら展示されていく企画というところで、何かアール・ブリュットだからこそできていることはあったのかどうか。最後にお聞かせいただければと思います。

米津　今回初めてこの企画に関わったというボランティアさんとお話をしたんですが、以前BIWAKOビエンナーレを観に行かれた時に現代美術の作品が少し理解しづらかったようで、どちらかというと建物の方に目がいったって仰ってたんです。でも、今回の展示はむしろ建物と同等に作品の魅力も感じると。

――なるほど。僕もここ数回連続してBIWAKOビエンナーレは観ていますが、あまり建築の方だけに目がいくという感覚はなく、もちろん作品によりますが、作品と建築や作品と町並みがいい関係で魅力を補い合っていると思いましたが、そういう意見もあるのは興味深いですね。

藁戸　今回、奥村邸の保存管理をされている方々がこの展覧会のボランディアとしても関わってくださっています。作品とともに建物も案内してくださるんです。展示

会場ではない中庭まで案内してくださって、最後に作品へ……みたいな（笑）。それはそれで面白いですね。

竹内　僕は現代美術だからとかアール・ブリュットだからとか、そういう差はないと思います。単純に展示が上手とか、作品がいいかどうかの問題でしかないと。むしろアール・ブリュットの方が作品の前提や理屈の面では一見面倒くさそうじゃないですか。今街中で展開されているような現代美術の方がもっと観客に媚びているというか（笑）。やっぱりそこは展示のやり方次第だと思います。

田中　アール・ブリュットの方が、市民の愛着というか、関わっている方々の自分たちの展示という感覚が強い気はしましたね。まぁ手の届く範囲というか我々の仲間が作っているという感覚と言えばいいでしょうか。

竹内　確かに奥村邸でボランティアのおばさんがいわゆる「おかんアート」を作っていて（笑）。なんて言うか、ほんとにアール・ブリュットと差がない。そういう意味では確かにアール・ブリュットって身近な存在なのかもしれませんね。

米津　アール・ブリュットの作品は圧倒的なパワーをもって迫ってくるもので、これは美術館で展示されるようなイメージを抱いていたんです。一方で私は以前から日比野克彦さんなどのアートプロジェクトに関わってきて、作品が生まれるまでのプロセスそのものを大切にするところに面白さがある現場を知っていました。それで今回、この企画に関わらせてもらったときに思ったのは、結局アール・ブリュットにおいても人と人との関わりなんだなと。つまり作品が支援員さんやご家族の方の手によって多くの人に伝えられるというその関係性がないと、私たちはこれらの作品を観ることはないんだと。その視点から考えると、この企画は展覧会というよりはプロセスを重視するアートプロジェクトに近い印象があります。

また、昨年はボランティアという立場だからこそ経験できたことのひとつに、スタッフとボランティアの素晴らしい関係性がありました。例えば、トイレのクリーナーの把手が壊れていたことを連絡帳に書き残したら、次の日の朝にはもう各会場の用具カゴの中にそれが用意されていた。一体いつ購入する時間があったんだろうと思うくらいの反応の素早さがあり、スタッフとボランティアの間でのコミュニケーションがとてもうまくとられていることが印象的でした。でも一方で、今年は観客として訪れてボランティアさん数人とお話をさせていただき、たまたまかもしれないですが「私はボランティアだから何も知らない」とか「詳しくないです」と控えめに言われる方が多くて、そこが少しもったいないなと。ボランティアをアートプロジェクトに関わっている人たちと捉えるならば、もっと多様な巻き込み方や、あるいはアール・ブリュットの魅力を一緒に考えていくことを通じて新たな関係性を作っていく方法があるのではないか。そこにこの企画がさらに広がっ

ていく可能性が秘められていると感じました。

現在、各地で開催されているアートプロジェクトや芸術祭の、その土地だからこそといった文脈はもう既に薄れてきていて、結局は色んな場所で同じような企画が行われている状況に鑑みても、今これだけのことが起こっている企画は、もっともっと多くの人が観に来るべきだと思います。魅力のある企画なのに、なかなかさらなる周知につながらない理由は、これが単に展覧会なのか、芸術祭のようなアートプロジェクトなのかちょっと捉えづらいところがあるからかもしれません。でもその両面性があるからこそ、すごく面白いと思います。

田中　今ボランディアさんのお話を聞かせていただいて、近江八幡の町の気質や歴史もかなり影響しているのではないかと思ったんです。近江八幡は城下町でありながら築城10年ほどでお城がなくなって自治都市になっていく歴史がある。それが現在においても、自分たちのことは自分たちでやろうという町内会の気質にもつながっているし、自治区の区分けもすごく細分化されているんですね。だから伝達していくルールはかなり身に付いてらっしゃる。その一方で他所のエリアには口出ししないというような感覚がもしかしたら強いのかもしれません。だから自分たちの持ち場であるこの会場は回していくけれど、他会場や催事全体の管理運営となると「そこから先は他の人が担当している」とか「うちはあくまでボランティアだから」という遠慮みたいなものが先行してしまう。そこをもう少しいい意味で出しゃばってきてもらう、そういうきっかけを引き出せれば、もっと大きく発信できる企画になるのかなと思いました。でも今回、ショーウィンドウ展示の商店の方々が展覧会に来るお客さんへの接客で生き生きされている様子を見ると、外の人を迎え入れる楽しさやこの町の魅力を知ってもらう喜びの一歩につながってきている気がしますし、長い目で見てまちづくりになってきていると思います。

――皆さん、最後はアール・ブリュットをきっかけにしたアートプロジェクト、そして近江八幡という町のポテンシャルといった観点から、大変貴重なご意見を伺えました。ありがとうございました。

制作日誌

藁戸さゆみ（社会福祉法人グロー（GLOW）・NO-MA学芸員）

2014年10月1日（水）
実行委員会の資料づくり。作家、関連イベントなどを決めていく。ヴェルフリの壮大な架空旅行の物語。ジュール・ヴェルヌもヴェルフリも、自分の欲望を際限なく注ぎ込んだものがこれだ。欲は悪いものか？という視点を入れたい。

2014年10月10日（金）
かわらミュージアム打合せ。展示設営日を少し融通してくださることに。ありがたい。

2014年10月24日（木）
界隈展、青南病院写真パネルの展示図作成、参考見積り。

2014年11月12日（水）
今回のイベントは多様に関わりをもってもらうために、講演、祭り、映画上映を行う。遠藤さん、奥平さん、保坂さんの講演。祭りでは、小山田先生との再会も楽しみだ。そして新たな試みの映画上映も。

2014年11月19日（水）～20日（木）
今展の新しい試みであるショーウィンドウ展示のお願いに、商店をまわる。「近江八幡」を連想する作品の展示はどうか、などアドバイスもいただいたりする。

2014年11月23日（日）
公募審査会。審査ではマルティーヌ・リュザルディ氏とともにまわる。彼女はしきりに「この作品はたくさんあるのか」を尋ねる。アール・ブリュットは日常でつくられるものだけに、1点だけの応募では判断しづらいのだ。

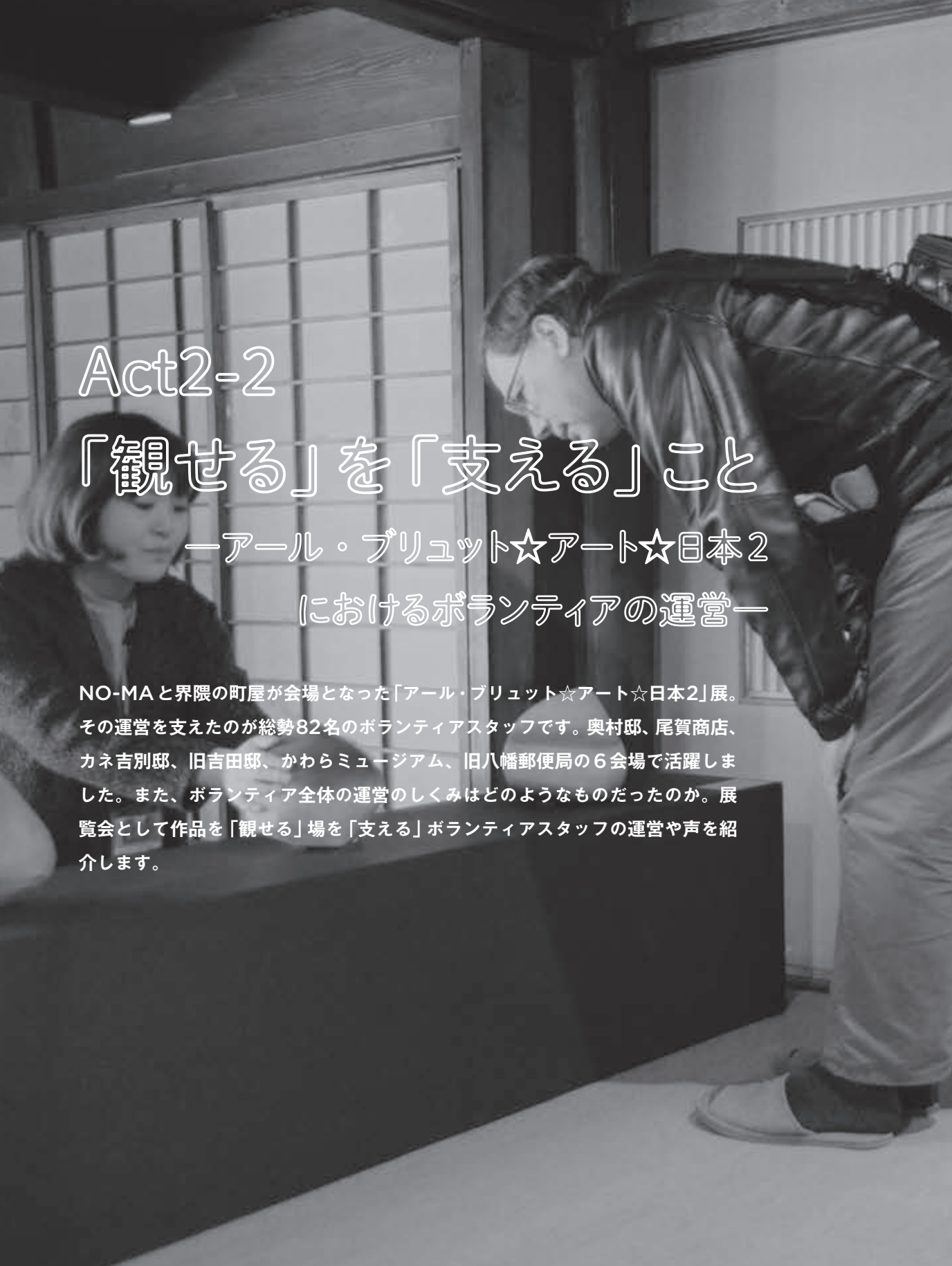
2014年11月27日（木）
今日から界隈展の作品集荷。県内の施設をまわる。ここでも新たな作品との出会いがある。

2014年12月9日（火）
チラシ・ポスター・チケットの最終入稿。アール・ブリュット・コレクションの確認も無事終わり、入稿。昨年度よりチケットが早くできるので、前売りも早く売り出せる。

2015年1月23日（金）～24日（土）
ボランティア説明会を2日にわたって開催する。参加率もよくて有難い。車いすのレクチャーも行う。昨年度参加者から、アドバイスもいただく。早速活かしていきたい。

2015年2月9日（月）
いよいよ界隈展の設営開始。前回よりもNO-MAスタッフが設営に入る日を増やした。頑張ってくれて本当に有難い。あとは皆、怪我や事故の無いことをただただ祈るばかり。

2015年2月21日（土）
今回も、皆のお陰で、幕を開けることができた。オープニングには、たくさんの作者さん、関係者の皆さんにお越しいただいた。一番嬉しい瞬間である。お客様からの「よかった」との感想にほっとする。これからはボランティアの方々とのやり取りが多くなる。今年はどんなハプニングが起きるか、少し楽しみでもある。



Act2-2
「観せる」を「支える」こと
―アール・ブリュット☆アート☆日本2におけるボランティアの運営―

NO-MAと界隈の町屋が会場となった「アール・ブリュット☆アート☆日本2」展。その運営を支えたのが総勢82名のボランティアスタッフです。奥村邸、尾賀商店、カネ吉別邸、旧吉田邸、かわらミュージアム、旧八幡郵便局の６会場で活躍しました。また、ボランティア全体の運営のしくみはどのようなものだったのか。展覧会として作品を「観せる」場を「支える」ボランティアスタッフの運営や声を紹介します。

担当者のねらい

木元聖奈（社会福祉法人グロー（GLOW））

「アール・ブリュット☆アート☆日本２」展ではNO-MAを除く６会場で、開錠・施錠、受付、監視、来場者の対応をするためボランティアスタッフ（以下、「ボランティア」とする）を募集した。昨年度の同展覧会では会期20日間で61名のボランティアが活動したが、今年度は26日間に延び、ボランティアの配置が必要な会場が増えた。そのため募集案内の周知に力を入れ、82名の方に活動してもらうことになった。うち31名が昨年度から引き続き参加された方で、昨年度のボランティアに誘われて参加した方も多かった。地域の方や県外から参加される方、高校生、幼児を連れたお母さん、障害福祉施設に勤務される方やアール・ブリュットに関心のある方、最高齢は80歳の方もいる。さまざまな世代、ご経験をお持ちのボランティアと一緒にお客様を迎えることになる。

運営面で考えたこと

「活動マニュアル」は全員に分かりやすく伝えることを念頭に昨年のものを再編した。活動内容は、開館準備、受付、会場の監視、閉館作業の４点とした。昨年のボランティアからあげられた提案や質問にも可能な範囲で対応した内容を付加し、簡略化して分かりやすく、詳細に示すところは丁寧に説明して、安心して活動してもらえる環境を整えることを考えた。

ボランティアの積極性

ボランティアのなかには、美術館（作品と観賞者が対話する空間）に馴染みのある方もいるが、地域や町屋に貢献したいという思いから参加した方が多くを占めている。このような背景から、「アートのことはよく分からない」というボランティアにも、活動を通して作品と出会ってもらいたいと考えている。作品を間近にして過ごし、それぞれの感性で思うことを来場者に伝えてもらうほうがきっと相手の心に響くと思うからだ。そのため、来場者への作品説明やコミュニケーションは現場の自然な流れとボランティア個々の積極性に委ね、その積極性が高まるような働きかけをしたい。例えば、各会場の活動日誌で寄せられる報告や提案、来場者との交流の様子に丁寧に返事をして迅速な対応をすることである。そして、ボランティアとできるだけ顔を合わせて、話を聞くこと。活動日誌には書かれていない色々な出来事を教えてくれる方、活動回数を重ねるうちに作品を熱く語るようになる方などの声を拾っていくことも重要だと感じている。それらの意見を反映することで、来場者が気持ちよく作品を観られる環境が作られるのではないかと思う。

ボランティアの運営

募集から会場での活動まで、運営の流れをまとめました。

① 募 集

目標登録人数 80 人
地域の人により多く参加してもらいたい

募集チラシには「アートやアール・ブリュットをよく知らないという方も、この機会に、心に響く作品との出会いや新たなつながりを見つけに、ぜひご応募ください」という一文を掲載した。また、チラシの裏面に昨年度の参加者の声を掲載したことで、より具体的に活動の雰囲気を伝えることができた。告知はウェブサイトや展覧会チラシとともに郵送した他、近江八幡地域でのポスティングを実施。昨年度の参加者へは個別で連絡するなどした結果、目標を超える82名の登録となった。

↓

② 説明会と内覧会

概要説明と活動マニュアル配布
会場を巡ってイメージを膨らませる

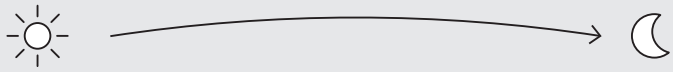
事前説明会を２回、内覧会を1回実施した。シフト表は、応募時に集約した情報を元に作成し、説明会で配布・確認を行うことで変更の対応や不足人員の確保を比較的スムーズに対応することができた。活動マニュアルは昨年度のものをベースに、シンプルかつ分かりやすいものを作成し、説明会で配布した。希望する人には、車いす補助のレクチャーを行い、障害のある方やお年寄りを手伝う支援スタッフとして活動してもらった。

内覧会では、設営中の全会場をまわりながら展示作品についての説明や、各会場の設備、場所の確認を行った。

③ 一日の流れ

「開館準備」から「閉館作業」まで
日々のやりとりを丁寧に重ねる

活動内容は「開館準備」「受付」「会場の監視」「閉館作業」の４種類とした。旧八幡郵便局インフォメーションでは、これに「チケット販売」が加わる。さらに、展示会場よりも配置人員を多くし「支援スタッフ」として、各会場への巡回を担当してもらった。巡回時には不足している物品を届けるほか、活動の様子をカメラで撮影してもらうこともお願いした。また、活動日誌には業務連絡だけでなく、来場者との会話や活動の中で感じたことなども書き留めてもらい、ボランティア同士の情報交換や、活動への意欲を高めるツールとした。

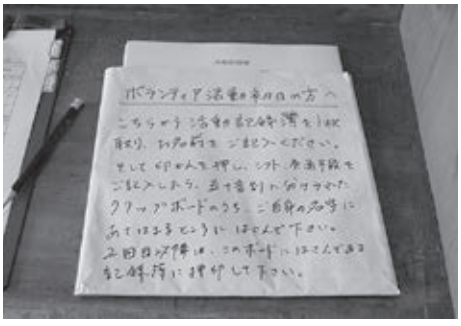


- NO-MA で活動記録簿に押印
- スタッフ道具一式を受け取る
- 各会場、開錠し開館準備
- 開館後は受付及び作品の監視

- 昼休憩
- 交替

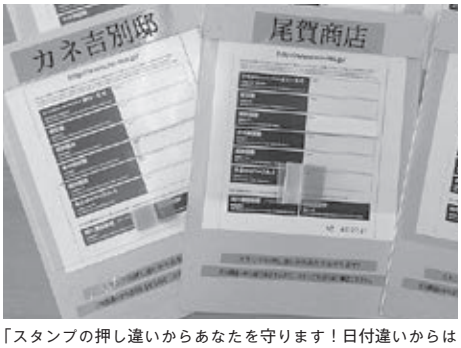
- 閉館作業
- 施錠
- スタッフ道具一式をNO-MAへ

朝はNO-MA からスタート。活動記録簿がずらりと並べられ、コルクボードには運営スタッフが毎日メッセージを書いた。



今日が活動初日です、という人も安心して活動してもらえるよう丁寧な説明を心がけた。

各会場では受付にチケットに押す日付印、人数カウンター、文具、会場ごとのマニュアル、筆談用ボードなどを設置した。



「スタンプの押し違いからあなたを守ります！日付違いからは守れませんので、スタンプの日付はご確認ください」

「観せる」を「支えた」ボランティアスタッフ

会期中のNO-MAには、毎朝9時30分にボランティアスタッフが訪れ、各会場へ開館準備に向かう姿がありました。近江八幡市内から徒歩や自転車、自動車で通う人に加え、滋賀県内の少し離れた地域から電車で通う人、入所している福祉施設からバスで通う人もいました。高校生から80歳までと年齢も幅広く、各会場では来場者との交流だけでなく、ボランティア同士の世代間交流も楽しみの一つだったようです。また、82名のうち約4割が昨年に続き2度目の参加で、その中には友人も誘って一緒に来られた方もありました。多くの方に集まって欲しいと願っていた運営スタッフにとって、とてもうれしい出来事でした。ここでは、26日間の会期を支えた82名のボランティアスタッフを紹介します。

ボランティアスタッフのみなさん

赤田美恵子、石田和子、伊丹智恵、伊東章三、伊藤喜久男、内山幸子、江角栄一、遠藤麻衣、梶本奈美、加地恭子、片木佑美、片木留美、金井三加子、川内純子、川田廣子、河辺真、川村志奈子、川村嘉男、岸本琴音、北川裕基、北林珠奈、木村美絵、熊谷眞由美、桑原拓也、小谷理佐子、小西清治、桜井奈津子、島田喜一郎、新宮寛子、杉江浩美、相馬由希、武田真也、竹間義昭、巽弓枝、谷諒次、田伏美津子、玉田茂、塚本悦子、富田淳志、虎若孝治、長岡久美子、中嶋勝男、中嶋きよ子、中島清、中谷哲夫、中出康夫、永山友加里、永山由美、西尾崇志、西川眞樹、西川真帆、西川法、西川好信、西塚由美、西山義雄、野村奈央、林佑香、林初美、原正雄、東森俊之、久木茂、平尾友佳、福島将夫、福永治夫、二見志郎、不破圭子、不破有理子、前田達彦、松本博、松本理紗、溝上聖香、宮内宣明、村松和美、森野友香理、安江嘉子、山川正續、山本咲希、他5名

旧八幡郵便局

ーボランティアスタッフのこえー

参加したきっかけ（アンケートから）

ボランティアスタッフ応募者に向けた説明会を2015年1月23日（金）、24日（土）に開催しました。活動内容の説明などを行うと同時に、説明会参加者へのアンケートを実施。今回のボランティアに応募したきっかけを聞きました。

昨年参加し、今年もぜったい参加したいと思っていました。

近江八幡市おやじ連のメンバーからPRがあり、参加しました。

昔、ローザンヌでアール・ブリュット美術館を訪ねた事があり、数年前にNO-MAの存在を知り、何度か足を運んだ事があり、興味を持ったのがきっかけです。

ハローワークでの紹介。

ポストに募集チラシが投函されたので。今までアートミュージアムNO-MAはどこですかと観光客に聞かれて道案内ばかりしているので、参加してどのような事業か確認したかったから。

NO-MAで係の方にボランティア募集がある事を教えていただきました。

高3で進路が決まっていてボランティア活動に興味があるので参加しようと思いました。

幼い頃から芸術が大好きで、大人になり様々な方と“芸術を楽しむ”という活動を行いたい！と思うようになりました。ボランティアの募集を知り、ぜひとも参加したいと考えました。

ingの展覧会を見せて頂き、興味をもちました。チラシもNO-MAで頂きました。

ひきこもり支援センターでサポーターとして活動していたら、ボランティアの参加をしてみないかと紹介を受けて、自身の引きこもりからの脱出や社会復帰への一歩として、また将来自分と同じ境遇におちいってしまった人たちが社会復帰を目指すための一つの足がかりとしてのパイプ役になれればと思い参加しようと思いました。

前回も参加しました。友達に声かけをしたら、一度参加してみようと言ってくれたので一緒に来ました。

学生の頃からアール・ブリュットには興味がありました。

私自身美術系大学でアートについて学んだことがあり、今は「自閉症スペクトラム」の次男と「アスペルガー」の長男の母親でもある立場から、アール・ブリュットにとても興味があったから。ボランティアスタッフの立場から、私のそれとは違う立場から鑑賞に来られる方々の反応にも興味があります。

昨年参加し、来館された方や、スタッフの方、他のボランティアの方たちとお会いできて、とても良い時間を過ごさせて頂きました。今年もすてきな作品を拝見できる上に、またたくさんの方達にお会いできることが楽しみです。少ししか参加できないのは残念です。

妹が去年ボランティアをしていて、私も「やりたい」と思いました。

去年参加して、作品に触れること、お客さんの顔をみて感想を聞き、新しい見方や考え方に気付けたりして楽しかったので。スタッフからお話をいただいたので。

老人ホームより話があった。

大学ゼミの先生から紹介していただきました。

チラシを見て、私でも役にたつことができればと思いました。昨年参加された方の感想を読んで、楽しそうだったのでそれもきっかけになりました。

PARCOの田口ランディさん、嘉田さんのトークショーに参加して興味を持ちました。

町屋に入れるから（で過ごせるから）。作品が観られるから。

妹が障害者学校の教員をしており、参加をすすめられました。

アール・ブリュットが好きで、鑑賞するだけでなく、何か参加して一緒にできることがあればと思っていたので。昨年は応募を逃してしまったので、今年は是非と思っていました。

応募チラシを見て。長く美術を楽しんでいましたが、アール・ブリュットはとても新鮮で理解を深められればと思いました。

ーボランティアスタッフのこえー

活動日誌から

毎日会場にいるボランティアスタッフだからこそ生まれた来場者とのコミュニケーションや、日々の活動から感じたことなどを活動日誌から抜粋して紹介します。

2月21日(土)

旧八幡郵便局

休憩時間の応援から帰るとき道に迷いました。おかげで八幡の魅力を知ったので、次回から活かしていきます。

2月24日(火)

かわらミュージアム

チケット販売所もあるのでスタート会場でもあり、パンフレット一式を事前に数部セットしておいたら良いと思います。

2月25日(水)

旧八幡郵便局

初ボランティア活動をしました。来場者の方に建物について拙いながらも説明をして、感謝の言葉を頂いたことが一番嬉しかったです。緊張してどうなるかと思いましたが、自分的には及第点です。初日ですが、参加してよかったです。

2月27日(金)

旧八幡郵便局

アール・ブリュットのチラシや他のチラシを挟んだものを数部作って、観光目的の方にお配りしてみました。

2月28日(土)

旧吉田邸

散歩中のおばあさん（97歳でとても元気）と話をしていたら、ここの吉田さんとは仲がよかった。また夫は糸賀先生と一緒に活動をしていたとのこと。このような展示会は素晴らしいですねと話されていました。

3月3日(火)

カネ吉別邸

女性6人組の方に「出展者紹介」をお渡しすると、大変喜んでくださり、作品と一緒にじっくり見ておられました。小さく感嘆の声があがるのを何度も聞いて嬉しくなりました。

3月1日(日)

かわらミュージアム

いつも2歳の子とスタッフをさせていただいているのですが、お客さんがいても歌を歌ったり少し騒がしくすることもあるので迷惑でないか心配でしたが、今日来られた方が「子どもさんの声もアートになっていて一体化して面白い」と言ってくださり、とても嬉しかったです。

旧八幡郵便局

スミ利文具店さん、本日定休日の予定でしたが、せっかくの機会なので開店するとのこと。嬉しいことです。

3月4日(水)

尾賀商店

アール・ブリュット作品に造詣の深い方による作品展ツアーが毎日数組ずつでもあれば、もっとお客様に楽しんでいただけるのかなとおもいました。遠くから来てくださった方達に感謝です。

3月6日（金）

尾賀商店

彦根の作業所の方達が観に来られました。静かな空間が一気に賑やかになり、彼らのバイタリティにとても元気をもらいました。栃木県から来られた方が、観覧後、とても嬉しそうな顔でお礼を言われたときはスタッフをやっててよかったと思いました。

奥村邸

藁戸さんが会場に来られ、作品について色々なお話しをしてもらったり、こちらの意見を言ったりして有意義な時間を過ごせました。

3月8日（日）

旧八幡郵便局

いい作品を見た後は誰かに話しかけたくなったりするものですが、ボランティアスタッフということで気軽に話しかけてくださったのでしょう。何人かの方と会話を楽しみました。

3月10日（火）

カネ吉別邸

展示方法について感想をくれる方が多く、作者のみならず展示した人の想いが伝わってきたと感想をもらった。

3月17日（火）

旧吉田邸

小学生が無料で観覧していただけるのをもっと近所の方などに知っていてもらえたら子どもさんももっと観に来てくれるかもと思いました。

かわらミュージアム

絵の画材が色鉛筆と分かると「どうやってこの色を出しているんだろう」とまじまじ眺める方が多かったです。自分も鑑賞した時、同じような反応をしたので親近感がわき、嬉しかったです。

3月21日（土）

カネ吉別邸

玉田さん（ボランティアスタッフ）の案内がすごく親切で勉強になりました。近江八幡のマンパワーを見ました。

奥村邸

本日は来場者が多かった。福島、山梨、沖縄などと視察もあり、アール・ブリュットの広がりを感じた。

3月22日（日）

かわらミュージアム

ボランティアの人が意見などを言える場があり、とても気持ちよく活動する事が出来たと思います。ありがとうございました。

かわらミュージアム

こういったボランティア活動に従事するのが初めてで、最初は戸惑うことも多かったけれど、なんとか最終日までやることが出来てとても嬉しい。今回参加していずれは自分も何かで作品を展示したいと思った。

カネ吉別邸

この経験を糧に今後もさまざまな事に取り組んでがんばろうと思います。

旧八幡郵便局

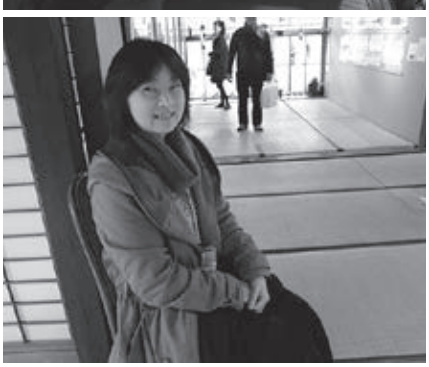
とても興味深く学びもいっぱいでした。私の世界感もかわりそう!! これもアール・ブリュットのマジックかもしれないです。1ヶ月あっという間の感じでした。他のボランティアスタッフの方とも色々とお話できて楽しい時間がすごせました。

カネ吉別邸

たくさんの作品と一緒に過ごせた時間。来場者の方との交流。作者やそのご家族との会話など、本当に貴重で良い時間でした。ぜひ次回も参加させてもらい、よりよい活動のお手伝いができればと思います。名残惜しいです。

奥村邸

最終日を迎え、何とか無事に終える事ができてよかったと思います。期間を通して、事務局の細やかなスタッフに対するサポートをありがとうございました。



現場を支える人々
ーボランティアの組織運営について
山口洋典

山口洋典

立命館大学共通教育推進機構准教授、浄土宗僧侶。1975年静岡県磐田市出身。立命館大学・院で環境社会工学を学ぶ。産官学地域連携の研究・企画の仕事を重ねた後、浄土宗僧侶に。東日本大震災後、阪神・淡路大震災での経験をもとに東北の支援に携わる。

幸せなボランティアは美しい三角関係をつくること

カタカナで語られる言葉は、辞書を引くだけでは意味がわからないことがある。今から述べていくアートプロジェクトも、ボランティアも、その例外ではないだろう。そもそもアートとは芸術家が孤高の作品を制作する行為だと捉えている方にとっては、集団で計画的に取り組むアートプロジェクトとはどういうことか、見当が付かない可能性もある。一方でボランティア（volunteer）は、オリンピック招致で有名となった「オモテナシ」や、「お互いさま」とも異なって、キリスト者の行動規範と深く結びつくものであり、慈善（charity）や博愛（philanthropy）といった個人が抱える精神面が反映した行為のことだ。

昨年から、近江八幡でのアートプロジェクトを多くのボランティアが支えている。阪神・淡路大震災から20年が経った今、「ボランティア元年」という表現に懐かしさを感じる人もいるかもしれない。ただ、この20年でボランティアという外来語は良い意味で大衆化して、(1) 誰かのために何かをすることが身近になった、(2)反対に困ったときには誰かを頼ってよいと思えるようになった、(3) 何かをしたい人と誰かを頼りたい人をつなぐ人や組織が生まれてきた、などの形となって私たちの暮らしに浸透してきた。ここでアートプロジェクトとボランティアの幸せな関係をさぐる手がかりを見出すために、今ここに示した三つの変化に対し、社会心理学者の観点から、順にウォンツの問題（A）、ニーズの問題（B）、三つめはミッションの問題（C）、と位置づけるという、若干ややこしい議論におつきあいをいただきたい。すると、ボランティアをする側（A）とされる側（B）、そして（A）と（B）の関係を支える（C）の三者関係が見えてはこないだろうか。(図1)

ここで重要なのは、大衆化したボランティア活動は他者への行為はする側とされる側の二者関係には留まらないということである。ある目的のために他者に関わる（A）が他者を頼る（B）上で、（A）と（B）を含む集団がよい雰囲気に包まれるように、調整役（C）がその力量を発揮していくのだ。実際、アートプロジェクトの現場に重ねてみると、展覧会などを支えるボランティア（A）が、来場する人々（B）の期待や関心に応えていけるように、運営全般を一歩引いた立場（C）から支えるスタッフとの良い関係づくりが営まれている。そのため模式図で示されるのは、（A）と（B）を底辺とした（C）を頂点とする正逆三角形であり、互いに他者に敬意を払い、適度な距離感を保つことがプロジェクトの成功と幸せな関係の鍵となる。

幸せなボランティアは展覧会を支えるスタッフである

ここまで、「したい」人と「求める」人と「支える」

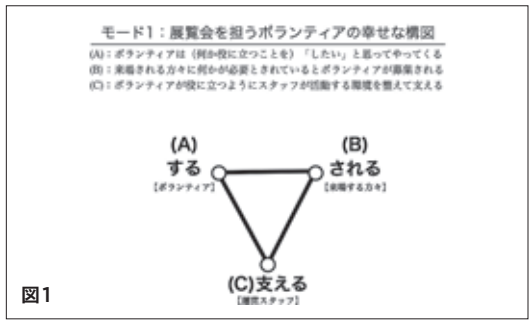


図1

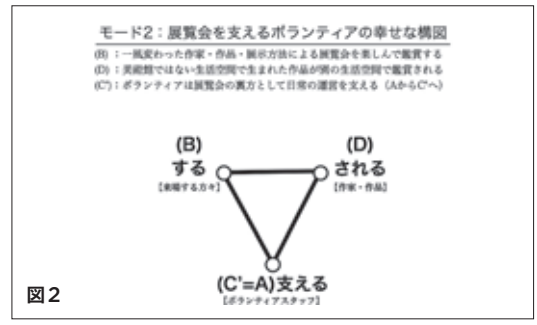


図2

人とのあいだで三角関係が結ばれることが幸せな活動であると述べたが、では『アール・ブリュット☆アート☆日本2』の現場はどんな雰囲気に包まれていたか。会期２日目の朝から夕方近くまで、全会場を巡回させていただいたフィールドワークの結果、別の三角関係が生まれていたことが明らかとなった。もちろん、それは人間どうしの恋愛のもつれではなく、作品と作品が生み出す世界との三角関係である。滋賀県社会福祉協議会による「滋賀県レイカディア大学」の受講生の皆さん、また自転車や徒歩圏内というご近所の方々、NO-MAのニュースレターで募集を知って応募された方など、実に多彩な方々がどう活動していたか、以下に示していくことにしよう。

特徴の一つめは、現場の「係員」より、（良い意味で）今日の「当番」という表現が似合いそうだったことだ。それぞれが首からかけたスタッフ証も、裏返しになっている方、ずっと腕を組んでおられてお名前が見えない方、机の下に名札部分が隠れている方、これらは厳格な管理者なら叱責を重ねそうだ。ところが、２回の事前研修などを通じて運営スタッフとボランティアの距離が近い上、日頃からまちのガイドをしている方やアール・ブリュットに関心のある方などがボランティアに応募してきているため、まちを巡りながら鑑賞する方々に対して気兼ねなく接していた。

特徴の二つめは、そうして受付時は気兼ねなく接するボランティアも、いざ鑑賞者が作品に向き合う場になると、恐らく何気なく場の担い手としての存在感を潜めていたことだ。来場者が少ないときには、自らが鑑賞者となって作品の世界に浸り、鑑賞者が作品の世界に浸っているあいだには、過不足なく仕上げられたマニュアルを読み、受付キットを整え、解説文を読んで質問に応えられる準備を重ねていた。持ち場を離れるときのために予め気づいた点を日誌に書き込むなど、場を支える側に回っていたのである。その結果、ボランティアが場の主役から降り、鑑賞者と作品の世界を包み込む三角関係が現場に立ち現れていた。（図２）

ボランティアが担い手モード（図1）から支えるモード（図２）への移行は、モード1では関係を支え、調子役となり、一方引いた立場で多様な人々のつなぎ手（C）となる運営スタッフが、ボランティアをスタッフとして信頼しているゆえに成立している。一人ひとりの事情を考慮し、82名の名前を覚えながら26日間のシフトを組み立てるなど、相当の覚悟と愛情がなければ遂行できない仕事である。そうしたスタッフの愛に包まれる中、作品に圧倒され作家を尊敬するボランティアの方々によって、まちへの愛情を後ろ支えにガイドツアーが構想中だという。そうなると個々の関心や力量が問われることになることから、集団としての連帯感にあふれる皆さんが今後どんなチームワークを発揮していくことになるのか、再訪を心待ちにしている。

制作日誌

木元聖奈（社会福祉法人グロー（GLOW）・アール・ブリュット インフォメーション＆サポートセンターアドバイザー兼NO-MA学芸員）

2014年6月2日（月）
今年度初の文化庁会議。アサダ、辻並、竹岡、理事長、芸文職員。報告書では、展覧会のプロセスを見せること、コミュニティを主軸に置くことを話し合った。

2014年6月24日（火）
アサダ、辻並、西川、木元で編集会議。途中、安藤参加。アサダさんが企画書（案）作成。報告書をつくるうえで業務日誌が必須のため、書いてもらうことにした。

2014年7月7日（月）
文化庁事業の打合せ。野間の間納品。

2014年7月30日（水）
NHK「おはよう関西」でNO-MA開館10周年が特集された。

2014年8月4日（月）
今日はNO-MAの大掃除。私は参加しないため、安藤さんに写真撮影をお願いした。暑いなか、忙しくても、こういうことも芸文全員で行っている。

2014年8月7日（木）
昨年の「アール・ブリュット☆アート☆日本」のボランティアのYさんに誘われ、さつき荘の夏祭りに行ってきた。

2014年8月21日（木）
今日の編集会議は編集チームと芸文全員で、企画案の読み合わせと意見交換を行った。月に1回の報告書編集会議は、事業全体について深い議論をする場となっている。

2014年9月9日（火）
朝から編集会議を行った。進捗状況や構想の意見交換と共有が目的。

2014年9月22日（月）
文化庁広報会議に出席。芸文のなかでも広報計画が協議されて進み始めた。愛成会から公募の応募状況が毎日メールで来ている。

2014年9月26日（金）
公募事業の作品の確認、保管、撮影などを行っている中野区立旧東中野小学校へ。さすが海外連携展など多くの経験がある愛成会チームで、効率よく作業できるように空間や手順が整えられていた。

2014年10月10日（金）
アイサ（アール・ブリュットインフォメーション＆サポートセンター）の相談件数が今月上旬だけで54回に。先月からぐっと伸びている。本公募に関する問合せも受けた。

2014年10月23日（木）
糸賀一雄記念賞音楽祭のボランティアが必要だということで、去年の界隈展ボランティアの方数名にメールをした。Mさんからすぐにお返事があり、協力してもらえるということ。とっても嬉しい。

2014年11月4日（火）～8日（土）
愛成会で全国公募の作業をする。作品を開梱し、作品と応募用紙の確認を行った。

2014年12月20日（土）
パルコ展の宮間さんとの写真撮影のイベントに行った。宮間帽子を被るとみんな笑顔。夜、宮間さんを囲んでの食事に。楽しかった。

2014年12月25日（木）
ボランティアスタッフの募集案内を界隈展のチラシと一緒に発送した。会場数が増えたので80名は必要。頑張って呼びかけないと。

2014年12月28日（日）
今年は滋賀で年越し。去年さつき荘からボランティアに参加してくださった皆さんに年賀状を書いた。5日（月）に新年のご挨拶とともに去年のボランティアさんに今年の募集について電話やメール、FAXでご案内する。

2015年1月14日（水）
NO-MA近辺の約480世帯にボランティア募集チラシをポスティング。2時間で完了させようとみんなで手分けして回ったら1時間半で終了！地域の方にたくさん参加してもらえますように。

2015年1月22日（木）
募集締切を過ぎてもありがたいことに応募がある。シフトが埋まりつつあり、締切を過ぎた方、事前説明会に参加できない方は心苦しくもお断りすることになった。明日は事前説明会。

2015年2月19日（木）
ボランティアの消耗品関係の買い出しは太田さんがばっちり会場ごとに揃えてくれた。界隈展の設営が去年よりハード。底冷えする旧吉田邸に安藤さんが見切り品のコロッケを持って現れたとき嬉しくて泣きそうになった。藁戸さんが一番に駆け寄っていた。笑

2015年2月20日（金）
会期前日。展示作業をしてから事務所でボランティア関係の準備をした。展示設営が終わり戻ってきた田端次長が、最後まで手伝ってくださった。感謝してもしきれない。

2015年2月27日（金）
辻並さんとショーウィンドウ展示を巡って、店舗や施設の方にインタビューした。図書館で泉野さんからほとんどのお客様が帰りに観ていかれると聞いて嬉しかった。

2015年3月5日（木）
NO-MAの朝。ボランティアスタッフがやってきて、活動記録簿に押印し道具一式を持って会場に行く。NO-MAの川島さん、片山さん、松村さん、八木さんが毎日対応してくれていて心強い。

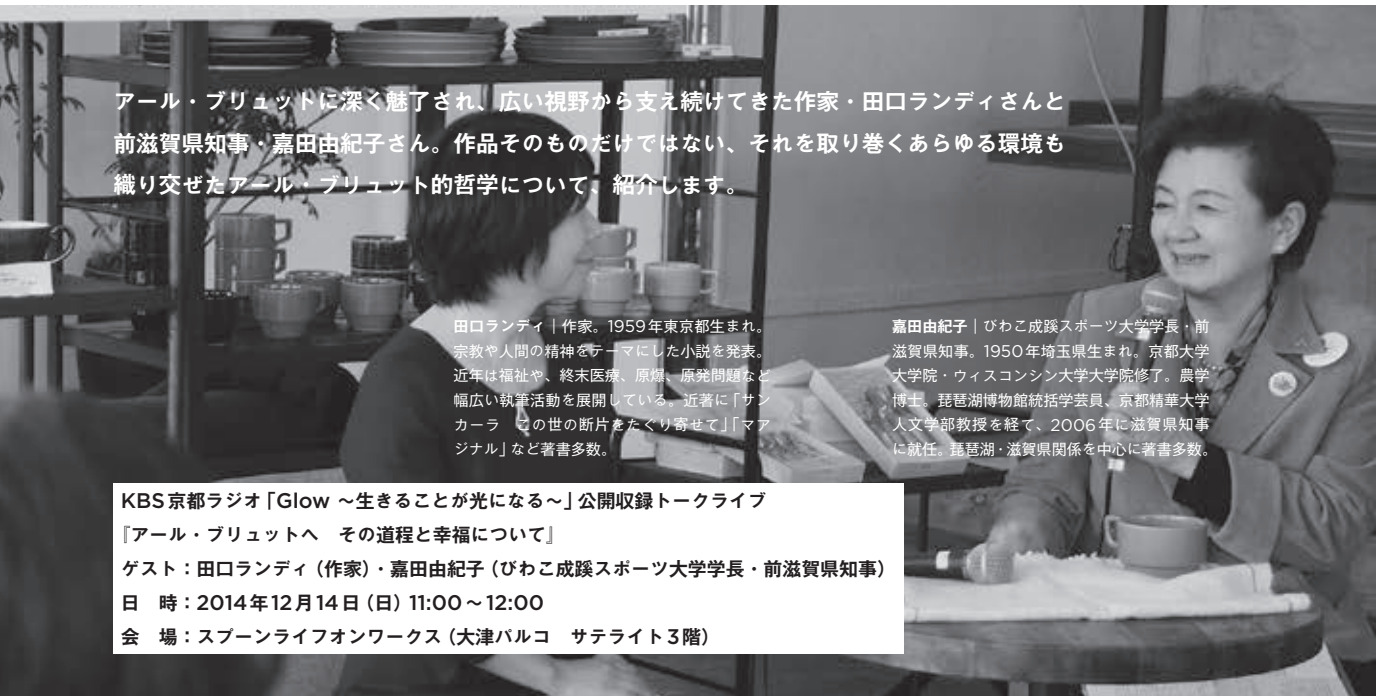
2015年3月7日（土）
ボランティアのEさんが本展鑑賞ツアーを企画して知人に呼びかけてくれたそうだ。「こんな作品つくるなんてすごい。やろうと思ってできるもんじゃない。若い人にもっと来てもらいたい」と作品を観て感じたことを周りにも広げようとしてくださっている。

Act3
「語る」

アール・ブリュットが秘める可能性は、芸術や福祉・医療分野に限られるものではありません。それは人々に、誰もが潜在的に持っている「生の衝動」に向き合う機会や、様々な領域に区切られた日常を新たにつなぎ合わせるまなざしを与えてくれるものです。ここでは、本事業と連動して制作されたラジオ番組「Glow ～生きることが光になる～」（KBS京都ラジオ）の2本の公開収録イベントの内容を通じて、アール・ブリュットが生み出す幸せな社会を展望します。

「語る」Part1

田口ランディ（作家）× 嘉田由紀子（びわこ成蹊スポーツ大学学長・前滋賀県知事）



アール・ブリュットに深く魅了され、広い視野から支え続けてきた作家・田口ランディさんと前滋賀県知事・嘉田由紀子さん。作品そのものだけではない、それを取り巻くあらゆる環境も織り交ぜたアール・ブリュット的哲学について、紹介します。

田口ランディ｜作家。1959年東京都生まれ。宗教や人間の精神をテーマにした小説を発表。近年は福祉や、終末医療、原爆、原発問題など幅広い執筆活動を展開している。近著に「サンカーラ　この世の断片をたぐり寄せて」「マアジナル」など著書多数。

嘉田由紀子｜びわこ成蹊スポーツ大学学長・前滋賀県知事。1950年埼玉県生まれ。京都大学大学院・ウィスコンシン大学大学院修了。農学博士。琵琶湖博物館統括学芸員、京都精華大学人文学部教授を経て、2006年に滋賀県知事に就任。琵琶湖・滋賀県関係を中心に著書多数。

KBS京都ラジオ「Glow ～生きることが光になる～」公開収録トークライブ
『アール・ブリュットへ　その道程と幸福について』
ゲスト：田口ランディ（作家）・嘉田由紀子（びわこ成蹊スポーツ大学学長・前滋賀県知事）
日　時：2014年12月14日（日）11:00～12:00
会　場：スプーンライフオンワークス（大津パルコ　サテライト3階）

アール・ブリュットとの出会い

田口ランディ（以下、田口）　アール・ブリュットとの出会いは、日本で最初にスイスのローザンヌとの合同展が開かれたときに、NHKの「新日曜美術館」という番組でアール・ブリュットが特集されたんですね。そのときにナビゲーターを務めさせていただいたのがご縁で、それからもうずっと大好きになり、様々な展覧会やイベントにも参加させていただいてます。アール・ブリュットは非常に起爆力のある芸術なので、それらを取り込むことによって世界が少しずつ変わっていくような力を持っている作品群なんですね。ですから、それをもっともっといろんな人に知ってほしいなと思って一応援団として協力しています。

嘉田由紀子（以下、嘉田）　私は2006年に知事にならせていただいたときにNO-MAにお伺いして、澤田真一さんたちの作品に出会って、心を揺さぶられたんです。大学生のときに研究のため女一人、アフリカで半年間暮らしていました。その暮らしの中から自分たちで粘土をこねたり、木を削ったりしている人たちと出会って、その人たちの心の動きや造形物と澤田真一さんとが私の中でつながったんです。つまり、私たちが近代社会で

失っているとっても「初源的な表現力」を澤田さんたちは持っていらっしゃるんじゃないのかと心を動かされ、福祉や芸術という垣根を超えた人間性に根差した芸術という視点で応援させてもらえないかなと考えました。

田口　私の高校時代、パルコというのは田舎者の私にとっては憧れの東京の象徴みたいなところで、パルコの広告といったらアバンギャルドの極みで格好いいったらなかったんですよね。それから時代の変遷を経て、久しぶりにパルコに来て、その入り口のところに宮間英次郎さんの巨大な帽子のオブジェが置いてあったのを見たら、「パルコ復活！」って、そんな印象を受けました。あと、久保田洋子さんの絵をポスターにされていましたが、これがまたすごくパルコっぽい。すごくキッチュでポップで、懐かしいんだけれども未来的っていう、それがパルコの宣伝戦略だった時代があるんですよ。「アール・ブリュット×パルコ、いけるじゃない！」というふうに思いました。

嘉田　パルコって本当に憧れなんです（笑）。私も埼玉の田舎に住んでいたから、その感覚はよく分かります。私はその後大津市民になり、パルコができるときに、「あっ、ようやく大津にセンターができる！」と思いました。ファッションと文化のセンターができると。さっき見学してワクワクしたのは、宮間英次郎さんの顔出し看板の作品を観て高校生がもうとても盛り上がっていましたね。また他の作品はお店の中にぴったりはまりこんでいる。例えば、子ども服のショップ・雅楽（うた）さんにある山際正己さんの「正己地蔵」。門山幸順さんのカニの造形物も島村楽器さんのエレキギターの間に展示されているんですけども、これも本当に馴染んでいる。あれも素敵でしたね。

田口　私はね、いつもアール・ブリュットの作品を見ると、うちに帰って自分も創ってみたくなるんですよ。アール・ブリュットの作品は、「これで大丈夫なんだよ、好きなようにやっていいんだよ、自由だよ」っていうことをね、こちら側に向かってすごく優しく叫んでくれる作品群なんです。だから、お店の中に展示されているのを拝見して、「ああ、おもしろいな、すごいな」と思うのと同時に、「でも、何か自分でも創れそう！」という気持ちに子どもたちや観た人がなったら、その人の表現力がどんどん湧いてくるんじゃないかと。そういうところはありませんか。

嘉田　そうなんですよね。実は、5歳の孫がアール・ブリュットのようなものを、たくさん毎日描いています。それを見ていたらおばあちゃんもやってみようかと言ってね。「私、随分長い間こういうふうに筆を持ってクレヨン持って顔を描かなかったなぁ」と思いながらも、私でもいいのよってね。この子どもたちの最初にペンを持ったときの殴り書きのような自由な絵は、やっぱりジャンルなんてものを軽々越えていくんですね。

アール・ブリュットという右脳、それを支える制度という左脳

嘉田　私たちは大人になるにつれて本当に今、不自由な時代に生きているんですよ。そして実は行政組織って最も不自由なんです。「これは福祉、これは文化、そして、これは美術館の展示」という縦割りになっている。これをなんとか外して、人間性を根本のところから掘り起こしたいというのが、私が知事としてやってきたことなんです。まさに「ボーダレス」ですね。

田口　なるほど。誰もが自分の中で区切りをしたり物事の整理をつけて何かの枠にはめていくことを習慣的にやっているんですね。これは、社会人である以上はある程度仕方ないにしても、でもそうするとね、左の脳がちょっと働き過ぎちゃうんですよ。

ジル・ボルト・テイラーの『奇跡の脳』（新潮文庫）という本があるんです。彼女は脳神経学者なんですが、あるとき脳梗塞になって、左脳が完全に潰れちゃうんです。ところが、自分が実際に脳梗塞になってみて、血がいっぱい左側にたまって右脳だけが動くという状態になったときに、右脳というのは何の分け隔てもなくすごく創造的で平和な状態で意識活動がされているということに気がつくんです。そこで、彼女はその左脳を回復させながらも、何とか右脳の勢力を維持しながら左脳をコントロールして社会生活を営むという技術を8年かけてリハビリするわけです。それによって初めて、自分は、社会生活にも適応しながら、でも、右脳の働きを十分に生かしながら、物事を判断し自由になれたという体験談が書かれているんです。

アール・ブリュットの作家たちは、もともと言語を使うことがとても苦手な人が多いん

です。ですから、そもそも左脳の制約が少ない。なので、右脳の力によってものすごく創造的なことを自由にできるのではないかと。けれども、ジルの本を読んだら、私たちだって左脳をうまくコントロールすれば可能なんです。より右脳のインスピレーションが強い作品と出会うことで、私たちはそこから移り香をもらえる、薫習される、影響される。だから、アール・ブリュットというのが私の左脳をちょっと黙らせる力があるんです。

嘉田　私たちは生まれてまず右脳を初源的に育てていくと思うんですけども、学校教育というのはどんどん左脳で科目を教え込んでくるわけですよね。もちろん社会人となるにはそれをしなければいけないんですが、左脳が肥大し過ぎてくると、今の日本みたいに閉塞的な社会になってしまう。私は、日本の組織が左脳の機能ばかりを重視しすぎてきたと思っています。例えば、建物を建てるためには緻密な設計図が必要なんです。それは左脳としてやらなきゃいけないですけども、この建物で人はどういうふうに暮らすんだろう、どんな匂いを感じながら、どんな思いを持って暮らすんだろうという、そういう右脳的な感覚を磨ける人が、意思決定の場面にあまりにも少ない。だから、ここで人びとは本当に幸せになれるのかしらというバランスを失っているのが今の日本社会だろうと思うのです。人間が持っている右と左の脳のバランスを失ったこの日本社会の閉塞感をどう破っていくかという、田口さんのお言葉に、もしかしたらアール・ブリュットが問題提起をするかもしれないなと私も感じています。

田口　本当にそうだと思うんですよ。実はアール・ブリュットが日本で発見されたのは、つい最近なんですよ。これは世界的にも珍しい状況で、ヨーロッパは日本にアール・ブリュットがあるなんて思ってもみなかった。ところが、社会福祉法人グロー（GLOW）の北岡理事長や嘉田さんのお力で、滋賀を中心にアール・ブリュットに大きなウエーブが起きたんです。例えば、アール・ブリュットの作家の中には自分の作品を自分で保護できない障害を持っている方がたくさんいらっしゃる。その方々の権利と作品の保護を最初にきっちりと法的に打ち立てた。そのことの功績によって、日本はすごい勢いでアール・ブリュット大国になったんですよね。

嘉田　実は、私はかつて琵琶湖博物館のキュレーター（学芸員）をやっていた際に、いわば作品ならざる作品をどのように権利化するかということで、琵琶湖を撮影した古写真の収集と権利保護をするシステムを作ったんで

す。そのときの経験が、今回の制度作りに生きているんですね。つまり、作品ならざる作品に対してまずは個人名を尊重する。そしてアール・ブリュットの場合、権利や経済の問題を自身で判断ができない作家さんの場合は、後見人が必要だということですね。著作権などの法的な手続き、行政的な手続きをつくり、作家さんの親御さんや周りの支援者も安心して作品を世に出すことができるようになったということです。そしてこの制度づくりは、左脳の役割なんですね。まさにこのアール・ブリュットという右脳と、それらが安心して広がる仕組みを調えるという左脳との連携ですよね。

すべてと溶け合う場として、そして哲学として

田口　私が十代の中盤から後半を過ごした頃に、アンダーグラウンドというジャンルがあったんです。その代表は寺山修司。あの当時、彼の残した作品は短歌から詩から映画から演劇までありとあらゆるジャンルに及んだんですけれども、一番おもしろかったのはインスタレーション。パフォーマンスとも言えない一つの何か儀式めいた行為をみんなと共有しその場で終わりみたいなね。例えば路上劇であったり、観客席に座った観客が逆に劇の主人公になってしまうみたいな不思議な仕掛けをつくったり、そういうことをたくさんやって時代を駆け抜けて早くに亡くなってしまったんですが。そのアンダーグラウンドというものが消えた後、非常にコンセプチュアルなアートが増えていき時代はアンダーグラウンドを忘れてしまったんですけれども。私としては、アール・ブリュットが出現してきたことでちょっとまたアンダーグラウンドなライブな世界が戻ってきているなという感覚がありまして。例えば宮間英次郎さんのようなパフォーマンス型の人間そのものを見せて喜んじゃうみたいな、それでお金にならなくてもいいみたいなところで、それをみんなが愛でる流れで、だんだんそういう才能が発掘されていけば素敵だなと思います。

嘉田　今の田口さんのインスタレーションやパフォーマンスのお話は、例えば、澤田真一さんの制作風景とつながるんですね。この対談会場にも彼の作品があるけれども、澤田さんがどういうふうに粘土をこねてあの粒粒をつけているんだろうと気になって制作現場に行ったんですが、心がぶるぶる震えました。まさに、そのライブパフォーマンスのような状況。本人はあまり邪魔されたくないだろうから、こっちはひっそり見させてもらって、澤田さんのあの目の輝きと凄まじい集中力を堪能するわけです。さらに窯で焼くところがまた、呪術空間なんです。「縄文の人もこうやって火をくべていたんだろう」と想像しながら、

2日2晩マキをくべ続ける。その間、手打ちうどんを食べたりしながら、みんながぞろぞろ集まってくる。本人は、創ってしまったらあとはもう無関心。それを周りの人たちが支えている。何というんでしょう、人と人とのつながりの中で作品が生まれてきているという、このライブ感。これがある意味でトータルとしてのインスタレーションなんでしょうね。ですから、澤田さんの作品は、栗東の山の中の観音寺という集落の火と水と土が交じり合って、その里山の空間全体がそのままインスタレーションになる感じです。

田口　ワクワクしますね。もう踊っちゃいますよ、私、火の周りで（笑）。その場に身を置くだけでクリエイティブな気持ちになってくる。だから、制作現場へ行くのは私も大好きです。

今、研究者の間で、アール・ブリュットが絵画の中でどういうジャンルに入るかとか、そういう研究対象としてのジャンル分けをしようとしている方々が多いんですけれども、実はアール・ブリュットという概念は非常に不思議な概念だと思うんです。それは、仏教などの伝播のあり方と一緒だと思うんですね。インドで始まった仏教は上座仏教という伝統的な仏教がありますけれども、それが、南伝、北伝というふうに世界に伝わっていき、全て仏教だけれども、日本においてもまた違う形の仏教が発生していったわけですよね。アール・ブリュットも同じように、その土地の文化や芸術のあり方と結びついてアール・ブリュットたりうる。そういう意味において、日本のアール・ブリュットは日本的アール・ブリュットとして、もうフランス人のジャン・デュビュッフェが提唱してスイスはローザンヌのアール・ブリュット・コレクションが発信する元祖アール・ブリュットとは違うものになりつつあるんです。じゃあ、これは絵画の一ジャンルなのかというと、そうではなくて、どちらかといえば、思想や哲学に近いものです。ですから、ボーダレスになる。アール・ブリュット的思想、アール・ブリュット的感覚というものにいろんなものが薫習されていくこの流れを変えてはいけないと思います。既成の枠組みを崩すための一つの思想になり得るこのアール・ブリュットを、様々なジャンルの方々がこれを使って新たな展開をしていけたら素晴らしいんじゃないかと思っています。

嘉田　そうですね！　まさに「ボーダレス」社会の思想がうごめく場として、滋賀・琵琶湖から発信したいですね。

「語る」Part2

きたやまおさむ（精神科医・作詞家）

精神科医で臨床心理士、また作詞家・ミュージシャンとしても知られるきたやまおさむさん。アール・ブリュットの織りなす世界観や作家の衝動的な表現行為に、かねてより関心を寄せていたと語るきたやまさんの、臨床現場の視点も交えた独自の見解を紹介します。

きたやまおさむ｜精神科医・作詞家。1946年淡路島生まれ。1972年、京都府立医科大学卒業。ロンドン大学精神医学研究所にて2年研修後、きたやま医院（現南青山心理相談室）院長を経て、2010年春まで九州大学大学院人間環境学研究院・医学研究院教授。

アメニティーフォーラム19特別講演
『生々しい何かと強迫　～なぜ、作品に巻き込まれるのか～』
ゲスト：きたやまおさむ（精神科医・作詞家）
日　時：2015年2月7日（土）11:00～12:00
会　場：大津プリンスホテル内　コンベンションホール淡海

先ほどこの講演会場の隣で開催されている展覧会『アール・ブリュット ユートピアの創造主たち』を観させていただきました。これらの作品群は、圧倒される、あるいは巻き込まれるということを経験しますので、簡単にそれを言葉にすることが果たしていいのかと、私はいつも考えてしまうんです。言葉にしないまま置いておくということが、すごく大事な時間ではないかと思うんですね。ですので、そのことについてお話をしたいと思います。

言葉以前に出会い、そこから言葉を探すこと

なぜ、このような問題意識を持つようになったのかというと、私は専門が精神分析という治療方法、あるいは心についての理論を研究したり、人に教えたり、実践することなんです。私はいろんなメディア（あるいは媒体）――音楽、演劇、絵画、箱庭療法など――が多数ある中で、私どもの治療方法のツールは言語なんです。そう、言葉にすることが私たちの目標なんですね。日本人はどちらかというと人と人とがコミュニケーションをする際に「言葉じゃないよ」という感覚を持つ方が多い。「心だよ」と。しかし、心ってまだまだ言葉にされることを待っている部分が非常に多いのではないかと思っています。そういうことで、言語化という行為を非常に価値の高い到達点として、それらを目指す治療を実践しているわけなんです。ですから、夢や幻想、あるいは失敗したことだとかいろんな出来事をすべて言葉にしてもらって、治療を行っていくというのが私どもの営みなんですね。しかし、この作品群と出会いますと、「言葉以前」、「言葉にならない何ものか」というものに出会うわけです。一方で私は、昔から作詞家という仕事をしているのでその立場からも、言葉を紡ぎ出すことと、言葉以前との間の隔たりに、この作品群の中で直面したと思っています。そして、できればそれらを言葉にしないで置いておくことができるのであれば、皆さんもひょっとしたらこれらの作品に出会いながらやがて言葉が生まれていくという状況を経験されるだろうと思うんですね。なので、一言で言ってしまえば、言葉にしないで置いておいていただきたいというのが、私が今日申し上げたいことの一つです。そのような、これから言葉が生まれていく状況はめったに経験しない。なぜなら昨今、何でもすぐに言葉にしてしまう、あるいは言葉にしてしまってから、何でそんなこと言ったんだと考えてしまうことの方が多いからです。言葉が先行して、言葉が上滑りになることを皆さんも経験されているだろうと思うんですね。私なんかも口から生まれて来たと言われたり、喋ってしまった後から「何であんなことを言ってしまったのか」と考えてしまうタイプなんですけれども、ひょっとしたら逆ではないかと。言葉があって初めてその意味を考えるという面もあるけれども、「意味があってそのための表現を模索する」つまり「言葉を探す」っていうことも、大事だなと思うんですよね。

防衛としての強迫

ここからは具体的な私の関心ごとを述べます。まずは「強迫」という現象です。皆さん、ここにある作品群に出会われたときに、細かいことを繰り返し繰り返し反復しておられるという現象に出会うわけです。正直言ってここまでやるかっていう。私たちであれば途中で止めてしまっているようなことを徹底的にやっておられる。この意味は何なんだろう。余白があれば、全部埋め尽くしてしまうこの現象は何なんだろうというふうに、心の問題に取り組んでいる私たちは思うわけです。この嵐のような強迫、終わりのない強迫と言いますか、それはもうすごく圧倒的なんですね。

私たちはこういった作品に出会った際に「おかしいな」と言う。そう、「この人、おかしい」とか、いま自分が経験していることが「おかしい」という風に感じたりもするんですが、ここでちょっと確認しておきたいのは、この「おかしい」という言葉はすごく面白い日本語だということです。おかしな作品、おかしい人、おかしなことを言っているという場合のこの意味は、奇異なとか、変だとか、逸脱しているとか、変わっているといった意味で使いますよね。あるいは、面白いということを指す。しかし、この日本語はもう一つ非常に重要な意味を持っていたんです。それは、「いとをかしげなる女」という時の意味、つまり「美しい」っていう意味があったんですね。私は、アール・ブリュットの作品は、何かそういった「美しい」というところに連れていってくれるような気がするんです。

また、ここにある作品の一群は部分が優位というか、全体というものよりも部分が大事なところがあります。鑑賞する際も全体を見つめるよりも細部の緻密さにはまり込んでしまうことが多いかと思います。そして、そこにも反復がある。時によっては、細かな部分にこだわりすぎて、絵の全体が不調和になってしまう。私たちの感覚から言うとグロテスクになることすらある。

この反復と、それとはまた違った一種の思いつきのようなものが、時々紛らわしく入り混じるので、私たちはまとまりがありながら不調和と出会うことになる。反復には規則性があって淡々とそれが繰り返されるとリズミカルで心地良いんですが、時々、人間的な、あるいは恣意的な思いつきが入り混じるもんですから、まとまりがあるんだけど不調和なんです。あるいは自由と不自由が入り混じるとも言えます。

私たちはこれらの作品の一群に出会うと、その中をのぞき込んでじっと見て「何なんだろうか…？」っていう判読を行うことになる。その時、確実に強迫が私の内側に起こる。つまり、彼や彼女たちの生み出すこの作品を通して、私たちが若干発病、発症するというような経験をするわけなんです。ちなみに、強迫行為は、日常では反復、規則、秩序、分類、整理、几帳面、完全癖みたいな形で現れます。完全主義と言われるようなものなんですよ。出かける前にガスの元栓を何度も何度もひねる、あるいはキーがかかったかどうかを確認するために何度も何度もかけては開ける。そういう強迫って、私たちの頭の中

に起こることってありますよね。それは失敗が怖い、抜け落ちが怖いからですね。

私は実は、財布を紐でつないでいるんですけど、これを見てみんなが「おまえは強迫症がある」って言うんだけど、1カ月に3度ぐらい財布を失くすという時期があったんですね。それで、紐を付けるようになったら、失くさなくなったんですが、こういうふうに几帳面であること、あるいは繰り返しきちんとすることの背後には、必ず失敗への不安や恐怖があるんです。だからそういうものの見方で作品をご覧になることは、「この作家は何か不安でこの行為に駆られているんではないか」と強迫に巻き込まれたというふうに解釈することで、私たちは一旦理解することができるんです。

しかし、ここで知っておかなくちゃいけないのは、実はこの強迫、深刻な精神病状態に対しては、「身を守る」という一つの方法であって、それを取り除くと事態は悪化することがあるっていうことなんです。私たちの中にある失敗への不安とか、あるいは不完全への恐怖だとかがあって、一生懸命完全主義になろうとする時は、この完全主義を取り去ると楽でのんきで失敗だらけの自然な私が出てくる。もっと本当に楽になりたい自分がいるという発想があるかと思います。ところが、もう一つ深刻な事態があって、それはこの強迫を取り除いてしまうと、実は背後にものすごい解体や空虚そのものがあるということなんです。そういった混乱への防衛としての強迫というのがあるんですね。そしてこの作家たちや関係者はこのことに気付いておられることがあると思うんです。つまり、この細かく細かく、みんな一生懸命描いているんだけど、この細かさを除いてしまうと大変大きな混乱が背後に待ち構えてしまう。だから、この強迫によってようやく落ち付いていられる、というものの見方がさらに必要なんです。

もう一つ、重要なことをお伝えします。強迫と一言で言っても、作家たちが経験しているであろう反復するという強迫とは、また違う病者に出会うということなんです。まず私たちの強迫には焦りがある。常に慌てている。ここにはそうじゃない強迫、つまりゆっくりと時間をかけて繰り返すという状況が存在しているんです。まるで、時間が無限であるかのような、限界を知らないというような強迫と出会うんですね。これはすべての事例には言えないかもしれないけれど、どうもそこに焦りがない。

これをどう解釈するか。繰り返し反復するこれらをドイツ人の精神科医のハンス・プリンツホルンは「秩序への傾向」と言っており、人間という自然は脈拍、呼吸、歩行のリズムに支配されて、動植物や結晶は左右対称の体が基本であり、自然界は昼夜の交代、潮の満ち干き、四季の交代といった秩序にあふれている、それを作家たちは作品で示しているんだと。この秩序の細かい反復は、こういうふうな解釈も可能なんですね。

二面性の橋渡しとしての芸術

もう一つの理解として、先ほども言ったように強迫的な表現は私の身を守る貴重な防衛である、そし

てあるいは「橋渡し」であるという発想です。これは、私が好きなイギリス人の精神科医であるドナルド・ウィニコットの考えなんですけど、私たちは内なる生々しい身体や心を抱えていて、そして秩序を要求する、あるいは言語的表現を求める、あるいは何か形になって、表現活動を求める外界との間で橋渡しを行わねばならないのですね。それはコミュニケーションと言われるものなんですけど、例えば内と外、表と裏、自分と他者、現実と逸脱、美と醜、正常と異常といった二つの面を行き来するわけです。私たちはただ人間であるのと同時に内側にはある種の動物性をも抱え込んでいるし、大人としてやっていくということは、子供である自分を内側に抱え込んでいるし、善人であらば悪人を内側に抱え込むことなるわけです。この二面の「間」で、私たちは何とか「橋渡し」をして外界と適応、あるいはコミュニケーションせねばならない。この「間」において、規則、秩序、整理、取り繕い、やり直し、穴埋め、隠蔽、修正、時間潰しみたいなもので、何か折り合いをつけていかなくちゃいけないのです。それは人間にとって一つの悲劇であり、「鶴の恩返し」のように、「本当は動物なんだけれども人間でなくちゃいけない」あるいは「社会に適応するために一生懸命生産するんだけれども、生産性の背後には傷ついた鶴がいる」という、あの鶴の姿がある。そう、あの「鶴の恩返し」の鶴女房の姿って、我々のことではないかといつも申し上げているわけなんです。それを、何とかして適応的に生きるためには、傷ついた鶴を隠して、それを表に出さないで何とかして羽を抜いて皆さんに喜んでいただこうとする、そういうことを誰もがしているんですよ。それが「橋渡し」であり、先ほど申し上げた「防衛」でもあり、ということなんです。

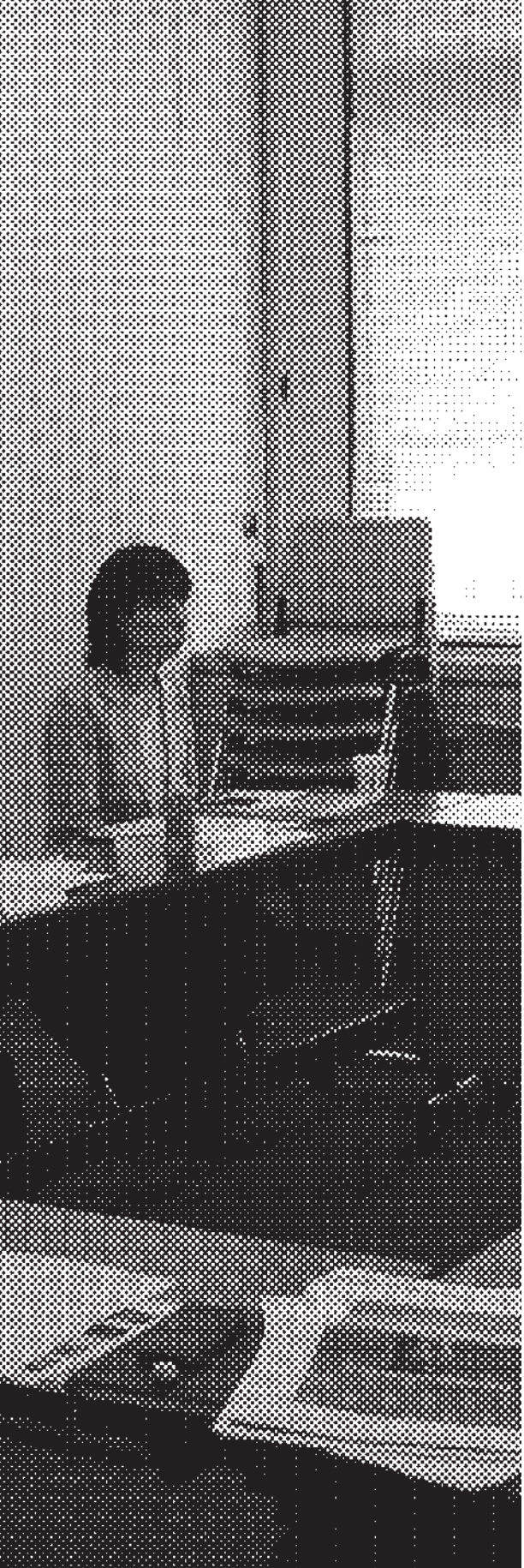
そして、私はその「間」で生まれるものの一つが芸術というモデルなんだと思っています。いわゆる高級芸術という、美術館に飾られているような芸術作品というのは、その「間」を取るバランスがすごくいい。でも、アール・ブリュットの作品は、生の衝動の方が少し優位になっている。このモデルで考えるならばですが。だから、限られた人にしか見てもらえない可能性があるんです。でも、作家たちはそんなことは知ったことではない。世の中の芸術家は大衆的になればなるほど外に適応的になってしまうので、いわゆる迎合的な作品というか、売れるために詞を書くっていうやつだっているわけですよね。みんなのために、売れることさえできればそれでいいみたいな。それは、外的現実に対する適応力はすごく高いけれども、生の衝動から遠くなってしまうんです。だって、「アイラブユー！」とか言ったって、誰もあいつらあなたのことを愛していないですよ。言ってるだけ。口だけ。そうですよね。だから、アイドルが「本当に愛している人がここにいるんです」って言ったら丸坊主にならなくちゃいけないという現実があったりするんですよ。彼女たちのようなタレントには。そういう何か生々しい衝動と外的現実の間に橋をかけること、ここからみんな誰しもが自由にはなれない。生々しい衝動がすごく激しければ、それを外的に表現するにはすごく規制をかけて秩序を作りながら表現しなくちゃいけないんです。それ

が、ひょっとしたら良い意味では洗練されたものになって現れるという理解もできるだろうと思いますね。

分類できないものを置いておける力

アール・ブリュットの作品群に出会ったとき、やはり感じるのは分類不能であるということなんです。例えばある時は「ボーダレス・アート」と呼んだり「アウトサイダーアート」と呼ばれたり。こんなにもたくさんの名前があるっていうことは、結局、名前がないんだと思うんですよ。何と呼んでいいのかよく分からない作品群なわけです。僕は「ネームレス・アート」と呼んだらいいんじゃないかと思っているんですが。それは、名前を付けないほうがいい、名前を拒んでいる。名もなき作家たち、という意味ではないですよ。彼ら彼女らには名前がある。しかし作品群には名前がない。名前がないことで私たちはしんどくなる。でも、そのしんどさを通じて巻き込まれていったら、やがて皆さんや私の中に何か理解が生まれてくると思うんです。いわゆる勉強というのは「分かった」というのが勉強なんだけど、これは「分からない」という勉強なんですね。分類できないという勉強。日本語で分かるというのは「分る」って書きますがすごく正直な言葉だなと思います。「“分”る」＝「“分”類できる」っていうことになる。つまり「“分”けられる」ということです。「あいつはこういうやつだ／そいつはこういうやつ」といったように私たちはレッテルを貼って分類して安心するんだけど、一番不安なのは、ここから向こうは汚染されていて、ここからこっちはきれいと言われているこの「間」のところに居ることでしょう。分からないんです。ここ、分けられないんですよ。でもこの線引き自体がそもそも人工的なんですね。だって別に自然界はもともと、ここからここまでが植物で、ここからここまでが非植物とか動物とかって分けられていないのかもしれない。すごく続いている連続性を、ただ人間である私たちが分類して、それでも科学や理屈で分けられないところを「おばけが出る」とか言って不安になっているわけですよね。だから、そこをそのまま「置いておける」ようになるための、せめて少なくとも心の中に「置いておける」ようになるための大切な時間、これが私にとってのアール・ブリュットの意義なんですよ。

言い方を変えるならば、こういう言い方が許されるかどうか分からないけど、私は障害者が作るアートを観るときは発症するんだと思う。私たちは、それをどこに置いていいのか分からないという強迫神経症に罹るんだと思います。置いておくことで――「発症」は言葉遊びのようですが「発祥」とつながって――何か私たちの中でいいものが生まれるんですね。皆さんの心の中に、展覧会を観て帰るときに何かが生まれる。物語が生まれると言ってもいい。理解や対話。「ああ、あれはああいうことだったんだ」と感じる。それが、私たちの心の中の包容力を大きくしてくれているんです。これが、私たちがアール・ブリュットと出会って得る最たるものですよね。「置いておく力」ができる、分からないものを置いておける力がね、私たちに与えられることがとても貴重なことなんです。



まとめ

広報の取り組みについて

川那辺香乃（社会福祉法人グロー（GLOW））

広報においては、複数のメディアを活用して情報発信を行った。
本年度の取り組みの特徴として、以下の２点が挙げられる。

様々なメディアを活用した情報発信

報道機関向けに３回のニュースレターを発行し、展覧会の見どころや関連イベントなどを掲載した。また、タイムリーな情報（アドルフ・ヴェルフリ作品の来日、展覧会の設営の様子など）はNO-MAホームページのブログやSNSで発信した。アドルフ・ヴェルフリの作品展示の様子を掲載した際には、「すごい！」というコメントも寄せられた。また、KBS京都ラジオの番組「Glow ～生きることが光になる～」（提供：社会福祉法人グロー（GLOW）、毎週金曜日21:00～21:20放送）では、展覧会の現場のレポートや、関連イベントのゲストへのインタビューなどを取り上げ、多面的な情報発信を行うことができた。

地域への情報発信

昨年度、「アール・ブリュット☆アート☆日本」では、地域の方々がボランティアスタッフとして関わり、子どもたちが登下校中にある会場の作品が気になって見に来るといったことがあった。今年度では、さらに地域住民の方々に興味を持っていただけるように、NO-MAスタッフによる手描きのチラシを作成し、NO-MAの玄関に掲示したり、回覧板等での告知に利用した。手描きのチラシは、地域の方だけでなく来場者からも好評で、スタッフと来場者をつなぐ1つのツールになったとも言える。また、スタッフ全員で1件ずつポスティング作業も行い、その中で地域の方とお話する機会も増えた。

▶ニュースレター発送
第1弾 2014年10月31日、第2弾 12月17日、第3弾 2015年1月30日

▶NO-MA公式サイト（http://www.no-ma.jp/）
関連記事掲載：20件
アクセス数：72,199件

▶Facebookページ（https://www.facebook.com/museumnoma）
関連記事掲載：56件
いいね総数：1,710件（2015年3月19日現在）

ドキュメント編集に携わって

木元聖奈（社会福祉法人グロー（GLOW））

最初のドキュメント編集会議は６月下旬で、その後、毎月1回から数回、監修のアサダワタル氏、編集の辻並麻由氏、デザインの中崎航氏と当方の職員で協議を重ねてきた。今年度新たに実施する全国公募と、昨年度から引き続き行う三つの展覧会をどう肉付けするか。当初から、これらの協議と並行して本書の構成を組み立ててきた。各展覧会担当者が、昨年度の成果と反省をもとに、今年度の事業目標の設定や成果の指標、達成するためのプロセスについて議論し、それらが展覧会企画書とドキュメント構成案の双方に落とし込まれていった。

ドキュメント作成については、事業プロセスの記録、評価の視点を明確にすることを大きな編集方針とし、そのために多様な主体（人・団体）との関わりにクローズアップする構成を打ち立てた。

事業プロセスの記録については、各担当者が毎日業務日誌に、共働先との打合せや印刷物の作成状況、展示設営の様子などを書き留めるとともに記録写真の撮影をしてきた。この業務日誌は、定期的にまとめて、部内でも可能な範囲で回覧してお互いの担当業務の進捗状況を共有することにもなった。

評価の視点はとりわけ難しい議論となり、最後までどのように設けるかが話し合われた。そもそも日本におけるアール・ブリュットは、近年さまざまな視点をもって語られており、いまだ大いに議論されているものだ。本事業では、KBS京都ラジオ「Glow～生きることが光になる～」で放送された、医療、福祉、アート等の専門家の言葉から多様な評価の視点を抽出して、アール・ブリュットに関する取り組みの可能性をまとめた他、ライターや学芸部の記者等にレビューを依頼して、事業の実際を批評してもらった。

ドキュメントの担当としては、編集者・デザイナーとの会議、公募事務局のサポートで作品受付対応や審査会への参加、各展覧会の担当者や外部の寄稿者との連絡調整などを行った。編集後記にあたる本文を作成することになり思うことは、事業実施にあたって多くの方にご協力いただいたことへの感謝である。本書の校正紙をめくりながら、公募事務局のスタッフ、展示設営や監視の手伝いをしてくれたボランティアなど、たくさんの支援者たちの顔が浮かぶ。

末筆になるが、本ドキュメントの監修だけでなく本事業全体についても助言をいただいたアサダ氏、各担当者を気遣いながら進捗状況を見守ってくださった辻並氏、本事業の全貌を明瞭かつ洗練されたデザインにまとめてくださった中崎氏に、心からのお礼を申し上げたい。

総括

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

実行委員会事務局　社会福祉法人グロー（GLOW）　法人本部企画事業部 次長　田端一恵

最後の展覧会は3月22日まで開催していた。年度末まで目一杯使って実施した本事業の全容を記録する報告書の総括として、事業全体を振り返ろうと思う。アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会が事業の実施主体である。本来であれば実行委員会として総括するべきだが、事務局であるボーダレス・アートミュージアムNO-MA（社会福祉法人グロー（GLOW））が実行部隊として事業を実施してきたことから、NO-MAの目線で振り返ることで、実行委員会の総括に代えさせていただきたい。

アール・ブリュット作品全国公募は、多くの応募を見込んではいたものの、予想をはるかに上回る作品数であったことは本書の中に繰り返し出ている。喜ばしい反面、審査結果通知、作品返却ともに当初の予定より大幅に遅れることにもなり、応募してくださった方には大変不安な思いをさせ、ご迷惑もお掛けすることになった。改めてお詫び申し上げたい。事情を挙げればきりがないが、「福祉関係者は目の前のケアはとことん丁寧に一生懸命やれるけど、それを一定俯瞰して仕組みとしてどうやっていくか考えることを苦手としている」という話を聞いたことがあり、このことも要素としてあったと自省している。とはいえ、全国には自分たちの知らない創作者がまだたくさんいるという推論は確かなものになったし、何よりその新たな作品との出会いは関係者一同の胸を躍らせた。

2年目となる大津パルコでの展示は、今回は大津パルコに入居するテナントとの共同も試みた。その場に馴染み過ぎて一つの景色として見えてしまう面もあったが、間違いないのはそこに作品があるということを知ったからこそ、普段入らない店舗にも足を踏み込めたということである。楽器店などはその好例であろう。こういった新たな世界との出会いは、作者を紹介する分野の広がりをもたらすとともに、その世界ならではの作品評にも出会うこととなり、自分たちが作品を語る言葉を洗練させることにつながったと言えよう。

全国の社会福祉の先駆的実践者、若手実践者たちが集うNPO法人全国地域生活支援ネットワーク。この団体が主催するアメニティーフォーラムと同時開催した「アール・ブリュット ユートピアの創造主たち」は、日数は短いとはいえ強い発信力を持っていた。作品の力ももちろんであるが、全国またはそれぞれの地域での発信力を持った人たちが講師、受講者とも参加しているからである。フォーラム内では、障害のある人たちはサービスの受け手としての立場である。しかし展覧会では一転、障害のある人たちが作品という媒体で発信する側になり、支援者たちはその受け手になる。一つの会場で相互性が感じられる仕掛けとなっていることも面白く、このことは野澤和弘さんが本書内で詳しく論じているので、是非ご一読いただきたい。

「アール・ブリュット☆アート☆日本2」展について、82人のボランティアとの奮闘は本書内でも一つのトピックとして取り上げたとおりである。生業としていることも、参加の動機も年齢もさまざまな人たちが、一つの展覧会の運営ボランティアということだけを共通項として一緒に活動した。動機は何であ

れ、アール・ブリュットにある程度の密度を持って接していただいたボランティアが82人いて、その方々が家庭や職場でこの話をしてくれたらそれはさらに広がると考えると、なんと心強いことか。とくにアピールすることなく、ご自身の馴染みの店にチラシを置くよう頼んでくださっていた方、遠方から来る鑑賞者が安い宿を探していることを話すと、ご自身のお宅を提供してくださった方等、会場受付以外にも惜しみない協力をいただいた。アール・ブリュットの応援団をたくさん得られたと言っても過言ではないのであろうか。

また、NO-MAには普段、受付スタッフはいるが、学芸員等企画や調整をしているスタッフは別の事務所にいる。どんな人たちが展覧会を作っていて、どれくらいの人数でやっているのか、近所の人もあまり知る機会はないと思う。この展覧会は、それを地域の人に知ってもらう絶好のチャンスになったと思う。顔の見える美術館をいかにキープできるか。82人という応援団（と勝手に位置付けてしまったボランティア）の力を今後もどうお借りできるか。これはこれから私たちがどれだけ皆さんと継続的にコミュニケーションをとっていけるかにかかっていると自覚している。

アール・ブリュットの魅力を広く発信する事業をする一方で、発信したものをどうお返しするかも大事にすべきことだと考える。展覧会の開催の様子や反響を、作者やその家族、支援者等にどうフィードバックするかである。今も開催報告は全作者一律ではなく、各作者の展示風景をそれぞれに追加して送ってはいるが、まだ十分とは言えない。展覧会に来場した作者には、届いている声を伝えることはできるが、来場できない作者には十分お伝えすることはできていない。これは飽くことなく追求していくべきだし、私たちならではの取り組みとも言えるのではないかと思う。

年度末まで展覧会を開催していたと冒頭に書いたが、今回の事業においては各事業の道程も丁寧に拾っていこうということで、事業と同時並行で報告書をつくるという試みをした。この事業の一翼を担ったスタッフは、担当した事業についてそれぞれ執筆した。私たちがこの事業を進めるにあたって取った方法、考え方をオープンにしたことでまた次へ進める議論が出来たらと思う。外部の人たちとの議論はもちろんであるが、それ以前に私たち自身が本書を読み込み、内部で議論することも重要である。

本書がお手元に届いた方には、せめて目次だけは眺めていただき、こんな報告書があったなと記憶の引き出しに入れてもらいたい。その引き出しが開かれる日は、今年なくても来年、または10年後……いつか必ずやってくると信じている。

パブリシティ一覧

11月13日(木)	LIXIL出版 10+1 web site 「「参加型アート」「アール・ブリュット」 ――コミュニケーションのためのアートと、これからの美術館のかたち」
11月18日(火)	滋賀ガイド！　アール・ブリュット ゾーン パルコ
12月1日（月）	朝日新聞 デジタル版　アール・ブリュット ゾーン パルコ展 開催中
12月4日（木）	読売新聞 朝刊 地域面　生の芸術　ユーモラス 大津で作品展
12月15日(月)	京都新聞 朝刊 地域面　アール・ブリュット 作品の魅力知って 大津パルコで展示 陶製地蔵など660点
1月1日（木）	産経新聞 朝刊 滋賀面（連載） 描きたいだけ描ける幸せ　アール・ブリュット 鼓動を象る1
1月3日（土）	産経新聞 朝刊 滋賀面（連載） むき出しの感情と波打つヒモ アール・ブリュット 鼓動を象る2
1月4日（日）	産経新聞 朝刊 滋賀面（連載） 陶芸で「戦国武将の世界」表現　アール・ブリュット 鼓動を象る3
1月15日（木）	朝日新聞 朝刊 第2滋賀面 「生の芸術」展覧会　来月から近江八幡 町屋で約1ヶ月間
1月23日（金）	KBS京都ラジオ Glow ～生きることが光になる～ 【公開収録分1】嘉田由紀子×田口ランディその1
1月30日（金）	読売新聞 朝刊 地域面　遊楽学ガイド アール・ブリュット　ユートピアの創造主たち
	KBS京都ラジオ Glow ～生きることが光になる～ 【公開収録分1】嘉田由紀子×田口ランディその2
2月1日（日）	月刊同朋2月号　アール・ブリュット作品から描くよろこびを探る
	ソトコト　近江八幡から国内外に向けて、アール・ブリュットの魅力を発信
2月4日（水）	Lmaga.jp　小吹隆文のアート男塾 必見展覧会 10本ノック
2月7日（土）	産経新聞 朝刊 滋賀面　障害者福祉などで意見交換 大津でアメニティーフォーラム　全国公募など319作品
	福祉新聞 地域面　紙製ロボ 全国公募入選 20点、初出品で快挙 展開図詳細に
2月18日（水）	滋賀報知新聞　21日から旧市街地の6会場で アール・ブリュット作品展
2月20日（金）	機関紙編集者クラブ　アール・ブリュット☆アート☆日本2展
	読売新聞しが県民情報　アール・ブリュット☆アート☆日本2展
	びわこ放送

2月22日（日）	産経新聞 朝刊 滋賀面 作品と街並み楽しんで アール・ブリュット滋賀
	滋賀ガイド！ アール・ブリュット☆アート☆日本2
2月23日（月）	ＺＴＶ近江八幡
2月25日（水）	オゥティ vol.49　3月号　キラリしが～新しいアートの楽しみ方。 2・3月はアール・ブリュットをおすすめします～
2月27日（金）	KBS京都ラジオ Glow ～生きることが光になる～ アール・ブリュット☆アート☆日本2　現場リポート
	読売新聞 朝刊 滋賀面　心に響く 生の感性 アール・ブリュット 近江八幡
2月28日（土）	大人組 2015年3・4月号　なぜ人は絵を描くのか。言葉以外のもう一つの表現
	MeetsRegional No.322　4月号 「アール・ブリュット☆アート☆日本2」固定概念を壊すピュアなアート
3月4日（水）	“【ROADSIDERS' weekly】2015/03/04号 Vol.154 ”　近江八幡の乱 ――『アール・ブリュット☆アート☆日本2』観覧記
3月5日（木）	日経新聞 夕刊 文化面　美術館ガイド「アート＆カルチャー」
3月6日（金）	KBS京都ラジオ Glow ～生きることが光になる～ 【公開収録2】きたやまおさむ特別講演 「生々しい何かと強迫～なぜ、作品に巻き込まれるのか～」前編
	朝日新聞 夕刊 文化面　浮かび上がる 74人の「生の心」 アール・ブリュット☆アート☆日本2
3月9日（月）	滋賀報知新聞　ボーダレス・アートミュージアムNO-MA 見えない世界の表現
3月13日（金）	KBS京都ラジオ Glow ～生きることが光になる～ 【公開収録2】きたやまおさむ特別講演 「生々しい何かと強迫～なぜ、作品に巻き込まれるのか～」編
3月18日（水）	毎日新聞 夕刊 文化面　アール・ブリュット展 半生注いだ想像力の曼荼羅 スイスの作家 色鉛筆画26点 滋賀
3月20日（金）	KBS京都ラジオ Glow ～生きることが光になる～ きたやまおさむインタビュー
2月25日、 3月1日、8日、 15日、22日	NHK「おうみ610」「美の滋賀」コーナー アール・ブリュット☆アート☆日本2出展作家紹介（全5回）
―	土曜は大津、晴れの日は浜大津　ほぼ土曜大津　イベント情報
―	ジャパンビデオトピックス　町屋再生

実施体制

アール・ブリュット作品全国公募　創造のカタチ、公募します

主催｜アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
事務局｜社会福祉法人愛成会
スタッフ（ボランティア含む）｜社会福祉法人愛成会（森田宏一、片山泰伸、清水芳之、椋本優花、河上舞、岡本康平、渡部紗貴子、日岡勇人、鈴木ひかり、渡辺はなか、下地和香子、大塚まりも、石井理恵、小嶋康平、伊藤陽平、鈴木結紀子、浅沼絵里子、有賀朋美、岩田妙子、玉塚充）
社会福祉法人グロー（GLOW）（西川賢司、横井悠、安藤恵多、藁戸さゆみ、木元聖奈、宮崎義哉）

アール・ブリュット ゾーン パルコ

主催｜アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
共催｜大津パルコ
協力｜滋賀県立近江学園、すずかけ絵画クラブ、社会福祉法人明桜会 すたじおぽっち、社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房
スタッフ（ボランティア含む）｜NPO法人はれたりくもったり（井上多枝子）、社会福祉法人やまなみ会（早川弘志）、有田高志、社会福祉法人グロー（GLOW）（西川賢司、安藤恵多、川那辺香乃、稲垣碧、片山祥子）

アール・ブリュット ユートピアの創造主たち

主催｜アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
共催｜アメニティーフォーラム実行委員会、NPO法人全国地域生活支援ネットワーク
スタッフ（ボランティア含む）｜社会福祉法人愛成会（片山泰伸、清水芳之、小林瑞恵、小川由香里、椋本優花、河上舞、岡本康平、渡部紗貴子、伊藤ひとみ、疋田正明、小林緑、柳田陽子、佐藤ゆかり、工藤恵子、大塚梨香、池田優子、松本文、尾川佳寿美、三輪樹、日岡勇人）、NPO法人はれたりくもったり（井上多枝子）、NPO法人ライフサポートはる（藤瀬賢祐、鴨川隆史、福島知子）、社会福祉法人スプリングひびき（宮原里美）、NPO法人ピアサポートかだん（柳瀬利江）、NPO法人信（池田信亮）、竹内清臣、山田創、原恵子、社会福祉法人グロー（GLOW）（田端一恵、西川賢司、齋藤誠一、大平眞太郎、横井悠、安藤恵多、藁戸さゆみ、木元聖奈、巽亮太、山本彩、川那辺香乃、外山直美、片山祥子、八木めぐみ、深野嘉夫、太田弥生、宮崎義哉、橋本真由美、西川法、黒川勝利、青柳優、吉田拓矢、柴田由加里）

アール・ブリュット☆アート☆日本2

主催｜アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
特別協力｜Collection de l'Art Brut, Lausanne
後援｜滋賀県教育委員会、近江八幡市教育委員会
協力｜近江八幡市立近江八幡図書館、尾賀商店、株式会社まっせ、株式会社カネ吉ヤマモトフーズ、公益財団法人八幡教育会館、酒游舘、スミ利文具店、タカモリ時計店、同志社大学政策学部大学院総合政策科学研究科井口貢ゼミ、初雪食堂、まちや倶楽部、丸重商店、NPO法人ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会、NPO法人しみんふくし滋賀、医療法人青仁会、平川病院［造形教室］、すずかけ絵画クラブ、最上町教育委員会、社会福祉法人青い鳥彦根学園、社会福祉法人湖東会、社会福祉法人しがらき会、社会福祉法人戸田わかくさ会、社会福祉法人にじの会、社会福祉法人びわこ学園、社会福祉法人みぬま福祉会工房集、社会福祉法人もみの木福祉会、社会福祉法人やまなみ会、社会福祉法人若竹会、社会福祉法人若竹福祉会
スタッフ（ボランティア含む）｜赤田美恵子、石田和子、伊丹智恵、伊東章三、伊藤喜久男、内山幸子、江角栄一、遠藤麻衣、梶本奈美、加地恭子、片木佑美、片木留美、金井三加子、川内純子、川田廣子、河辺真、川村志奈子、川村嘉男、岸本琴音、北川裕基、北林珠奈、木村美絵、熊谷眞由美、桑原拓也、小谷理佐子、小西清治、桜井奈津子、島田喜一郎、新宮寛子、杉江浩美、相馬由希、武田真也、竹間義昭、巽弓枝、谷諒次、田伏美津子、玉田茂、塚本悦子、富田淳志、虎若孝治、長岡久美子、中嶋勝男、中嶋きよ子、中島清、中谷哲夫、中出康夫、永山友加里、永山由美、西尾崇志、西川眞樹、西川真帆、西川法、西川好信、西塚由美、西山義雄、野村奈央、林佑香、林初美、原正雄、東森俊之、久木茂、平尾友佳、福島将夫、福永治夫、二見志郎、不破圭子、不破有理子、前田達彦、松本博、松本理紗、溝上聖香、宮内宣明、村松和美、森野友香理、安江嘉子、山川正續、山本咲希、川中大地、竹内清臣、他５名
社会福祉法人グロー（田端一恵、西川賢司、藁戸さゆみ、横井悠、安藤恵多、川那辺香乃、木元聖奈、片山祥子、川島てる子、松村まどか、八木めぐみ、太田弥生、宮崎義哉）

平成26年 文化庁 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業
多様な主体との共働によるアール・ブリュット魅力発信事業報告書
『アール・ブリュットへ　その道程と幸福について』

2015年3月31日発行

制作・発行　アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

構成団体：
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA（社会福祉法人グロー（GLOW））、滋賀県、滋賀県立近代美術館、
近江八幡市、一般社団法人近江八幡観光物産協会、社会福祉法人愛成会、NPO法人はれたりくもったり、
滋賀県施設合同企画展実行委員会

実行委員：
実行委員長　北岡賢剛（ボーダレス・アートミュージアムNO-MA管理者　社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）
副実行委員長　笠原吉孝（NPO法人はれたりくもったり理事長　滋賀県医師会会長）
笹山衣理（滋賀県総合政策部文化振興課主幹）
上野久美子（滋賀県健康医療福祉部障害福祉課主事）
渡辺亜由美（滋賀県立近代美術館学芸員）
木俣美好（近江八幡市総合政策部次長）
田中宏樹（一般社団法人近江八幡観光物産協会事務局長）
片山泰伸（社会福祉法人愛成会副理事長）
山田菜津季（滋賀県施設合同企画展実行委員会 実行委員長）

発行責任者　北岡賢剛（アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会 実行委員長／社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）
構成　田端一恵（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部次長）
監修　アサダワタル
編集　辻並麻由
デザイン　中崎航
写真　大西暢夫、ボランティアスタッフの皆さん、
社会福祉法人グロー（GLOW）

発行所　アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会事務局
社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
〒521-1311　滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837-2
TEL（0748）46-8100　FAX（0748）46-8228

印刷・製本　泰和印刷株式会社

©GLOW 2015 Printed in Japan

生きることが光になる
glow
社会福祉法人グロー
滋賀県社会福祉事業団と
オープンスペースれがーとが
ひとつになりました